

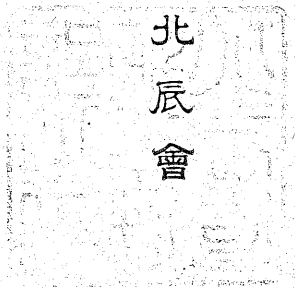
明治三十一年六月十三日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第拾九號

第四高等學校北辰會



北辰會雜誌第十九號目次

論說

ビスマルクの外交政策 雨溪學人
 現代と漢學(承前) 高橋亨
 人間義務の解釋に於ける孔耶 藤紫溟譯
 兩教優劣比較論

史傳

ラフワット(承前) 潮來
 菅公の片影 袋川

雜錄

春の七草 島定保
 スキデボスを讀む 焦鹿迂人
 如是我觀 風柳庵
 韶景錄 花樵人

文苑

和歌十五首 養廼舎、愛花、長谷川福平
 農夫 愛花
 花かたみ 此麗山人
 俳句 笹舟、饒、豐泉
 再復孫請人先生書 教授 村上 函峰
 田宮如雲傳 講師 浦井 信
 讀逍遙遊 在文科大學 九龍齊
 詩壇 秋蹟、龍山、君峰、香陽

批評

第十七號詩壇批評に就き
 一言紫溟漁郎に問ふ 春日野 鹿之助

雜報

學校衛生醫の指定を望む。日本派和歌。乞骸骨辭。
 擊劍大會概況。其他數件

北辰會雜誌第十九號

論說

比斯麥乃外交政策

雨溪學人

コルシカの英雄が、其豪骨をセントヘレナの孤島に埋てよま、歐洲の天地と初めて平和の外觀を呈するに至りぬ、當時歐洲の強國と稱する者五、曰はく露西亞、曰はく英吉利、曰く墺太利、曰はく佛蘭西、曰はく普魯西是なり、此の列強國中最下位を位する者を普魯西とあす、普や千八百十五年以來國威振らず、一たび老雄メッテルニヒの驅使する所とあり、再びシワルゼンベルクの擲槍する所とあり、普國は名は列強の一に位すと雖、未だ實際に列強と鋒を争ひ鏖を駢ぶること能はざりまあり、然るに千八百六十六年澳を破りて、紛々結びて解けざりし獨逸問題を解釋去、千八百七十年佛を擊破して巴里城下に獨逸帝國の建立を宣言し、千八百七十八年には伯林會議の半耳を掌りて歐洲の忠とあり、彼廿年前澳國に首を屈去し最爾たる普國ハ、一躍して全歐中至大至強の一大國の地位に昇進しぬ、而して何に由りて此の結果を生ずるに至りしかと、其原因一にして足らずと雖、精強なる軍隊と、強硬敏活の外交とは實に其主要なる原因とふざんばあらず、是れ余が此に聊か其の外交政策を論究せんとする所以なり、而して余と獨逸外交政策を論ずるに當りて、正に三期を區別して論ずるの便利なるを見る

(第一) 澳國に對する外交政策

一八六二年ヨリ

(第二) 佛國に對する外交政策

一八六七年ヨリ

(第三) 露佛に對する外交政策

一八七一年ヨリ

(第一) 澳國に對する外交政策

一八七八年ヨリ

一八九〇年

十九世紀の中葉に當りて、獨逸の民心之奮起激昂せり、此時に當りて一大有爲の大政治家出でて、此の人心を指揮せし、久まなく結んで解けざりし獨逸統一問題と、頃刻よりて解せらるる耳、普王フリードリッヒ、ウヘルヘルムハ八千八百六十一年に歿して、皇帝維廉の正に六十歳の高齡を以て初めて王位に上りぬ、王人どかき沈毅寛弘、夙に獨逸全國を統一し、獨逸の國威を宣揚するを以て志となす、即位の初めより主として軍政に全力を注ぎ、以爲く國の強力と名譽とは、實に整練整裝せる軍隊に據るもれなりと、王ハ兄王の如くオルムニツツ(Olmutz)の耻辱を忍ぶ者非なり、其治世の當初より其志とする所と、眞に其實力を量らし先づ獨逸に於て享有すべき正當の地位を博取せんとするにあまふかり、王の視る所に由れば、當時成立せる陸軍の組織ハ、全く迅速なる出帥準備をみし得るものに非ず、王は故を以て是が改革を舉行し、殊に長期の服役年限に由りて陸軍の勢力を強大とせんと熱望せり、王の熱中愛護せる此の軍政改革ハ、後來戰爭の結果に由りて其完全正當なることを證明せられたりと雖、當時に在りてハ、國費を要するものと頗大に、且つ貴重なる勞力を滅殺する者かりとて、國民的觀念に乏しき下院ハ、常に之が協賛を與ふることを拒みしかば、停會と解散とは頻々として起りぬ、千八百六十一年三月十八日には自由黨内閣の辭表を呈出し、九月二十三日にはホーヘンローヘHohenlohe氏の保守的内閣の挂冠しぬ、此月

於てホン、ビスマルク、シューレンハウゼン(Von Ismark Schühansen)ハ一時内閣を統攝しぬ、十月八日ビスマルクの首相兼外務大臣に重任に當りぬ、嗚呼此ビスマルクこそ維廉王と共に國家の經綸を斷行するに必要なる人物なりしかれ、余ハビ公が外交場裡に立ちて如何なる敏腕如何なる力量を揮ひしを論評するに先ち、ビ氏其人の經歷如何と、其政治主義とを略言するの必要あるを感ず、

公人となり剛毅果斷、政治界に弱點は何れにあるかを看破せるの明を有し、熱心ハ普魯西と獨逸の國權を盛大とするを以て自ら任じ、年四十七にして既に卓然として政治社會の頭角を顯しぬ、公は諸種の官職に歴任して豊富なる經驗を貯蓄しぬ、公ハ諸政府の秘密なる計劃と動機とを洞察しぬ、公は當時の錚々たる人士と交誼を訂しぬ、又諸外國の虚聲と實力とを識別することを學びぬ、されば千八百六十年に於ては、炯眼の人士ハ公を目するに歐洲第一流の政治家なるを以てし、一大反抗一大障害と遭遇するにも拘らず、獨逸統一の大業を完成せんは、必ず此人からんと信じたるに決して偶然非ざるあり、千八百四十七年の聯合議會に於て、公は極在黨の首領として、斷然國民議會に憲法制定に反對せしを以て、其名を知られ、千八百四十九年に於けるシレスツツク、ホルスタイン戰爭を痛罵して正當なる君主に抗する反亂なり、皇帝ハ鬚鬚を掠むる戰爭あり、純然たる獨逸の争闘なりと言ひ放ちぬ、渠の黨派はユンケル(Junker)なる輕蔑的異名を蒙りたり、而して公は反對者に應じて曰はく、他日吾人がユンケルなる名稱が、尊敬と名譽とを招くに至るの日あるを知らんと、千八百五十一年フランクフルト國會の代議員として、公は澳太利が獨逸

第二流以下の諸邦に對するの勢力を觀察し、又普魯西現今の位地の全然其當を得ざる者に非るゝとを看取せり、從來公のエンケル派の通情として、澳大利は謳歌しよりき、然るに是時より公と公然に秘密に澳國の敵手として猛進せり、

而して維廉王は以太利の同盟に就き公の同情心を得ざりしを以て、王は此公を以て聖彼太堡朝廷に公使として派遣しぬ、千八百六十三年の春にハバリ府駐劄の公使とあり、此に未來に好敵手たるナポレオン的人物を研究するの機會を得たり、普國は現形の獨逸同盟に由りて尤も害惡を蒙るものなり、故に出來得る限り此羈絆を脱せざる可らず、該同盟を全然倒毀するは現形を保存するよりも普國に取りて更に有益なる者なりとい、此公が政治上の事件に對する確信にして其堅固なるものと花崗石の如くありき、然るに澳國及第二流の邦國ハ、其實力如何を計算するを嫌忌し、普國の近來に不振を利用して、其實力に相應せざる高地位を獲取したりし也、されば權力は分配を一變し、及獨逸同盟を全然破毀せんとい、此を此公が全幅の精神を振ひて進行しざる方針ありき、豫算委員會に於ける比公の演説ハ人の視聽を驚かせり、曰はく普國は好機に會して之全力を集注せざる可らず、而も從來屢之を逸したるべき、普魯西の國境の政治的生活は適應すべき健康の状態を有せず、今日の一大問題を決すべきの演説に非ず、多數の決議に非ず、——是實に千八百四十八年及千八百四十九年の誤謬なり、——唯血と鉄とに在る耳、公の先見なき下院の反對に遭ひぬ、殊に豫算案に於ては激烈なる反抗を受けぬ、噫公の國民的方案の未だ其真相と看破するなきを如何せん、公は自由黨と意氣相投すること能はず、渠等の棄却せる所とあり公は全然下院の

同意協定を斷念して、公は舊時の僚友たる封建黨と其手を握るに至る、該黨は喜で公の軍政改革に同意を表し、公の志に酬へんことを努めぬ、下院ハ年々既に事業に着手せる軍備案を廢棄し、又上院の協賛しざる豫算案に反對せしを以て、比公は兩院の相容れざるを思量以外の事件を以て、「憲法の脱略」(普國憲法は兩院の協賛成立せざる場合を規定せざるなり)と政府をして法律に據らざるに於て財政を執行し得るの權を許す者ありと公言し、又同じく國債法案の非決に遇ひ、平然人に語りて曰はく、予は必要の場合に在りては之に要する費用を得能ふと、

内治に對する公の斷行と正は如是者あり、其の外國に對する亦正は如是なり、獨逸に於ける普國の位地に關して斷乎たる處置を取らんことを決心す、普國が澳國を戴ける獨逸同盟に屈從するは、公の斷然反對する所、公は獨逸に於ける精神的征服は、決して是を重大視する者に非るあり、政治上は於て獨逸人民は同情は其の顧慮する所は非る可き、比公の信する所に由れば精整強大なる軍隊の普國の希望を實行し其の實際の力量を據りて同盟諸邦との關係を建立するに當りて遙かに信憑すべき方便なきあり、維廉王が有爲の姿を以て其の經綸を實行せんとするに當り、滿廷の屑々たる大臣共に計るに足らず、兩院の議員亦王は國民的大計を賛翼するの勇氣を有せず、而して今や初めて比公を得たを、而して兩者の情は實に水魚も雷もならず、是誠は蛟龍の雲雨を得たる者、其雲蒸龍變宇内を震動するの大業を成せし者、何ぞ怪むに足らんや、余は略鉄血宰相の從來に主戦と經歷とを説明せし、余は是より進んで、鐵相が維廉王の信任の下に、澳國に對する外交政策に遷らんとす、

今や普國と僅少ある保守黨を除くの外は、自由黨に、進歩黨に擧て政府に反對し、轉々危殆暗澹たる形勢を呈せしかば、其他獨逸諸邦に諸政治家は、普國を以て共に俱に獨逸の國事を謀るに足らず、故に伯林内閣を除き、別に自ら獨逸の憲法を制定するの渠等の義務ありと信じ、殊にザクセンの首相ボイスト(Börsch)は周旋奔走尤努め、己れ構案を呈出して澳太利及獨逸諸邦の贊翼を求めり、是れ普國の獨逸憲法制定を顧るに違なかるべしを信じて、固より人情の常而かも大澤既又蟄龍の蟠るを知らざりし也、

さて此獨逸憲法問題を實行せむが爲に、着々其準備の歩を進むるに當りて、比公がヘス Hesse 公國の問題を處断せしむに誠に晴天の霹靂なりしは、是より先だ、ヘスの撰擧侯と澳普兩國強制の下に、千八百卅一年に發布せられ、千八百四十九年に更正に係れる法律に由りて其國會議員の撰擧權を執行すべきことを許認したるは、然るに侯と心私に不満を抱た、新議會の通過する諸條例に裁可署名することを拒絶しぬ、比公は特使を發してヘス侯に宜く議會に對する調和的精神を以てせざる可ざることを要求し、若し其要求を聽かざるは於ては、普國政府は已むを得ず其改良の意思を達せんが爲め、他のヘス家王族をして位を繼ぐしむべしことを脅迫せし、是時に當りヘス侯は其諸近親と相争ひたりし也、故に以て己を狂者にして統御の任に堪へざることを宣言せらるの結果を來さんことを恐れ、比公は要求に屈從せざるを得ざるに至りぬ、是比公が一小部に對する一舉手一投足の小事業耳、然る共二三十年以來、諸邦の君主に對えて無限の尊敬を表せしむ、是二三十年以來普國の大臣の執事來れる秘密に政治主義を以てありし也、然るにヘスの事件は

比公の政策は、決して此舊套を墨守するものに非る事を天下に表明したる至大の結果を含有えたり也、然る共久しく臣民の厚望を失ひ、又歐洲の輿論に據りて攻撃せられたるヘスの一小國に對して、かゝる強硬な處置を取るは僅少の勇氣を要するに過ぎざるを固より分明の事情たり、さき共獨逸一大史家ランケ氏が其英國史に於て、十七世紀に於けるチャールズ一世の非國民的治世を論じ、豫算權を有する下院と調和を得ざるに當ては、政府と務めて外國との紛議を避けざる可らず、何と云へば外國と戰爭を惹起して、多額の經費を要するに當て其目的を達せんと欲せば、必ずや反對黨に許多の權利を讓與するか、或は國王乃股肱の大臣を犠牲に供せざるを得ざる也、今や其國民は擧げて其内閣を反抗する時不當て、普國は何を以て獨逸に於ける精神的征服を成功することを豫想せることを得べきか、而して比公が斯る境遇の下に立ちて、坦然として英王チャールズの如く二重體をなすを敢てせざりぬ、是實に比公の比公たる所以にして、又當時の社會が轉た驚訝したる所以なりとす、前述せる如く、彼澳國のバイエルン、サクセン、ハーヘル、ウルトンベルク、ヘス(撰擧國)ヘス(大公國)ナッサウの八國政府の聯邦議會 Bundes tag に於て、各獨逸國會と、各委員を撰出して全獨逸を爲めに憲法を規定すべしと論ずるに際し、比公は斷然として此事件に反對し、千八百六十三年十二月伯林駐在の澳國公使カロリー (Gräfin) 伯に後來普國乃澳國に對する態度を公言して曰く、兩國間の交誼は將來益親密となるの、或は益不和とあるかハ必然避く可らざるの形勢あり、何となれば、貴國が北獨の諸中邦を援護して、普國に抗するの政策を連續するに於ては、澳普兩國は相絶つべしを得ざるに至る可ければなりと、カ

ロリー伯と比公は已れ確信を明言して曰く、閣下の意は正に之を領せし。然れ共、此は澳佛兩國の間を戦端を開くと假定せよ、貴國は必ず我國を援助するからんと、比の澳國が斯る大過謬に陥らざんことを要求しぬ、普國と澳國の一層の友誼を表するに非ずば、普と澳國は敵と同盟するに躊躇せざる可きよとを斷言しぬ、カ伯は若し澳國が普國に許すに、獨逸第一流の地位を以てせば、澳と世界に於ける最高の地位を失墜せるの結果を生ずるに至らんと、比公は冷淡に答て曰く、貴國は宜しく政治の中心とブタペスト (Buda Pest) ハンガリーに在り) に變移するは如かずとの忠告を與へり、嗚呼是比公の一場の空談には非らざりし也、一時の虚喝に非ざりし也、然れ共加伯の一びは之を怪み、一びの之を疑ひし也、普は積衰積弱の餘勢を受け、澳は積盛積威の餘勢に乗ず、當時の普國の真相を解する者、卓眼の士に非れば能はず、然して普の對澳政策の益強硬とあり、益明白とあり來り、議會の普國代表者ハ唯十七票 (聯合議會の投票權は澳帝普王が五票、五ハ王ウヰル王、クテン大公國各一票其餘の三十二邦二邦乃至ハ邦合して一票の權を有す) に由て連邦の憲法變更に反抗し、斯かる召集法に由りて會合せる代表者をして、憲法を變更せしむるは是却て舊時の憲法より一層不適當乃憲法を顯出するに至るべし、故に獨逸事件を決定するに有効なる分子ハ、獨り國民より直接に撰舉せられざる代表者ある耳、斯る國會が組織せらるる者とせば、普國は是に對して重大の權力を許與するに躊躇せざる可しと公言せり、此實際澳國に對する強硬の言語は連邦議會の議員を動かしぬ、彼八國政府の憲法變更案と一票の差小由りて否決せらるぬ、(千八百六十三年一月廿二日) 二日の后比公は回文を以て彼澳國公使と往復を公示せぬ、彼曩はエルフルト國會の仇敵となり、又自國の國會をかくも尊

敬せざる國務大臣が、尤も民主的獨逸國會の組織を主張して、澳國以下七政府の提案を破毀し、りまよ就て、獨逸の人心が愕然として氣を奪われし亦、宜かりといふべし。是實に比公が澳國に對する外交政策ハ第一勝利なりとす、

千八百六十三年二月八日は實に比公が獨り獨逸人民の反對を引起したるれみなならず、又全歐の輿論に排斥せられたる外交上の舉動をなしたるの時なりき、何ぞやポーランド反亂に就き魯西亞と條約を締結しむる事即ち是也、魯西亞のザア、アレキサンデル二世 (Zar Alexander II) が波蘭に對する寛大の處置よりして、千八百五十九年以來以太利獨立の事件ハ刺戟されたる、波蘭愛國者の所業ハ、端なく魯西亞及波蘭の爲は不幸なる結果を生じたり、夫れザア及魯相キーロポルスキー侯 (Wieropolski) が波蘭の農民を奴隸の境遇より解放せ、波蘭の貴族として波蘭の政治を掌らし先たる計劃と、尋常の事情に在りては必ずや良好の結果を生じたりしからん、然れ共、佛帝ナポレオン三世が頻に以太利に於ける國民主義を獎勵し、又同時に波蘭の僧侶と貴族とを煽動して、波蘭に回復を欲せしめ、歐洲の輿論ハ專攻主義の張本たるザアニコラス一世に由りて千八百三十一年以來頗る苛酷の待遇を受けたる波人に對して同情心を引起しぬ、又龍動と巴里に於ける波蘭移住者は、英佛の援助を頼みて其不幸なる本國民を鼓舞作興しぬ、社會黨ヘルゼン及バクニン Herzen Bakunin は以國の共和黨マツチン Mazzini の説を奉りて、波蘭に貴族子弟を糾合して、秘密の反謀を企てぬ、ガリバルデー及カルボナリー黨 Garibaldi, Carbonari が、北部及中部以太利に於ける成功を願望して、波人は亦魯國に於て同様の手段よりて同様の成功を收めんことを空

想しぬ、波國人がかくも以太利の事件に感激せられ、歲月と共に其運動の益強烈となれり、魯相キーロポルスキーが波蘭人民中、新兵制を施行せんと志たるは、正波蘭反亂の導火線となれり、羅馬教の信仰と國民的激昂との此反亂に當る可らざる乃決心と勇氣とを與へたり、千八百六十年中にモミロスラプスキー *Mioslawski* 千八百四十八年佛蘭西革命の首領 氏は、其反亂の主動者たり、是時に當て普國政府は其普領波蘭を監督を嚴行し、又魯西亞と共同の運動をなさむの目的を以て、千八百六十二年二月八日魯と秘密同盟を締結しぬ、是に於てか歐洲の輿論のみならず英佛澳の三國政府の普の舉動につれて憤懣しぬ、何とあれば波人其損失せる權利を回復せんとするの舉動の、獨り魯の利害を關する耳、普は徒波人の國民的動作を妨害する者なりと信じなければあり、外國の普に對する舉動も正に斯の如し、況んや獨逸に於てをや、一月十日に召集されたる普國の國會は、尤激烈に此處置を以て暗黒なる保守主義を以て攻撃し、遂に五月廿七日に於て國會を突然解散されしを見ても其の反對論の盛なりしを想翌するに足らん、獨逸は統一を以て自任せる國民協會 *National-Verein* も又普國內閣舉動に反抗し、五月二十五日の會議に其反對の決議をなしぬ、協會の首領たるコーブルグ *Koburg-Gotha* のエルネスト二世は澳國と相結で獨逸の統一問題を決せんと盡力しぬ、今や比公の四面合圍れ中に陥り共にする者の唯維廉王ありし耳、唯陸軍大臣 *ローン Roon* ありし耳、

彼千八百五十二年一旦沈靜に歸したるシレスウ シヒホルスタイン問題 は關する紛議は、今や丁抹王フレデリック七世の死去に由て再び歐洲の問題となり來ふんとす、普國の今や此の好機を利用して平生の志を遂すべきの秋かざる可らざる也、而して其結果必ずや夫れ澳國との一大衝突を免る可らざるの固より當時の形勢を徴して避く可らざる勢たり、比公は明豈に之を知らざらん、夫れ魯の猖獗なる波蘭の反民を壓伏することを得、又異議を供せる西歐の強國と交渉するに當て、普國の確固たる援助に魯に取て利益を與へたるの幾何や、從て魯帝が普國に對する感謝の情も亦推知するに難からず、普既に魯に甘心を得むか、獨逸問題を決するに當りて、普國の縱横發揮又后顧の恐を有らざる、是蓋し比公の内外の攻撃紛々たる中に立ちて、毅然と志て是を成して疑はざりし所以ありし也、

澳國政府は全歐及獨逸の人心に正に普國を離れたるを見たり、而して此機を利用するの計を取りまも流石に澳國の機敏なるを見るに足る、澳帝フランツヨーゼフ *Franz Joseph* 澳國の利害と一致せる憲法を制せんか爲に、千八百六十三年八月十六日メエン河上はフランクフルトに獨逸の諸君主を召集せぬ、卅四郡中卅郡は此召集を應じぬ、され共其欠席したる小數中於て、獨逸君主中は樞軸たる普國王ありしハ尤注意すべきの事件なりとす、是を以て普王を出席せしむるか、己むなくハ太子として之に代て出席せしめんと非常に苦心盡力せらるり、普國王の當時アルプ山下の温泉ガスタイン *Gastain* 地に其病を養ひたりしが、澳帝は八月三日自ら駕を擡げて其出席を要求しぬ、然れ共普王は固辭して曰く、うゝる奇怪の問題は精密に内閣との協議を凝らしたるに非るよりと、決して君侯に由て決定せらるべし者に非ず、澳國の提案案に決して満足を表する能はず、又うゝる重要なる會議にして一旦失敗することあらば、臣民に對する君主の尊嚴を害す

る者なりと、澳帝亦強ふる能はず、更に卅郡の君主と一致きて。普王の親友なるザクセン王を代表者として普王れ出席を促したり、普王を是を以て殆ど之を辭するものと能わざるの勢を立至りぬ、比公は是時王と共に温泉に在り、王に迫りて曰はく、王もし出席せば乞ふ臣に骸骨を給へと、普王遂に斷然此乃王侯會議 *Fürstentag* に出席を拒絶せしめば、澳帝と自ら此の議長として、其余の王侯と其會議を開始しぬ、諸君主と殆んど一致して澳國の議を賛成しぬ、其要領は中央主權と獨逸諸邦の國會より推選せる委員に保存し、澳國も之を議長とすべきこと、及獨逸の君主と臣民との紛議を決せんが爲め高等法院を建設すべしと云ふ在り、九月一日最終の會議に於て諸王侯は普王に一書を送りて、曰く此全會一致決議に對する普王の同意は全獨逸國民の幸福安寧を結果するに至らんと、然れ共普國政府は決してこの決議に同意する者非ず、是が抗議の草案は九月十五日普王の龍覽に供せられぬ、此抗議書は尤も比公が政治家たるの本領を發揮せる者、請ふ其一端を摘出せんり、……獨逸國民真正の利害と、全國民の直接選舉に由て組織せられたる國會は由りて而して代表せらるるを得べき者也、斯る國會に對してこそ普國政府は獨逸全体に利益に關する者の外、何物をも犠牲にするの誓保を與へんと欲す、……直接選舉の原理に由り、人口の多少に應じ獨逸全体の選舉自由組織されざる國會に在りては、重力の中心に決して獨逸以外を逸するはと無るべく、或は全体より分離せる一部に偏すること無るべし、故に普國は完全なる信用を以て此會議に加入するはとを得べし、何となれば普國々民の利害と必要とハ、全獨逸利害及必要と必然分離す可らざる同一の者なればあり、……此の抗議の結果たる實際澳國の改革案

をして水泡に歸せしめたる、何とあれば、普國の主張せるが如き國會は、畢竟澳國の不利益たればなり、十月三十日に於て澳國政治家は公言して曰はく、普國は成功する改革を妨害しうる罪人なり、何とあれば諸王侯全一致の決議に満足を表するの寛大を有せざればなりと、是れ實に比公が對澳策に於たる第二の成功なり、然り而して普澳の關係は次第に隔絶するに従ひ、兩者の關係は次第に紛糾し來る、又是己むざるの勢なりと云ふべし、

現代と漢學

(承前)

高橋 亨

明治維新の大革新は、七百年來の國勢を一變して開國の昔を復せしめ、三千餘萬の大和民族の再び此に雲霧を排いて日光に衣被し浴せ、實に窮天極地日本國土のあふん限りは、青史に口碑を炳煥として磨滅す可らざるの絶大慶事あり、偉事あり、然り而して、吾人は竊し其の血を流し、尸を曝ぎ、糾紛雜揉、溟濛として國歩の岌々たる歲月の、より長の……惜すんばあらず、換言すれば維新の大革新は、其の經過の余りに容易迅速にして、當局者并に國民は不動の感銘を與ふるは不足ざりき、是を蓋し固より大和民族の粹にして、忠君愛國の至誠の、七百年地に没せる如くにして、而かも常に細縷として國民の眞腔子裏を盤蛇し、機を見て升天せんとする者ありしに職由せずんばあらずと雖、今日より之を論ずれば、歐洲北米各國の大革命の、非常に劇烈長久ありて、其の結果の之に伴へ、新生面一躍して起りて、邦家繁盛の基を置るに對照して、維新の大革新に恨あくんばあらず、

己に維新の革新の甚く容易かど一爲め、國民に大覺悟を與ふること能はず、其の一旦熄んで、洋風採用といふに至るや、飄翻相争ぬて之を摸し、自家の立脚地を等閑視し、滔々として極端に奔る、是に於てか前述輕佻浮誇、小猜大疑、忘本奔末の風尙靡然として起り、天下志士の憂虞日に熾かり、終に天機は天の一方に洩れて曰はく、第二の維新、第二の維新と、而して其初先や纔も隱々の聲に過ぎざりしが、漸を追ふて高大となり、今や其の聲或は有形あり、或は無形に、有識者の間も哄然たるを致す、即ち第二の維新は、既業に五年若くは七年前に始まりて、今猶駭々として行はれつゝある也、例へば十五世紀宗教改革の如しか、多くの史家は、千四百七十年ルーテルの手に始まりと稱すと雖、而も其の宗教改革ある世界の大勢は、決して彼ルーテルの作れる非は非ずして、十字軍舊教全盛時代の後、法王の威信漸く弛み、舊教の信仰傾き初めしより、既に己に、無形無聲の裡に醗酵され生長しは、ありし耳、

第一の維新は大權の歸正を作りぬ、而かも第二の維新は風尙歸正を以て起れど、蓋し文明とは、決して、科學日に開け、發明月に起り、社會片人の文字なれ者なき智識の發達、是を之れ謂ふも非ずして、君々より、臣々より、父々たり、子々たり、夫々より、婦々たり、長々たり、幼々たり、師々たり、弟子弟子たり、朋友朋友たる人文の至明、是を之れ謂ふあり、開シヒリセシヨ化といふ、決して、車馬縦横、高屋麗邸、美裝眩服の外觀の華耀、是を之れ謂ふに非ずして、萬象を開成し、諸色を化し、物として收斂ざるを、器として用ひざるを、物象は皆化、是を之れ謂ふなり、哀矣哉、第一の維新と、其の時間艱難れ余りに短少にして、充分の改革の成立するを許さざりし

爲め、遂に本を棄て末を奔り、文明開化の眞象蕩然として去り、社會の何れの偶にも、僞非文明開化の獨り得々として跳梁跋扈するを見る、是に於て第二の維新起りて、人文の至明、物象の皆化を鼓吹して、大和民族をして虎吞狼食の列國競争裡に、特り卓然、眞個至和至醇の黄金境に優遊て、理想の天國に到らしめむとせ、

第二の維新は要するに、明治初年の洋風呑下の弊風を矯正するに在れば、從て其れ本旨は、日本を以て盡く往古の武士的風尙を返さむるが、將た又、洋風と國粹とを調和して、此に新國粹を建設するに於て二途に出でざるべし、換言すれば洋風の採用は之を現代の者に留めて、只之に大和國粹を加味するか、將た又、洋風調和と云ふは度外視して、一意に純櫻花國々粹の古を返さんかの二途として、而るも約言すば、日本國粹の古といふを、四千萬同胞の頭腦に沁透せしめて、自己の立脚地を固かりしめんことを務むるあり、是の爲めにして而して國粹保存之起り、是の爲めにして武道の復興し、是の爲めにして而して國史編纂之成りぬ、而るも漢學獨り、論者の所謂陳腐なと迂遠なりといふを以て、世に無視さきて黙々たるべきなり、

X X X X X X X X X X X X X X X X

大綱あり重さ千斤、編む大綱を以てず、以て大蛇蛟鯨を羅すべし、然も其の甚だ粗大あるを以て、鳥雀常鱗と、巧に其の網穴を脱して終に捕ふる能はず、象あり重さごとく山丘の如く、力萬牛を眇す、若し夫を棟梁の材、萬馬首を廻す能はざる者、或は大巖巨石山の如き者あり、彼乃容與之を挽く、而るも其の極めて巨大ある爲め、一車を挽かば一夫を載せては、終に瘦馬の疾死に如かず、

大材は大綱あり、大象なぞ、小材は罟なり、瘦馬あり、小事業に在ては大材なれが如く、在らずして可なる如く然りと雖、一旦風雲地を騫いて起と、邦家の休戚疑ふべしとなるま及では、爛然の輝を放ちて、四海をして昭回の光に衣被せしむる者は、大人の材是なぞ、大材の乏し死百代其乃恨を絶たずと雖、現代より甚しきとなく、小材は跋扈古來常に其の軌を一にすと雖、現代より勝るはなし、而るも平日大材の爲す所は恒小材の指嚇して迂遠と呼び不敏と誹る所ざるを免さず、何とされば、彼等は綱を以て鳥雀を羅し、大象を以て一車を挽けりなり、南洲翁曰く、命もいふず、名もいふず、官位も金もいらぬ人の、仕未は困る者あり、此の仕未に困るものらでと、艱難を共にして、國家の大事の成り得られぬあり、サレモ、サ様の人は、凡俗の眼の得られぬゾと申さるゝに付き、孟子の天下は廣に居と、天下の正位に立ち、天下の大道を行ふ、志を得ば、民之に由り、(即ち其の大は協へばあり)志を得ざれば其道を行ふ、(尙其の志を得ると死は如くす)富貴も淫る能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、と云ひしを、今仰せられし如きの人物にやと問ひしかば、其の通り、道に立ちたる人かたでと、彼の氣象の出ぬ者あり、

人を相手にせず天を相手に拵よ、己を盡して人を咎めず、我誠の足らざるを尋ぬべし、(尤迂遠)

漢學が、人生の當行當踏の道を、尤正直に解説指示する、實踐的倫理學プラクティカル・インテリゲンツあることは、論者乃言の如しと雖、其の機變を教へず、奇道を告げざるが爲め、現代に適せずといふは、論者は其れ現代

小材は跋扈を憂へざるか、漢學の人を迂遠ならしむと雖、亦能く人をして大ならしむ、所謂欺く小義を以てそれば欺くと必しも難からざるも、鄭の子産の奴に欺かれ者、取て以て例とすべし、昔者有饋生魚於鄭子産。子産使校人畜之池。校人烹之。反命曰。始舍之圉々焉。少則洋洋焉。悠然而逝。子産曰。得其所哉。得其所哉。校人出曰。孰謂子産智。我既烹而食之。曰得其所哉。得其所哉。

嗚呼今の人多くの校者あり、小材なり、南洲所謂對天底は大材の出現を促すに、子産の欺かれたる所を以て鼓吹するに在る耳、乞ふ我が現代日本四千萬人として、少しく迂遠ならしめよ、少しく愚からしめよ、少しく不敏ならしめよ、區々する策略普通を云々するは、時勢を知らざる者の言耳、正直の首と神宿り。公明の前に敵なし、南洲曰く、

作略は平生致さぬ者ぞ、作略を以てやりたること、其の迹を見るよ、善くらざること判然して、必ずしも有り有之者なり、

作略を平生致さぬ人にして、始めて大作略を行ふを得べし、校者の作略吾人よ於て何かあらん、南洲の言是ある哉、是ある哉、

論者又曰く、漢學は陳腐あり故に學ぶに足らずと、滔々者流の言をして怪むは足らずと雖、陳腐なるよと、此を二様に解釋し得べし、既に充分研究し盡されて、又研究の餘地を容れずと云ふと、其の研究し盡されしや否とを問はず、時代の古めかしく、所謂流行後れ、時代晚れといふこと、の二者あり、而して漢學は何の種の陳腐に屬せるか、日新の學問既に開けて而して、漢學は

行はれざるハ之を研究し盡されぬといふを得ず、朱氏王民の研究を以て、直に漢學研究の絶頂なりとするは、是即ち陳腐の論あり。未だ哲理的イデオロギカルにも、科學的サイエンティフィックにも研究の洽らざる者、曷ぞ研究し盡されしと斷ずるを得むや、既に漢學の陳腐なることが、陳腐の第二の種は屬する者なりとすれば、論者の論打破するの要を見ざる者耳、日本古文學は研究は、豈に又現代日新の科學に對して、到底時代後きたるを免る、能はずきて、而のも其研究の、終は廢す可はずとすれば、漢學の研究も同様なりと云はん耳、況んや又現代の風潮の弊害は、舊を釋ぬるは過るに在らずして、新に奔るの急噪なるに在り、新奇乃思想の少に過るを憂へずして、舊來に根本的思想の缺乏するを憂ふる時代なるに於てをや、是は於てり、予心私りに今の漢學不振原因に察する所あり焉、維新乃革新に際、達識者の破舊更始を求むるの急あるよりして、争ふて古學を棄て、洋學に就くや、颯颯新を揚げて舊を貶す、滔々たる當時者流、亦附和雷同して、妄に漢學と陳腐あり迂遠なりと云ふ、而して彼輩自ら達識者に魔魅されたりを知らざるあり、因俗習をあり、今に至りて猶去らず、未だ四書の講義を聴かず、未だ五經の一頁を繙くずして、咲々焉彼れ陳腐なり迂遠なり、漢學の智識は太約にして可也、漢學畢竟文字を識るの具耳、他と其の説く所の如き、平々凡々の事、固より禪の高妙なく、耶蘇の熱誠なし、見よや今の儒者ある者の迂遠なるを、陳腐あるを、嗚呼漢學の陳腐なり迂遠なりと、食はず嫌ひの笑ふべきは、太閤の麥飯好例ならずや、然らば則漢學なる者は果して奈何なる學か、仁、義、忠、孝、禮、智、信等、四角四面の文字の外に、何の主張あり、何れ所説ありや、請ふ予をして少しく漢學に就いて語らしめんと、

伏羲の仰て象を天に觀し、俯して法を地に察し、鳥獸の文と地の宜しきとに觀、近は諸れを身に取リ、遠きは諸れを物と取リ、以て八卦を始作きてより、漢學即孔子教の端は既に發せり、嗚呼其の由りて來る所や深く且つ遠矣、北師の野生、謏劣を以て叨りに之に馭々するは、上の列聖、下の衆儒は罪せざる、所實に淺かざるを知る、然りと雖、死馬の骨亦千金す、名馬の端を濟せばあり、古人曰はく乞匭クハより始めよ、敢て胸中の停函を盡して孔子教の我觀を説かんとす、

第一、孔子教の起源、

第二、孔子教の本体、

第三、孔子教の所立、并に變遷

第四、孔子教の結果、

第五、結 論、

第一孔子教の起源をとり、第五結論に至りて、庶幾くは自家の所信を述べ盡き得むか

第一、孔子教の起源、

埃及の多神教は、耶蘇の唯神教を生み出せり、亞刺比亞の四分五裂、甲奮乙攘は、亞刺法王教を喚起せり、孔子教は支那に起れり、其の終に支那れ物たるを明かり、

孔子は周の末世に人あり、王道衰遲し、禮義廢壞し、強弱を凌ぎ、衆寡を暴へ、天子威なく、方伯連帥權を失ひ、道德の行はざるを憫む、故に周流して聘ふ應じ、其の道を行はんとすを冀ふ、

既にして衛より魯に反て、其の道の終り用ひられざるを知る、故に五經を追定めて道と萬世に説く、孔子教成れり、孔子常に曰はく、堯舜を祖述す、堯舜の遺志を傳ふと、則ち孔子教は第一の起源と、堯舜歟、彼れ堯舜の奈何なる人乎、書に曰はく、

曰若稽古帝堯。曰。放勳。欽明。文思。安安。允恭。克讓。光被四表。格于上下。

曰若稽古帝舜。曰。重華。協于帝。濬哲。文明。溫恭。允塞。玄德升聞。乃命以位。

誠に圓滿無瑕、人間理想は權パインヒューマン現、孔子は祖述すと稱する所以なきは非ず、而して堯舜に位を禪るに曰はく、

咨爾舜。天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮天錄永終。

舜の禹に禪るに曰はく、

予懋乃德。嘉乃丕績。天之曆數在汝躬。汝終陟元后。……………慎乃有位。敬

脩其可願。四海困窮。天錄永終。

又帝舜常て諸臣を會して歌ふて曰はく、

敕天之命。惟時。惟幾。

曰とく天之曆數、曰はく天錄、曰とく天之命、堯舜の常に競々業々として天を是を畏敬せたり、故に曰はく、堯舜繼天立極(大學序)、堯舜の天の道を祖述し、天の志を施ける也、則ち孔子教第二の起源と天是あり、天の何ぞや、白虎通に曰はく、

天者何也。天之爲言鎮也。居高理下。爲人之鎮也。

然りと雖、是れ既に孔子教化したる天の解釋あり、天の眞リケラレミニオン義、固より天也蒼穹也、空也、奈何にして蒼穹なる意味よりして、白虎通乃所謂の鎮也、居高理下、爲人之鎮也、といふに轉り至りか、是れ孔子教の起源を索求する第一の要路なり、

冒頭己に云へる如く、孔子教と支那に生れたれば、終に支那の物たるざる可らず、支那の地勢(勿論本土を謂ふ)、西の摩空の連山、終古に雪を戴いて不動の城壁をなし、東に怒潮澎湃の大海に劃され、北は胡沙漠々として黄草矮樹偏に千里の目を悲ましめ、南に瘴癘の蠻地、鬼魅妖怪出沒し、雪祭岑々、八十里山、馬鞍山、蜿蜒として之が交通を絶は、四方天然に屏域する處、不盡に河江滾々蕩々、一秒時に百四十萬立方英尺の水を流し、灌漑する所の沃野茫々百五十萬方哩、黍麻垂々、牛羊蕃々、太古人智の未だ發達せざる時に於て、既して牛養の途を眺ひ、先づ黄河の南岸に部落起り、漸く南下して、楊子江の北岸南岸に及び、伏羲、黃帝、堯、舜の時代は、人口猶稀少、偏に黄河は北岸南岸の世界第二の膏野一帯の地を占有して、僅に楊子江の北岸に達せんとするに過ぎず、此の時に當てや、人力幼稚なれば、草末を闢くも機具備らず、肥料の方を知らざれば瘠土に在ては生養れ途なき、而かも其の一に飢餓を免れ、存養の樂を致して、一家の計を濟すを得るは、全く黄河の灌漑の、沃土を眺ひて人力に代るに因る、是に於てか黄河を徳とするの念は油然として生ず、而して其の黄河や、常に在ては舟棹の便を與ひ、灌漑の惠を資ひ、至徳云ふべきなしと雖、一旦霖雨天下黒く、水源水溶くるに當ては、蕩天滔地、濁浪空を呑み、堤防を破碎し、丘岡を嘗々、鼉作り鯨怒り、人民昏墊え、昨の稻麥青青萬里に懷を爽にせし者、今は則ち

泥濘漫々、凄絶慘絶、肝胆共に慄と、是に於てか黄河の神威の可畏可怖の念勃然として起る、實
は黄河の不可思議あり、靈怪あり、我等の生命財産一も其の手中に握ると、乃ち戦々競々其の怒
に逢はんことを恐れ、神として祭り、歳時に奉祀す、所謂天然崇拜是なり、此の念や未だ宗教
と稱する能はずと雖、亦一種精神の印象を賦與して、其の發するや天地の萬象盡く皆我
偉大の勢力ある如くに思惟され、各州の大山を撰て各州の鎮とあして之を祭り、太山を以て
國の鎮となし、天子巡狩して親しく之を祀る、而して此の天然崇拜人、仰て天を望めば、一
一暗、明は織塵も隠るゝ、おと能とず、暗に之山河も認むる能はず、一晴一濕、一寒一暑、雨
ば河水増し、旱すとば河水減ず、日月星辰輝耀して爛然仰ぎ看る能はず、至大至廣、黄河も太
も、皆曾て其の覆ぬ所を出でざるを見、此の天或は森羅萬象の主宰は非る歟の觀念蓬々として起
る、以爲らく、天にして我は好意を表さん、黄河平穩に、山嶽靜かあり、天おして我を惡ま
んか、迅雷風冽、洪水山崩、相踵で臻り、吾人々類の種を滅せんかと、是に於てか宗教既に成り
て、人民の安心立命訖れり、

此の時に當り、英雄傑俊の士、嘗て黄河の害を治めて人民の心服を得るや、族長乃ち起れり、伏
義、神農、黄帝、堯は族長中の傑物(史記堯本紀董仲舒賢良對策に曰はく、堯は諸侯より起る)な
り、深く人民の性情を察して其の弱点を看取え、人民に臨むに天を以てす、故に李斯嘲て曰りく、
古之五帝三王。知教不同。法度不明。假威鬼神以欺遠方。實不稱名。故不長久。

固に當れり、常に天命といひ、天録といひ、天の曆數といひ、以て人民制御の柄を執り、之を左右
使役せるあり、故に堯の施政の第一着手は、羲和をして天象を司らむるあり(書經堯典)、天象
ある者は、敢て直接に施政の緊急の事故に非すと雖、當時の人民の、視て以て最重事とする所な
ればなり、時勢英雄を生ず、英雄又時勢を生ず、是に於てり人民信じて以爲らく、天は此土を作
れり、天は人間を此土に生ぜり、而して伏羲、神農、黄帝、堯、舜を命じて、自代て此土此人
を治めしむ、天の眼かくして視ざるなく、耳かくして聽かざるなく、口なくして言はざるなし、
天の惠覆とざるなく、天は威震はざるなく、人々欺くべからず(書經盤庚)、即ち
所謂、天者、居高理下、爲民之鎮也、是の故に伏羲、神農、黄帝、堯、舜と天に繼て極を立てしむ
り、是の故に天の曆數己に在るあり、至仁至武は天の本体にして、五帝は之を祖述せるあり、
蓋し人間思想の發展は、常に無意識より意識に、現實より理想に、退守より進取に、空想より實
地に進む、既は無意識的に天の廣大を見、意識的に天を畏敬信憑するに至る、既に現實的
な天を畏敬信憑せしは、理想的に天を畏敬信憑するに至る、既に退守的な天を畏敬信憑せしは、
進取的に天を畏敬信憑するに至る、既に空想的な天を畏敬信憑せしは、實地的に天を畏敬信憑
するに至る、黄河の仁徳と威武とよ由り天然崇拜者とあし人民は、天の至大至廣を見しより、
天然の主宰として天を崇拜せり、五帝出てより天なる現實を化して天なる理想を形成し、圓滿
無缺の大勢力となせり、初め天を崇拜するに過ぎざりしが、進で天道を取て我物とあさんとせ
り、前きに只心に於て天を崇拜するに過ぎざりしが、進で實地に顯をに至れり、堯舜の天の曆數
汝が躬に在りといふを以て、九五に大位を潔然舜禹に譲り、古往今來、萬國無儔の美事を濟せる

ハ、豈に空想より現實に進めるの明証に非ずや、
是に由て之を觀る、黄河も天然崇拜を喚起し、天然崇拜の天教(イブニスム)(若し謂ひ得べくんば)、天教を堯舜祖述之、堯舜を孔子祖述し、此に孔子教なる大哲學完成なり、我故に曰はく、孔子教の眞起源ハ實ニ汪洋する黄河に在り、

第二 孔子教の本體

韓退之、焚ゆるが如き熱血を空に向て吹くよと三斗、散つて文をなす、原道千四百余言、老佛を排するや絶叫して曰はく、

其所謂道。道其所道。非吾所謂道也。

孔子教の本体は、韓子れ所謂吾所謂道を説き、吾所謂道を脩養せしむるに在り、然らば則ち吾所謂道と如何ある道ぞ、孔子繫辭お於て喝破して曰とく、

一陰一陽。之謂道。

是れ之の七字、空に轟立して嶮々、千古孔子教眞道の定義を確定す、陽ハ天なり、陰ハ地なり、一陽一陰ハ天地の運用なり、天一ふび運して地一たび運す、之を道といふ、一陰一陽之を道と謂ふと雖、一陰一陽は直ニ道に非ず、道は空相アブストラクトなり實相コンクレット非ず、一陰一陽を離れて、若かく一陽一陰する所以の者、即ち是と道也、故に道の天地網縷として化成する時よりして、既に髣々然として存す、故に孔子又曰はく、

一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。

假に善と名くと雖之れ定名ならず、道は布帛ハれ如くならず、曷ナく善惡あふんや、僅ニ名くと即眞を失ふ耳、若し強いて名けんと欲せば、惡と稱する亦可、至惡と稱するも亦可、道は天地の自然、故に其の發するや到る處として天地の間に調和せざる所をなし、孔子假に説て善、至善と名つく、多少の絶對アブソリュートの意味を有すればなり、而して之を具象ニ著せば性とある、性之物に賦する所の者なり、故に中庸に曰はく、

天命謂之性。率性謂之道。脩道謂之教。道也者不可須臾離也。可離非道也。

孔子教れ道とは、天地の自然(或と約して天といふ)是あり、之を萬物に賦與スて性と成る、性と天固より一体なり、故に道は性に由て具象にさる、而して道は本体虚象は偏に性に率ふに由て之を見るを得、天の天スカイある如く、道といぬも道ウチあり、性の行く所之と道となす、天と性と道と三体に於て而かも三味ドライインヒカイト一体あり、

孔子教ハ絶對ニ天(或ハ大極といぬ)ある根元を立て、之が萬象の源泉ニと稱す、天の運用ハ性の行く所に於て發現す、即道あり、故に道の本原天に出て自然と一体、可もなく不可なく、善もかく惡もあし、往く所として在らざるをなく、爲す處として見れざるをなく、上天の載は實に無聲無臭なるも至矣、故に孔子繫辭に曰とく、

仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣

道は天地ニ塞る、沒理想にして絶對アブソリュートなり、人々自己の理想を以て之を見る、故に仁者之を仁などといふ、固より可なり、智者ハ之を見て之と智といぬ、固より可あり、衆人之を日に用て知らず、

固より可なり、可なりと雖終に驢鞍橋而已、道ハ仁に非ず、智に非ず、日用の事ハ非ず、乃至道とすべきは亦道ハ非ず、命ず可らず、名づく可らず、既に仁といふ、仁ハ不仁と相對して而して后に見ゆる、道ハ絶對なり、既に道と絶對なり、既に智といふ、智ハ不智と相對して而して后に見ゆる、道ハ絶對なり、既に日用事といふ、日用事ハ不日用事と相對して而して后に見ゆる、道ハ絶對なり、既に道と不道と相對して而して后に見ゆる、道ハ絶對なり、故に君子の道即眞道は鮮し、君子ハ道鮮しと雖、道ハ性ハ率ふ耳、君子の道たるへた物ハ萬物皆具有し、具有して而かも知らず、或ハ知りて而かも完うする能はず、是に於ての聖人道を説き道を脩せしむ、眼を放ちて天地を觀ぜよ、天の時ハ怒らざるに非ず、地は時ハ暴らざるに非ず、其の怒る亦自然、其の暴る、亦自然、故に鳥獸草木、山川日月星辰、森羅して、一として在らざるべた所にあるのかく、一として無うるべからざる所にならぬか、其の怒る暴る、所以の者、亦尽く道かど、善惡不可不焉くにあらん、自然は平和かど、自然は至善なり、吾人はを中和といふ、子思曰く、

喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。中也者天下之大本。和也者天下之達道也。致

中和天地位焉萬物育焉

中和されば大千世界調和あり平和あり、何ぞ況んや區々人間界をや、常に和樂融々、所謂黃金世界なり、天國なり、人間性の上よりいへば、無差別平等にして、皆中和するべき者ありと雖、性といハ換言すれば先天的認識力に過ぎず、人間機能の根原あり、其の一發して制することなくんば、此に中庸を失ふ、其の中庸を失ふといふ亦性の用よきて理に於て背く所なりと雖、天地乃自然ハ非ず、一

陰一陽相調和する眞道に非ず、是に於て聖人道を説き道を脩して中和を脱することなかからむ、而かも其の道に背くを制する所の者、亦性に外ならず、何とされば人性ハ心の一元かまばかり、故に程子曰はく、

嘗語韓持國曰。如說妄說幻爲不好底性。則請別尋一箇好底性來。換了此不好底性。盖道卽性也。若道外尋性。性外尋道。便不是。聖賢論天德。盖謂自家元是天然完全自足之物。若無所汚壞。卽當直而行之。若有小汚壞。卽敬以治之。使復如舊。所以能使如舊者。盖爲自家元是完全自足之物。若合脩治而脩治之。是義也。若不消脩治不脩治。亦是義也。故常簡易明白而易行。

而して一元天より出でし者にして、奈何よして或は聖人と稱して大智聰明、或は凡人と稱して教を須ちて而して后知るか、是即ち先の

仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓日用而不知。

と云へる者にして、孔子斷つて氣稟の清濁に繫るとある、陰陽の氣の清濁を受けし者ハ聰明睿智、氣の濁れるを受りし者は鈍頑あり、換言すれば二氣の尤善く調和せる時ハ氣尤清く、調和を欠きし時の氣濁るなり(予は敢て此に留るべし、何となれば、此の以下は科學者の研究ハ屬するを信ぜらればなり)要するに其の物の先天より后天に移る際に於ける、一刹那の狀況に基く者よして、禽獸草木となり、萬物の靈とある、亦此理に外ならずして此れ畢竟天の絶對沒理想にして萬能萬能の母なる小繋る、朱子曰く

蓋自天降生民。則既莫不與之仁義禮智之性矣。然其氣質之稟。或不能齊。是以不能皆有以知其性之所有而全之也。一有聰明叡智能盡其性者。出於其間。則必命之以爲億兆之君師。使之治而教之。以復其性。

孔子の教之毫性外に道を求むるに非れば、只人をして其の性の古に還らしむる耳、蓋し人間の中和なる能はざるは、譬へば水の流れて下きに就くが如き、皆水おして、泉よりして流れて海に至るまで、終る汚ることなくんば、何ぞ人力の爲を煩さんや、而して水や皆流るゝふと僅にして直に濁る、其の流るゝこと愈々遠くして愈々濁る、而して其濁ること如何に甚しと雖、其の元泉に至りては、則ち常お皓々として曾て濁らざるなり、水にして湛然其の源泉を動かさずんば、何ぞ微塵れ濁の來る所あらんや、我一意我性を守らば、道を脱する所の者焉くよりか來らむ、

孔子曰く

我道一以貫之。曰誠而已矣。

子思曰はく

唯天下之至誠爲能盡其性。能盡其性。則能盡人之性。能盡人之性。則能盡物之性。能盡物之性。則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育。則可以與天地參矣。

孔子脩道之法終生説いて唯一誠を止る、誠とは何ぞ、不欺也、事々物々毫釐の假欺を容れざるなり、獅子象を撃つに全力を用ひ、兎を撃つに亦全力を用ふ、是の全力即至誠なり、能く至誠なり、故に能く性の命ずる所お率て、餘地を容れず、性外餘地おられば、水の琉璃盤上を流るゝが如し、濁何れよ

りか來らむ、然りと雖。若かく脩道は要は至誠などと説くと雖、亦靈龜尾を曳り、耳を掩ふて鈴を竊むを免さず、性の本体元と無名など、之は千變萬化をなさしむと雖、卒お無名なり、人間出てより種々の説を立て之を命ず、命せりと雖曾て皮相を透て真相に説到ること能はず、人間到底絶對没理想れ思想并に文字を有せず、只纔に最も近しと信する思想と文字を以て之を見とす耳、孔子は至誠を以て最も道に近しとなし、取て以て教の本来となす、至誠といふは説く所お從て、無爲とあり、真空とあり、乃至離相となり、象罔となる、

老子曰はく

天地之間其猶橐籥乎。虛而不屈。不動而愈出。多言數窮。不如守中。是以聖人之治、虛其心。實其腹。弱其志。強其骨。常使民無知無欲。使夫知者不敢爲也。爲無爲。則無不治。心經に曰はく

觀自在菩薩。行深般若波羅密多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。

莊子曰はく

黃帝遊于赤水之北。登乎崑崙之丘。而南望還歸。遺其玄珠。使知索之而不得。使離朱索之而不得。使喫詬索之而不得。乃使象罔。象罔得之。黃帝曰。異哉。象罔可以得之矣。

真空といふと無我也、天地と我と一体かれといふにして性の元に還れといふなり、性の外一物を容れしむる勿れといふなり、即至誠あり、無爲といふは大天地の自然に放任して我を離る勿れと云ふあり、即所謂與天地參あり、至誠お外ならず、離相といひ、象罔といふと、形骸の念を離れて太初

の古に還れといふあり、即性を持して失はざれといふなど、固より至誠かど、則ち愛といひ、歸依佛神といふ、亦終に至誠の外を脱せず、

説いて是に至りて孔子教の本体の多少の明亮を致せるを信ず、孔子は實に天地の大調和に視て萬物一貫の道を發見し、人間氣稟の異なるを視て道を説き、道を以て道を濟ふの方を講じて一至誠小歸したり、以上本体に於て、老子莊子固より異あらず、佛教耶蘇教亦差違なかるべしと信ず、孔子教の本体は此に確定すと雖、其の所立に至りては他教と全然異なる所ありて存す、(未完)

人間義務の解釋に於ける孔耶兩教の優劣比較論

藤 紫 溟 譯

牛津大學支那語及支那文學教授

ゼームス、レッジ氏 原著

Professors of the Chinese language and literature

in the University of Oxford, and formerly of

the London Missionary Society, Author of "The

Religions of China," etc. (1815-1897)

譯者小序

吾人れ不肖豈に敢て此大問題を紹介するの能ありと曰はん、吾人の淺識何爲れぞ此作物翻譯の手腕ありと曰はん。今更喋々論ずる迄もあらず、翻譯れ難き決して創作に譲らざる者あらず。彼創作に在りては文字を驅り、詞藻を馳せ、縱横筆を舞はして兎も角も其思想を發揮し得べしと

雖ども、翻譯よ於ては即ち大に然らざる者あり。凡て美文と曰はず、論文と曰えず、これが翻譯を企つるに當り、徒らふ其章句の末に拘泥することなく、能くその原意を咀嚼了解して首尾一貫の義理思想を自家腦中のものと一般なるべからず勿論、又能く原作者苦心れ所、并其本領に那邊を存すべきは、宛も之を掌上を見るが如く、而かも譯字妥當を得、段章詞句に間に於て、陰然原作者の面影を驅逐して咫尺の中に彷彿たらしめ躍々之を讀者の心目に傳へ得るに至り、始めて翻譯の實を全ふせる者と謂ふべし。若し夫文彩詞藻に託し擅に我意を挿さみ、反て原意を没却し去るが如きは之と何とか曰はん。去りて多少意を修辭に留むる事なくんば又爲めに或は原意を誤り、原作者の面目を汚すを死を保せず。是實に翻譯事業の至難なる所以ありとす。是を以て博雅堪能の士尙且つ翻譯に向ふて躊躇おた能はざる者あり。況んや吾人の微力に於てをや。何爲れが自ら好んで此至難の事業を企つと曰はん、唯研學の一助として之を試むと曰はんの、と。

本書題して "Christianity and Confucianism Compared in their Teaching of the whole Duty of man" と曰ふ。往年倫敦府某書店の發兌にかゝる "Present day Tracts" なる Series の一本あり。今の京都同志社長横井時雄君嘗て亞米利加お遊びし折此書を購ひ歸りて之を本校教授某法學士に贈られたり。然るに某教授又た僕お示めすに本書を以てし、切に翻譯の擧を勧められしかば、先づ試み借て一讀するに着想奇警、立論雄偉、分らずながら大に余の心を動かす者あり、乃ち教授の言を従ひ此に大胆にも翻譯を思ひ立つに至りたれど、唯顧みて茫然自失する

ことわるれみ。譯文の誤謬、文字の不穩など多々あるべしは、余の自白して憚らざる所、讀者幸ひは僕の淺陋を棄つることかく、大叱提撕の勞を惜み給はずんば譯者の幸榮何者の之に加へん。

本論の著者レグ翁支那の經典文學を翻譯するに當り常に孟子の語、不以文害辭、不以辭害志、以意逆志、是爲得之、を取りて卷首に題したると聞けども、今僕が筆を取りて此語を反復する能はざるを悲しむ。(聖書は引用等誤あらん事を恐れ括弧を用ゐて出所を示めすと爾曰ふ)

著者ドクトル、レグ翁の小傳

翁は歐州第一の支那哲學者として、四書五經の翻譯者として名聲を歐米の文壇に轟かし堂々又支那の保護者を以て自任したる最高齡の博士なまき。翁は蘇格蘭の人、一千八百十五年アバーデインに生れ、千八百三十五年二十一才にして同大學を終へ、更ら進んで神學校に入りて神學の奥底を叩き、千八百三十九年即二十五歳を以て支那マカオに來りて支那語を修め、千八百四十二年英清條約成る及び香港に移つり、此に留まるゝと三十有餘年其間一意宣教に任に従ひ、傍々支那經書研究の希望を完ふし、四書五經の原書及びその翻譯書を完成出版せり。千八百七十五年六十一歳にして本國英に歸るや、牛津大學ハ氏の爲光ふ支那語學の講座を設け翁を以て其教授に當らしむ。爾來廿有一年間銳意支那哲學文學の研鑽に従事して盛んに後進を誘掖せり。現に我國知名の士ハ一氏は薰陶を受けし者廿余名ありといふ、其學界に貢獻せる所甚だ大なる者あり。エディンバラ大學、ケンブリッジ大學、牛津大學ハ氏に名譽學位を呈

し、米國エール大學とりは又神學博士に稱號を贈りたれど、翁之に對し未嘗て謝狀を發せざりしと曰ふが如き、超然名利の外に立ち、恬談敢て意を介せざるハ、輕浮ある外人中又稀に見る所あり。踵で牛津コーパス、クリスタイ大學のフローニ撰ばれ印度インスチチュートの評議員となり、ローヤル、エシアチック、ソサイテイ(亞細亞協會)の副會頭を推されり。氏は鏤鏤八十の高齡を以て尙ほ未嘗て一日も校業を怠ることかく、昨年十二月上浣例に依り公開演舌をもなし、人をして其老健に驚かししが、僅々數日の病を以て藥餌其效を奏せず、遂に八十三歳の名譽ある歴史を殘みして易簣せり。誠に學界の爲に痛惜すべし。否此學界の明星を失ひたるを、當に惜しむべきのみならず、學界に向ひ一大影響を生たる者と曰ふべし。依て同地マンレスフィールド大學に於て莊宏なる葬儀を營せしと曰ふ。

翁自撰の漢氏名あり理雅各と曰ふヤコブ(雅各)ハゼームスの羅句語にして理之その姓レグを縮稱せしなり以て如何支那流に傾けるのを知るに足らん。

氏の事業として出版せられたる翻譯書甚だ多し。即マクス、ミユラー翁に依りて世に公せられたる者の中東方聖書集には書經、詩經、孝經、易經、禮記、老子道德經、莊子、太上感應編、清淨經、陰符經、王樞經、日用經、林西仲評莊子數篇、薛道衡老子廟碑、蘇軾莊子詞堂記等あり、傍ら司馬遷、班固、列子、韓非子等の諸説をも引用評論せり。其他支那宗教、支那景教碑等譯文及法題三藏佛國記の譯等ありて世に流行する。翁の氣魄本領もと經書、子類百家を網羅して之を翻譯し尽くすに在りし事と常々翁の口にせる所なるが、殆んどそれ大業を終へたる者と曰

ふべき。尙ほ翻譯已に終りて出板に附え得る者には離騷、三教平心論とあり。遺稿は出板を亦
遠きに非ざるべしと曰ふ。吾人乞ふ鶴首きて之を待たん。

本論の要旨 (Argument of the Treatise)

論者の此に所謂全量として基督教と孔子教とを間に比較論究を企てたるにはあつざるあり。
論者之嘗に人間天賦の道德上精神上の状態、并に基督教の救世力即宗教としての實際的方面より
基督教に向ふて論評を加へざるのみならず、單に此兩教が如何に人間に向ふて完全なる義務
を觀念を鼓吹するの論点に於て比較を試みんとせり。

基督教義の所説に依れば、人間乃完全なる義務は實に愛 (Love) なる一字の中より包含せられて洩
す所あり。然り彼基督の愛は誠は吾人に向つて愛の模範標準を示めしたる者にして、又彼乃
一能は愛他觀念の一動機を吾人に與へざる者と曰ふべし。此愛ある者各人に服従、自治、克己
の美德を鼓舞振作するに於て其功蓋し鮮少なざるべし。基督は言ふ從へば基督信者は完全无
缺の人とせざる可らずと。畢竟基督教は益々各人の智力を増進し品性を崇高からしめんことを
教諭する者なり。

孔教之人に教ふるに人生行路百般の關係に於て各人の義務を實行すべき者ある事を以てせし。
元來孔教は道德上の自然を尊び宛も之を以て人間天賦の本然なるが如くし、而るも人世義務の
云爲を宗教的制裁と訴へて決行せざるあり。又其拜神の禮の初先單に君主を拜するに止まると

しも、宗教上人民は慧敏なる性質の、彼等が以て人間義務の綱領骨子とせず忠孝の一端として、
遂に父母祖宗を拜するに至れり。今孔子教の通則と基督教の金科玉條とを取て比較對照する
に當たり、幾分后者の辯護せられざる跡又蔽ふ可ざる者あり。而して孔子教の教義に於て敬虔
の欠乏せる事并に宗教的觀念の曖昧なる二点の悉く本論に於て扶摘論評し盡くされたり。
要之基督教孔教に比して一頭地を拔く其宗教上の義務を確守し、上帝は照鑑咫尺に在るを信
し、依て以て人生に天職を完ふし、社會に盡くす所あらんとするにありと云々。

本 論

余は今孔耶兩教の教義を以て此兩教の比較的價值を品定し得べし一は重要なる論点を擇取し、
之に依て以て少く論述する所あらんとす。而して此兩者比較論の根據として余の擇べる此問題
は實に兩教の優劣を決するに足るべき關係を有せるに拘らず、孔教は此論点に對して殊に便宜な位
置に立てる觀あり (何んとあまれば本論の凡て實際上の材料の之をすて、顧みず單に理論上より立
論しさればなり)。兩教の人間處世の状態方法に向ひ各其教義に従ふて世人を啓導し、其所説又甚
だ同トウとざる者ありと雖へども、本論の讀者は容易に、能く吾人天賦の本性を展開發揮して之を
完成し、又人をして善良ならしめ、幸福なかしむるに於て、兩教中孰れも果して多く適切なる資質
を帶べるやを論斷し給ふかんと信す。

次に掲ぐる所乃者の設ひ幾分模稜茫羊の憾なきにあらずと雖へども、誠は又孔教の奧妙なる眞理
の一端を啓示せる者なり。孔子曾て曰く、人能弘道、非道弘人也。 "Man can enlarge his prin-ciple"

of conduct; it is not those principles that enlarge man;" (Analects XV.28.) 之に依て此を觀れば孔子の理想なる、人は自身を支配すべき如何なる組織制度よりも一層高大なる者にして、其善惡良否を斷定すべし位置に立つべきは勿論、或必要の場合に接する時は自ら進んで其欠を補ひ、之をして益々完美ならむべしと曰ふにあらず。余は今此孔子の言を標準とし、之に依りて觀察を下し、孔耶兩教が果して人間の健全ある義務に關して、何を訓へ何を語たり、又何等の典章を垂れるやを論究討論し、讀者をして此兩教中孰れか正、孰れり否なるを斷定せしむ、若又兩者共に眞善なりとせば更らに一步を進んで孰れか一層善美なるべきかを語らしめんことを欲する者なり。

此兩教を比較評論するに當たり、吾人をして先づ基督教に就て、少しく論述を試み、所謂其特質なる者を發揮せ、如何に人間に義務に解釋を下したるやを略述せしむ。余は又實に本論の序次に於て然かあるべしを信ず。蓋し我讀者諸君(歐米に)は必ずや凡べて己に基督教の何なるを熟知し給ふべければなり。而して今余か此論題に依り基督教に就て些云々せんと欲する所の者も決て讀者の耳目を風動する如く新奇の立論引照を爲さざる者には非ざるあり。然るも余が又強ひて此陳套の舉に出づる所以の者誠に止むを得ざる者あつて存す。即今特に此に基督教を掲げ來て讀者の心神を警醒鼓舞し、併せて又讀者の記憶を喚起し、此既知の知識を藉りて下に簡述せんと欲する孔教の教義は對し讀者をして容易く之を辯識理解せしめんの微意に出でざるのみ。何者か果して然らば基督教乃教も人間に完全義務あるべしや如何。

此疑問は對し人は必ず左のヘブリエー先德(Hebrew Preacher)の言を擧げて之れに答ふるならん。

(Eccles. xii. 13) 曰く、「吾人をして全事局の終結を聞かしめよ、敬畏すべし上帝よ、上帝と信じてるの訓戒を遵奉せよ、是實に完全なる人間の義務あるべしなり」と。此れ如くヘブリエー先德が「上帝の訓戒」(the commandments of God)を説破するに際し、必ずや彼の胸中には現時吾人の稱道する所謂「十訓」(The ten commandments)の理想を懷抱し一事又疑を容れざるべし。而して此「十言」(Ten words)はヘブリエー、バイブル中に存する所れ者にして、神は之に依つて彼シナイ山邊幼弱頼るる國民の爲め、其治國の法制を約示せる者なり。是等訓言中よりモーゼスと自身其綱領を次の二言に表はせし「爾は汝の神なるエホバーを愛せよすべての汝れ心と精神と力とを以て」(Deut. V.5)と又「爾は汝自身の如く汝の隣人を愛せよ」(Lev. XX.18)なり。

吾人が本論に於て基督教に就て云々する間は、前段モーゼスの言を目して所謂猶太法律は要略あることを稱説すべしと雖へども、基督彼自身も亦實に此言を發しり。在昔彼曾てパリセウス派の一法家より一大疑問を受けし時、彼之に答へて曰はく、(Math. XX.86)「爾曹は汝の神ある上帝を愛せよ、凡て汝の精神と、心情とを以て。是誠に至大至要の訓戒にして之に亞げる者も、汝曹其隣人を愛するものと猶その身を愛するが如くあるべし」と曰ふにあらず。此二訓こそは凡ての法律と豫言者の依て以て淵源歸着する所なれ」と、然らば基督と上言に於て又敢て猶太法典たるモーゼスの垂教を採用することおかりしが、抑又彼の authority に依て是を反復する事おかりか。

去れど吾人の人間義務の綱要を述べたる前節中の第二義即ち自身の如く其隣人と愛せよとある語は、元來「爾曹他人の兒女に對して些か猜忌の情を挾む可はず」の下文にして其意も所謂國家的にし

て宇宙的性質を帯べる者非ざることを耳せり。去り乍ら吾人の此狹意義の性質が又次々掲ぐる如き、基督の下なる廣意義は説明即宇宙的應用の性質と寸毫れ矛盾なきことを確信する者なり。廣意義の説明とは即ち基督が山上の訓言 (Matt. v. 43) に於て宣示せる「去れど余は汝を告ぐ汝須らく其敵を愛すべし」と曰ふが如き一步を進めたる解釋是なり。而して隣人の定義如何に就ては、眞摯敬虔なるサマリタ人が基督に向ひ「然らば果して誰をか隣人と稱すべき」との疑問に對して基督が比喻を設けて之を教へたる如く若し人ありて吾人は同情、助力を要むる者あらんか、其人種、宗教の如何を論せず、吾人は吾人の隣人として之を敬愛し、滿腹の赤誠を擧げて、之を扶助し、之を親愛せざる可ざるやと。

此れ如く基督の教義に依れば、人間に全義務と全く唯愛 (Love) ある一小字の中を包含せられて洩らす所あり。詳言とせば「法規の充塞」(The fulfilling of the law) 即隣人を愛せよと訓言を完行するにあり、否基督自身は行爲と實は此法規以上に出で讐敵すとも之を愛好したりしなり。而して神の愛ある事不關してはモーゼスよりも、寧ろ又モーゼスの口を藉りて語られたるエホバ自身は行爲より以上の愛と到底又得て望む可からざるやと。去れど吾人が隣人を愛すべし事に關しては、吾人教祖の宣示したる箴戒よりも寧ろ福音書中於て剴切周到に縷述し盡くされたるを見る。基督嘗て謂らく「予は今汝曹に向ひ汝曹が他人を愛すべし所の一訓言を與ふべし、汝曹猶ほ余が汝を愛する如く又他人を愛すべし」(John Xiii. 34 Comp. Xv. 12) と。此數言の誠は山上訓言の説明として深遠なる彼の思想を表示せる者、彼は決して彼「法規と預言者」(The law or Prophets)

とを破毀し去らんとはあらで、實は此兩者をして其功を充實せしめん爲に出現したる者なれば、苟も前兩者の何たるを知る所れば人は又容易に基督の本領を了知し得べし。人若し更に基督十二大弟子ある The beloved Disciple 即ジョンの述へたる次の語を聞かば思半に過ぐる者あらん。ジョン曰く、「是は由て吾人のその愛すべきを知る、何んとかれば彼基督は吾人を爲めに其生命を投じたればあり。從て吾人は又同胞信者れ爲め生命を賭するよとを辭せざるべし」(John iii. 16)。

胸中一片愛よして存在することあらんか——單に狹意義の愛を指す非ざるや、——必ず盛んに其發動の効果を奏すべし、(若し胸中一片の愛念存せんか君父に仕へて忠孝となす人に交はりて隣信とあり凡てに向て宜からざるを言ふ)。此の如く愛の存する以上は吾人は負へる凡百の義務、各人力量の範囲に從ひ誠實に履行せらるる者あり。愛の徳たる各人自治の練磨を示し、各人本性の範囲に於ける諸機能に向て中正の節度を加ふべきこと論を待たずして明りあり。從て苟くも本心を迷惑すべき鄙猥、私慾、憤心、劣情等凡ての惡徳は、秋毫れ末と雖へども、その胸臆に湊入する事を防がざる可らざる者有り。今人ありて基督より命せられたる人間に全義務を完行せんと欲する者あらんか、彼は先づ愛の支配拮据中に立ちて、感情上、智力上若くは實際上に於ても、彼と營々嚴父ある上帝と對しての眞實なる兒とあり、其君上ある基督と對して忠良ある臣僕とらんことを力むべし。元來基督教弘道の目的たる「先徳の善行を從て之を履行するに在り」(Eph. iv. 12)。昔者使徒パウロ、コリンシア人に送りたる翰中お説て曰く「吾人は汝輩の完行すらこれを切望

す」(2cor. Xiii.9)。彼又嘗てセサロウニア人の爲先天に祝して曰く、「平和の神よ、悉く汝等衆庶を善道に導き、依て心身共に全くして非難罪咎なく康寧あらん」(1Thess. V. 23)。又フザリッピア人に説きたる如き彼バウル教義の綱要は實又次の如し、「要之同胞信者よ、凡て眞實なるべし者、高尚あるべき者、公正あるべき者、純潔なるべき者、愛すべくある者、若くは世の感稱を博するに足るべし者あらば、其何たるを問はず進で之を行へ——否若し美德、稱譽の存するあらん其如何を論ぜず銳意之を求むるに踟躇する勿れ」と是れ誠又人間義務の全量を説示せる者と謂つべし。此の如くして余の人間の義務又關する基督教々義の簡單なる引照を試み訖んぬ。依て余と今暫く筆を移つて同一論点に關する孔教に向て觀察を下し、些か論辯する所あらんとす。兎に角余が今漢土第一流の聖哲が此問題に就て解釋せし所の者を取て諸君に見んとするは余の尤も光榮とする所あり。

(未完)

(咄嗟筆を執りたる事として譯文の晦澁粗陋極まなく、原著者を汚がし讀者にそむくの罪謝するに辭なく、慨然として轉だ汗背の情に堪えざる者あり。唯幸ひ紙面の都合は依て本號に全編を掲げざるの故を以て、些の次號を期し發奮驚駭に鞭ち恢復の策を講ずべし。原作者是より孔教を述ぶる事滔々數千百言終に此兩教を合せ來て比較論評を加へ此に優劣良否の斷案を下して以て本論を結べり

譯者 又 識)



史 傳

ラ、フェイエット

(承前)

潮

來

ラ、フェイエットのオルミューツに幽せらるゝや米英の諸名士の皆壞國が無罪の囚を禁錮するの非を鳴らば遂に一千七百九十六年十二月十六日に至りフィッツ、バトリック將軍は英國王を媒介としてラ氏の釋放を請求すべしとの議を英國々會に提出しシェリダン、グレー、フォックスの諸名士之を賛成せしモ宰相ピットは確く局外中立を守りて之を肯せず、那翁が頻りに壞兵を驅逐し遂に壞國を迫りてカンポ、フォルミオの條約を訂結するに及び償金を出してラ氏の身を救出するを得たり、ラ氏囚とること五年、千七百九十七年九月十日を以て漸く青天白日乃身とされり、出獄の後ラ氏ハホルスタインに留まる二年より國に歸れり、ラ氏の獄を出つるや政界の有様と其の局面を一變し大に六年前の昔と異なり殘忍酷薄のダントン、ロベスピエール、マラ等は皆斷頭機上の露と消え別に一個は巨人、場は上り來れり、其巨人を誰とあそ、コルス島の一武夫是れなり、ラ氏が自由の身とされる元をり那翁は力多きに由れる事なればラ氏は情誼上一々那翁は所爲に反對するに忍びず故に私交に至て暖かありと雖も政治上の意見に於て互に相合とざりし事多きを以て其事は重大なるに逢へば論難駁撃餘力を遺さず眞理のために決て一步を退かず故に那翁がブルミエ、コンシユル(職名)たる時に當り元老院令を以てコンシユル職を終身職とあす

ことと、那翁が帝國を建設せんとせしことに付てラ氏は痛く之を排撃して毫も假藉する所なかりしも國民は多數ハ既ニ那翁の偉勳に眩惑せられてラ氏の言遂に容れられず、ラ氏は心事の如きモ寔に光風霽月の如しと云ふべし、ラ氏は既ニ志の當世に行はれざるを知り、則ち退いてラグランヂニ城に歸臥し耕耨して自ら樂み間に世外より政界の状況を觀察せり、蓋し憂國の情は幾回か世外に人たふんと欲して能はざるなり、那翁會て曰く「今や天下の人は皆極端なる自由の理想を去れり、之を去らざる者一人あり、其人を誰とあすラ、フェイエット是れあり、彼れ今靜默爲す所なければも一たび其想像を馳とるの機會を得バ一層の熱情を以て事お從とん」那翁も亦ラ氏を畏敬せしを見るべし。

那翁が威勢歐洲を震撼せし間ハラ、フェイエットと常ニ快々として樂まず退いて閑野に耕すのみ、己にして那翁が懸軍萬里きて一さびモスコウに敗れ再びトルズに挫け力窮り勢屈してエルブ島に流され千八百十四年を以て再びブルボン統の王位に上るを見てラ氏は自か謂つて曰く「過激黨は殘忍なる所爲よりは寧ろ優柔未熟なる王家所爲を喜ぶ」則ち往いてルイ十八世に謁す、王大に之を款待し頗る依頼する所あり、那翁が私にエルブ島を脱して再び佛國に上陸するや所在風を望んで響應せり、那翁の弟デヨセフ、ボナバルトは元よりラ、フェイエットと親み善し、那翁再び帝位を踐み則ちデヨセフをして百方ラ氏を説き引いて羽翼とあさんとすラ氏之れを肯せず、唯往事を追思ひて敢て漫りに前路の妨をあさざるべきを誓ふ、然れども千八百十五年六月廿一日にワテラルローの敗報を聞くやラ氏は時に國會副議長たる國勢を變せざるべからざる

を曉り遂に議會をして自ら進んで「議會ハ宜く永久開設せらるべく、議會の解散を唱ふる者と國事犯を以て問ふべく、何人と雖モ之を犯す者の國家の讎敵と見做すべし」との旨を宣言せしむる、此の宣言も萬事又付け那翁の行爲を阻礙する一方なござりしを以て那翁は不黨の心を收攬せんと欲し其宰相と弟リュレアンを以て議會に臨み之を計らしむ、然るもリュレアン議會に到り温言を以て議員お接せず反て怨嗟の言を吐た佛國人が帝王に對して輕佻の舉動あるを尤めけり是に於てラ、フェイエット奮起して曰く「那翁帝に對して從順を欠るばとて何の權利を以て我々を罰せんとする、嗚呼、佛國三百萬人の血を流せし那翁の言に從へし過なり」遂にデュイルリーに大に有志の士を會し那翁に退位を勸告せるの動議を提出せ若し聽さずんば國民より那翁の失權を宣言すべしと迫りしかば那翁も己むを得ず位を去り次いでセントレーヌに貶謫せらる、此の時お當り一旦地に落ちしラ、フェイエットの名望も再び隆々とて起れり

那翁の廢後臨時政府の組織せらるゝや氏の相ならず又將たらが退いてラグランヂニ故城に歸耕し千八百十七年憲法黨の推す所となりセーマ及びマルスの選舉區より撰はれて國會お入り二十四年まで其椅子を保ち始終正義と公平とを以て常に輿望を負へり、千八百二十一年西班牙、葡萄牙、ナールブル、ピエモン等の革命黨は蜂起するやラ氏と常お同感の情を表し陰ニ陽に其の舉を贊助せり、ラ氏は天性自由を愛する深く厭制を惡むと蛇蝎の如くあるを以て苟も當時の改革を以て名とする者ハ皆常お口をラ、フェイエットの名に藉りて事を擧ぐるに至る、ラ氏自らも亦自由を掲げ來りて求むる者あれば決して之を拒む能はず、故もラ氏ハいたつかにひとの利器とある如きこ

と之のありしと雖も其久しく萬衆崇拜する所となりしも亦こゝに在り、ラ氏乃日録中に云へるあり「千八百十二年の頃なりけん、徒黨を結べる者ありカルノー氏に至り援助を求めしに其勢力覺えなれものなりなれば氏ハ之を拒みき、時に一友人が余に徒黨の人々今にも貴下れ宅庭も来るべいとて氣吐毒さうに告げられしかり、余ハ答へて云へり、如何ある企てにもせよ自由のためと云へば余が良心は翼々とて事不從ふ覺悟すれば一身の安全のためは其企てを無ふせしむる能はず」其心の淡々たる此の如し、

一千八百二十四年お至りラ氏は漸く議員の選は漏れぬかバ之を機として他年は宿望を遂げんと欲し且米國人の懇請已に難ければ此の年七月中旬を以てラ氏が當初功名の舞臺たりし新大陸に向つて發程し翌年九月初旬を以て歸國せし、ラ氏の米國に着るとるや米國の士民みな簞食壺漿まで之れを迎ひ到る處に優遇款待さへ及ばざるを恐れ人心殆んど狂する如くラ氏を呼んで「國父」(Father of country)と云ふに至る、時にワシントン已に黃泉の客となりければラ氏は先づバンカーヒルに到りて自由軍の角出を祭りヴェルノン山下に到りて故友ワシントンに英魂を吊ひ共に三軍を叱咤せし當時を追懷し巡次に聯邦を回遊せり、其間雄辯を以て名を宇内轟かせたるウエブスター、エグレット等の舌を鼓して盛るラ氏の功績を頌揚しジョン、アダムス、デエツフアソン、マヂソン、モンローの諸名士の左右は提携して羈愁を慰めたり、千八百廿八年米國有名の文學者デエムス、フェニムア、クーバーの公にせる著書中お當時の状況を記せる一節あり、「ラ、フェイエット氏が諸州を巡遊してポストンに歸り來るを待ち受けニューヨークは市民も貴賤老幼相擧げて一大

舞踏會を開き之を招請して其の徳を頌するは決し其れ會場はラ氏が初来て米國は渡航せし地なるキアスル、ガーデンと定め……余等は會場に至り見るに幾萬の人衆麤至きて雜踏喧騰云こん方なく人相重なりて唯落々たる頭顱を見るのみ、……余は友人カドワラーと共此のありさまを見てひたすら驚くばり開いたまゝ口は閉ぢず、茫然とて入口に佇立し前後左右を見廻すこと多し、此の如きは我々ばかりと思へば左よあらず眼に入り來る限りれば人は皆あきれ果てたる有様あり……外壁上數百尺の中天の幾旋の旗幟風に翻りて時ならざるお虹のと疑はれ、……階段の側おと一の高臺を安置し裝飾の絢爛あるは目を奪ふばかり、此ぞ當日の主人公たる傑士 (Ides) の坐とい知ふきける……やがてラ、フェイエット氏の到着を報せると齊しく棧敷の上にて國歌を奏し樂音唳々として起り、今まで耳も聳せんばかりに轟々たりし會場も、いかに肅然とて舞踏止み、喧擾鎮まり、滿籟一時に息み、針の落つる音もさやうに聞こゆべく思はれ、幾萬の群集は瞬間に左右に分立して人れ堵を築き中間に一條の通路を開き互に顔と顔とを見合すのみ、老傑士の愛嬌こぼるゝばりの顔容にて歩毎に禮をなまつゝ徐々群集は中路を過ぎて座に就たり……あゝ、くる廣大偉麗の觀は遇ふと果して實なるか、只しと夢か、とた幻か、我々身は果して閻龍の發見せる新天地に在るかなど我れお問ひ我れに答へて幾さびか疑ひ惑へり……」

Republicains, quel cortège S'avance?

— Un vieux guerrier débarque Parmi nous.

— Vint-t-il & un roi oous jurer l' alliance?

— Ha des rois allumé le couroux.

— Est-t-il puissant? — seul il foanchit les ondes.

— Tu' a-t-il fait donc? — Il a brisé des fers.

Glo ire immort elle a K' homme des deux mondes!

Jours de triomphe, éclairaz K' univers.

.....

Autour de lui vois nos chefs, vois nos sages,

Nos vieux soldats se rappelant ses traits

Vois tout un peuple et ces tribus sauvages

A son nom seul sort ant de leurs forêts

D' arbre sacré sur ce concours immense

For me un abri de rameaux toujours verts:

Les vents au loin porteront sa semence.

Jous de triomphe, éclairaz K' univers.

ラ、フェイエットは米國を觀ざるふと茲に四十年時に年六十七、

ラ氏既よ無上の榮譽を擔ひ佛國に歸り見れば王位にと新國王乃居るあり、是をシャル、十世とあす、宰相マルチニヤック人となり温厚にして自由主義の人ありければ上下の間を調和えて國政漸く靜謐ならんとするの望ありて去りポリニヤック公代つて相となるよ及んで頗る擅私の事のみ多かりければ四方の志士起つて政府の違憲の所爲を攻撃し天下又囂々たり然るも政府は益々固く執つて動かす遂に國會を解散し出板の自由を禁ずる等の事をあせしかば人心益々激昂して上下いよ々乖離せり時々千八百卅年七月なり、ラ氏ハラグランヂュよ在り之を聞き馳せて有志者の會する所に到れば是を一揆にあらず現然たる一は革命の舉にしてラ氏の名ハ既よ其筆頭よ置るゝを見たり、己に於てシャル、十世は勢ひの去るを察し八月二日を以て自ら位を去れり、是の時に當りてはラ、フェイエットの名聲の益々々籍甚にして大革命の當初に於ける如く、一言一行盡く世人の規矩となる有様をせければ若しラ氏にして共和政を唱ひ自ら其要路に當りて天下を掌中に弄せんと欲せば寔に易々たりしれども、然るにラ氏ハ自由をいたく愛する代りに己れ漫りに權勢を振盪の地位に立つを欲せず故に此かる場合に臨みてハ平生の勇往の氣象も似ず常より踏躓して決せざるの癖あり、蓋しラ氏が剛毅木訥の性質は實よ之れを以て然らしむるあり、ミラボー曾てラ氏を評して Cronwell-Grandison (高潔のクロンウエルの意)と云へど、頗る味ふべし、或ハ歴史家の徒よラ氏を目して優柔不斷となす者あれども馬論にあつざるあり、

チャルス十世位を去りてより五日、八月七日に至り衆相議してオルレアン公を迎へて王位に即の

しむ之をルイフィリップ第一世とす、公時幼年既に近を頗る世故に馴れ且つ夙に自由主義を抱持せるを以て大に民心を得、佛國は平和を漸次回復せるの望みあり、王既に位に即ち勉めてラ、フェイエットの歡心を得んと欲し盛んに米國の政体の美を艶稱し自由の制度を布くを銳意すべしを以てせしかばラ氏も亦大に之を尊信せり、是より於てラ氏ハ復推されて國民軍の都督となり、さうまゝ過激黨は前朝の四大臣は頭を得て甘心せんとして政府に迫りなれどもラ氏の聲望を以て稍く之を鎮靜せるを得たり、ラ氏軍は臨み其旗幟に書するは *Liberté, ordre public* (自由、公共的秩序) の三字を以てせしをたり、以てラ氏ハ自由を愛するも亦合理的の秩序の其望む所なるを見るべし

新政府は所置も初めの寛大圓滑にして人心に投せしも日を逐ふて弊習漸く生じラ、フェイエットの意に充たざる事多く所在の革命黨も亦猶動搖して輒もそれば事を擧げんとするの傾きあり、ラ氏則ち職を辭して野に下り是より政府との意向を漸次隔離せり、千八百三十二年六月七日在野黨の名士ラマルク死しければラ氏と其死を吊はんとして往きしに群民ハ之を途に要す迫りて將となす、政府の兵と鋒を交ゆるに至れり、是をラ、フェイエットが戎血を見るの最終となす、

政治上に犯罪人の特典を興へ、奴隸を廢止するの二事はラ氏が國會に立ちて主張せし名残りの言動おして千八百三十四年一月二十六日なり、

次いで三十日に至り代議士デュロンは葬儀に會し歸りて病薨し臥し五月十九日に至り遂に起たず、ピビュスなる夫人の墓側に葬る、年七十八、其初めて渡米して義戦をさせし年を距るものと五十八

年、今を距ること亦五十八年、佛國大革命の後、こと四十五年、子デュオルヂも亦頗る武幹あり、

ラ氏の死するや米國人は痛く悼惜の意を表す其土塊を佛國に送りてラ氏の墳に加ふるべんとを求め、別に話聖東府に於て本國や同一の葬儀を行ひ十三州の人民ラ、フェイエットのたれを喪を服すること一日、

ラ、フェイエットが七十余年の生涯の全く多難多事多望多恨の裡に經過し、其名聲の盛なるに當りての其言の律とあり其身は度とあり、萬仞の巨嶽が連峯の間を轟立する如く何人も之と抗する者なし況んや之を凌ぐをや、ラ氏も亦千古の英傑あるや、一旦機を誤りて暫く名望を失へしと雖も幾も亦くして前日の輿望を回復して再び無冠の帝王たる勢力を有するに至りしもの蓋し其公正質實の性質之落落たる満身をして一片の誠と變せしむるの致す所なり、但其誠に一なるを以て時々人のたれに利用せらるゝの嫌をたにあらざりしも此れ決して其徳を病まらざるに足らず、ラ氏のラ氏たる所以の、實に此に在り、嗚呼至誠如神、仲尼亦我を欺かざるあり、
あ、將軍ラ、フェイエットは既に逝けり、吾人は何の辭を以て之を頌せん、泰西の史家と吾人に教へて云へり、

“Héro des deux mondes”

(二世界の英傑)

春風三月寒雪猶遐邇の峰頭不残り梅樹獨り其勇を逞せるの時私に想ふ明治乙未春余舊都にあり轍軻零丁友なきに苦んで常に公が廟に詣りて自ら慰めしを、今昔れ感ふ堪へず毛穎を呵して此を草を收むる所は己に坊間人耳になれたる事のみ加之斷々片々連絡を統一せし故を傳と言えず論といはず敢て片影と題す

驥駿の才一たび伯樂の見る所とありて、身を渺たる儒林に起し、一躍廟堂に天下の政を執るに至る、臣子たるもの誰の感奮せざらんや、是よ於てか、粉骨齏身、朝よ一弊を除た夕よ一制を設く、誹謗讒毀のもどより期する所、生と死と一に之を國君に許す、誠衷天よ通下て知遇を受くること益々厚く、花に天皇の寶榻に接して忙中の寸閑を娛み、月に清涼の玉殿を侍りて繁裡れ尺暇を樂む、是所謂君臣一體なるもの、誰か思はん、暗々の裡、冥々れ間、其隙に浸潤して之を離隔せんとするの潮流あふんとと、夢乎、現乎、身、忽焉三千里外の鄙境に呻吟す、拮据十年、苦心經營、徒に水泡を歸し去りぬ、天を仰げば茫乎として蒼く、地を望めば浩乎として長し、憔悴枯槁、怨を吞んで空しく宰府の露と消ゆ、嗚呼嗚呼せずして而も久しうらず、猛りふせずして而も早く亡ぶ、人生を夫れ逆旅よりもはうあさう、菅相公の傳を讀で涙なれたもの人非るなり

菅原道真ハ參議是善の第三子、幼おして穎悟、學を好てやまず、殊に其詩想の豊富ある群叢中夙より異彩を放て、其幼時に關まつて神仙的傳説數多あり、皆信するに足らざれども、今試に其一斑を伺はんの、梅城録に

文集云會春晨景淑、獨憑南軒遊目、俄有髮兒、弄花于庭、肌肉玉雪襦綉芳蓀、年幾

五六歲、相公驚異問曰、君家何許、性氏爲誰、兒曰阿呼(小字)無性無家、唯欲父事相公爾、相公大喜、抱入撫育之、云々

ある記事あり、此文中の相公は則ち是善にして、兒童は道真あり、同様の記事、他れ二三書にも亦散見する所なれども、もとより荒唐無稽にして識者の一顧をだも値せざれば之を省きつ、唯其乳臭の時已に詩才乃潑然たるものありしは寸毫の疑を容れず、春光駘蕩、風に獨樂に、幼童が永日を食るの頃、公のひとと閑雅たる細庭に高潔なる君子花を友として吟ずらん

月輝如晴雪、梅華似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨

と、時に其年僅よ十一歳ありしといふ、是より日夜學事を勉め、研鑽怠らざりしかば、其生得の高才の宛として錦上添花の美を呈しき、其十四歳の年將に暮れんとして、轉た惜陰の感堪へずやありらん

玄久律追正堪嗟、還喜向春不敢賒、欲盡寒光休幾〇、將來暖氣宿誰家、氷封水面間

無浪、雪點林頭見有華、可恨未知勤學業、書齋窓下過年華

と吟ず、其口吻夙に蒙童たるの形跡を脱す、此才あり此學あり、宜あるうき、温陽の韶風のまづ菅家が軒に音づれ、馥郁たる梅華の早く其美を菅家が庭に盡せしや
智進と才高まるうち公の漸く十五才の春を迎えぬ、元服の宴、母君まづうたふて曰く

久方の月の桂をるばかり家の風をも吹かせてしがな

嗚呼親近故舊高堂に會して、銀盞相屬し、ひとしく寵兒れ行路安易ならんことを祈るの時、誰の思

はん、異日此兒青雲を駕して鳳輿に親近し、春遇日お厚うして將に國政乃桂冠を戴うんとするの時、和然たる家の風ならで、蕭殺慘怛の悲風吹來ふんとて、傳へ言ふ、公之幼心おも母君の此歌意を體し日夜服膺して匪勉強ざりたると、知らざるは幸か不幸の

公長するお從ひ才學ますく發達せまひはずもがなの事よして、又一日都良香を訪ひ一發命中の射技を以て良香の魂を冷驚せしめしが如し、普々人の稱譽する所、以て公が如何に神重的天才おとしるを推知すべし、是より文章生を擧げられ、得業生をかり、對策お及弟して玄蕃助に登る、後累進して讚岐守とありぬ、是公が其儒よ轉じて政治的の境涯に入らし端緒なり、蓋し此時に當り天下の形勢實に振らざるもの有り、藤氏は父祖に功によして妄りに外戚たるの權を逞くし、其威さおがら旭日中天の如かふんとして天津日嗣の影暗を、而も朝野は臣おいて一を此大勢お抗せんと勉むるものありき、下民己に此の如く眠る時、宇多天皇はひとり英邁を資を抱は私に皇威挽回權臣抑壓の壮志を藏し玉へり、唯奈何おん權臣は朋黨日強大にして乘すべきの隙をかましを、而して恰もよし寛平三年正月關白基經は薨た、英明ある天皇豈此好機を失ひ玉はんや、廣く其謀臣となすに足るべきものを求め、其翌二月遙に菅公を南國よ召し之を藏人頭とささんとす、藏人頭はもと朝廷顯要の職にまて門地亦高く、未だ曾て一儒士の之に任せしむとあらず、公則ち古今の類例を索引し其重任お堪へざるを奏して曰く

(上略)臣罷官南海、歸命北辰、枯苑更華、死骨重肉、不馴闕下而趨拜、分己無涯、

(中略)伏願聖主陛下停臣所掌、更選其人、勿俾跋特妄觸仙欄、腐鼠叨汗禁省、縱使

臣凌崩浪於鼈頭、臣豈敢辭命、縱使臣踏畏途於虎尾、臣豈敢惜身、唯此非據之職、

臣之所不知也(下略)

之を藏人頭を辭するの第一表となす、然れども、深慮を有し大志を抱ける天皇は遂之を聽し玉はず、其至誠の言に感じて益其忠實を信じ、其三月に式部少輔お補し、其四月に左中將を兼ねしめ、仙欄は傍、禁省の奥お萬機を計らしめ玉ひた、嗚呼恩寵一お何ぞ厚き、是もとより帝ひとり公の一身を寵し玉ふのこま在らず、深く其慮る所ありしよると雖、其累進の突飛なる、蓋し當時門閥世襲の陋俗お取りて、空谷の愛音たりしを、況や驕慢放縱の藤一族に於てをや、公の明よく之を知り上奏して再び藏人頭を辭す、其表に曰く

(上略)所帶二官、所勤者兩役、虛壞之才難可兼濟、望請特被殊優將解件職、然則寵

光三中暫全傷翅、恩澤之下久養枯鱗(下略)

嗚呼公は固よ正義熱誠の志士、大に帝室の陵替を憤慨し常よ其挽回策を講ずるを務とし、天日の惠光を以て筑紫の極子島の果までも輝のまめんと欲せしなり、而も藤花ひとり徒に其艶を銜て跋扈せるの間よ立ちて、よく梅花の高潔を完ぬし難んを知り、深く草莽に隠れんとす、國家れおめに痛むべきなり、其重任に堪へずといふ如きは只其辭柄に過ぎざるもの、公れ才を以てせば、兩官三役も快刀亂麻を斷つが如けんのみ、而も之を辭すること二度に及ぶ、當時の狀勢察するに餘りあり、蓋し大才の士が群小狐狸輩に間に介立して其忌諱に觸るゝや、彼等姦佞は之を除くんとし、虚構詐偽、あらゆる術を盡して毫も憚る所なきが故に、一度其陷井よ墜ちなんん、鼈頭に崩浪

を凌ぐよりも危険に、虎尾を畏途を踏むよりも可恐なり、是公が最も恐れざる所にして又古今人才輩出の途を塞ぐ一大關門たるなり

寵せらる此の如く、信せらる、此の如し、臣子たるもれまゝ何をかいはん、ひたすら感泣措く能はず、一に聖恩に報せんことを務むべしのみ、公は是に於てか勇然決斷せり、激勵せり、聖主の優渥と暴臣の横恣とは今や其極に達して公を蹶起せしめ、語曰く雲從龍と、古人まゝ之に附して曰く既曰龍雲從之矣と、龍と雲と何れか其主動たるを判すべしとざるが如く、聖主ありて而して賢臣あり、賢臣ありて而して聖主あり、君臣の關係此の如くにして始て偉業を完成せるを得べし、而して宇多天皇と道真公とを關係は今や實に此境域に達せるあり、公は是より滿腔鬱結せる英氣を吐露して事局は難に當らんとせり、當時の最も患と怒し所は藤氏の暴横にして帝も公も其抑制を以て唯一れ目的とせしや明かりと雖、藤氏の害や雷に其專擅ありといふも止り、未だ後日れ如く國政に大害を及すは至らざりた、則ち其全局面より之を觀なば、當世其萎靡不振の甚しきものありまも、政治上特に大弊贅ありとして破荒天の改革を要するほどの事はなかりしなり、是が故も、公は日夜政綱の刷新に勉め、月を追て失弊の除去を計しと雖、而も政治上に於る公が遺物として著しく後人の傳稱するものなし、況や其赫灼たる文才はまづ吾人をして眩せしめ、復他を顧るの暇がからしむるをや、思ふに公は政治家さふんよりも密ろ血誠の詩人篤實の學者として生れざるが如し、史の示す所よりて之を考ふるに公が政治的事業は中後世に關すること大なるもの二あり、曰く太子敦仁の贊立、曰く遣唐使の廢止是なり、前者は其最も深く慮る所ありしもこれにして而も其

最も策を失せし所、今暫く之を論せず、後者に至りては實に凡を抜くの卓見といふべし、蓋し遣唐使の一度我國を行けるや、歷朝大に之を獎勵し、其利また大なるものありしと雖、洪波萬里加之船舶の便否ありしかば、公の所謂「或は海を渡りて命に堪へざるものあり、或は賊に遭て身を亡し、未だ彼地に着かずして、艱阻飢寒は悲境に陥る」もの屢ありき、況や大化以來我國大に彼國の制度を採用し、文物學藝共に獨立の發達進歩をなすに足るの時、猶巨大の財費と幾多の生命とを賭して異域に航す、其得る所失ぬ所と相償はざるものありしなり、公常に此意を抱き未だ之を決行するの機を得ず、偶在唐の僧中瓊あるものあり、詳に彼地騷擾の狀を報じ遣唐の不利なるを告げ、益々公の志を堅からしめぬ、是を以て寛平六年其遣唐使に任せらる、や忽ち上表して遣唐の舊慣を廢せんことを請ふて聽さる、今日より之を見なば、此計策たる敢て異とせるに足らざるが如きも、滔々たる世俗ハ一其舊習によるを惟事とせるの當時、ひとり能く損益利害のある所を依て事を處し、國富蓄積の遠謀を企てたる果斷と聰明とハ優に百世に超然たるものあり、

公が請ふて遣唐使を廢せし時恰も五十歳なりしかば門客共に其祝宴を張りき、傳へ言ふ一老翁あり忽焉席上に現れ、賀章及沙金を案上に投じて飄然其行く所を知らず、衆恠て之を讀むに文中「傳聞管家門客共賀知命之年、弟子雖削跡人間無名世上、尙數記淳教之風、多改恣昧之過、古人無有無德不報、無言不酬、深感彼義、欲罷不能、故福田地捨此沙金、金以表中誠之不輕、沙以祈上壽之無涯、莫疑其人、可求其志、遠居北闕之以北、遙贈南山和南」の語ありしと、事頗る恠異にして信を措き難しと雖、其「莫疑其人」遠居北闕云々等の語を察するに是或ハ忝くも宇多帝の人をして賀を

さし先玉ひしものにて非るる、未だ邊に安誕なりとして排去る可ざるあり、要するに帝の公を信じ公之帝に頼り兩々相扶けて庶務を裁決せしかば、弊政革新の大望の茲に其曙光を放つに至りぬ、帝は是に於てか根蒂己に定まれりとかし、公を權大納言に進免寛平九年遂に其位を太子に譲り玉ひぬ、其遺誠にいへるゆり、「左大臣藤原朝臣、功臣之後、雖少諳政事、(中略)右大將菅原道真當今鴻儒深通政理、直言不忌、朕立儲貳、獨與之議定、且將讓位、未果、朝臣曰、事留變生、(下略)」と、蓋し帝道眞を信する乃厚き、獨り公にあらば、敦仁の幼弱を猶能く藤氏を制するに足ふんと思ひ玉ひしかど、惜哉千慮の一失、

國政稍振肅の途に就於皇威漸く盛からんとする時、文王の宏緒を嗣ぎ、賢臣の扶持によりて立ち玉ひしを醍醐天皇とあす、幼少にましまさずとも剛志あり、公を擢て藤原時平と相並で大臣大將たらしむ、嗚呼一布衣の寒族忽にして台閣に居る、衆の其異數あるに驚きまや宜かり、公も亦氷上の疾行、自ら安せざるもればあり、則三度奏して之を辭せり、

其一に曰く

(上略)無寢無食、以思以慮、人心已不縱容、鬼瞰必加睚眦、(中略)早罷臣官、非唯不奪志匹夫、爰復得從望於衆庶、(下略)

其二に曰く

(上略)况復當時納言居臣下者、將相貴種、宗室清流、皆是臣抱書卷遊蠻門之日、位望先貴冠蓋自高、(中略)遠尋漢代、近計用行、上畏蒼昊、下耻黔庶、步不安步、(下略)

其三に曰く

(上略)吹毛之疵逐榮華以鋒起、銷骨之毀隨爵祿以荐臻、嗟庫樞衣不遑星霜僅移十踰機、(中略)皆是不翅之飛也、身安福景、豈非無涯之霈澤乎、(下略)

讀み去り讀み來れば公の衷情躍如たど、而も衆論の如何を憂ひて顯要を厭ぬの心、第二表は第一表よども、第三表は第二表よども、愈切なるを見る、當時の狀推知すべしなり、韓愈のいひき、事情而謗興、德高而毀來と、嗚呼此陋習や、山の秀麗に水は清潔、君徳明に民心潔き神州の地にも亦免る、能はざる、賢者漸く用ひられれば之を妬み之を間し之を讒するは實古今東西の通弊たど、況や門閥世襲の積習久しく行われ營私の念強き時に當り、絶世の英才を以て微賤に起り、之を公にしては國政の草振を致し之を私にしては封戸滿二千の富榮を享くるをや、果せるるか非難の聲、嫉妬の言は漸く聞えたり、公豈之を知らざらんや、一夜人静まりて四顧寂々、衾冷のにして眠り難き時、公は私に己往々顧み將來を想て茫然浮雲に駕せるが如く心地やしけん、即時上表して其職封千戸を減せんことと請ぬ、嗚呼君恩山よりも高く孤忠却て世の難を受く、封戸一千以て家を支ふるに足れり浮雲の富何ぞ久しく之を繫くべけんやと、是を思ひ彼を懷て安せず、其心事あわれむべし峻坂と澗歩とべからず、急流は横り難し、多年來の積弊を改め回天の偉業をなさんとするものは宜しく五歩に考へ十歩に計り戦々兢兢々、速なるを欲せず遅きと憂へずして最後の成効を期すべしあり、惜哉宇多上皇の策茲に出でず、昌泰三年新帝と議すらく右左の大臣相並て事又當る、統一の便

かけんと、乃道眞を召して關白さふくを専ら事を任せんとす、公固辭して受けず且曰く、既に臣を召し玉ふて若し事なくんば徒に衆の疑を増さんのみと、乃一詩を賦し之を托えて事をくらし去りぬ、蓋藤氏の眼を鋭うして公の一業一動を察しつゝ、有りしによるなり

公の政務を處理して裁判流るゝが如く、又夙より白樂天に私淑し詩才時々彼を凌ぐものありしかば公職の餘、常に帝に倍して花鳥風月を友とせりき、一夜雨静に風寒く、玉敷の御庭も流石に秋のさびしさにこもれえて啼啾啾々々、落葉寂々、丹楓散り盡きかんとして滿目蕭條、籬邊の菊獨り其節を保つ頃、天皇人をして玉琴を彈せしめ、秋思ある詩題を出させ玉ふ、公則ち胸中の萬感を吐て吟ずらく

亟相度年幾樂思、今夜觸物自然悲、聲寒絡緯風吹處、落々梧桐雨打時、

君富春秋臣漸老、恩無涯岸報猶遲、不知此意何安慰、飲酒聽琴又詠詩、

嗟乎梧桐一葉地に落ちて天下の秋と今や公の身を襲ふんとたり、公が此夜物に觸れて自然と悲むものは唯是のみ、これと滿腔の赤誠あり老軀の微衰を奈何せん、われに淋漓する熱血あり世評の紛々を奈何よせんと、此意日夜慰むるによしなし、酒を飲み琴を聴き又詩を詠ず、何ぞ其憂を忘るゝに足らんや、夜更々で退出せんとするに及んで天皇親々御衣と公に賜ひき、公三拜して神仙門より出て御庭を徘徊することしばし、願まば温明殿裡燈火正に沈んで凄蒼なる孤月頭上にかゝれり、嗚呼此詩、此衣、忽にして公を泣かしめ怨ましめ怒らしめ思ひ出さかふんとは、此夜の公豈之を思ふんや

「門風自古是儒林、今日文華皆悉金、誰詠一聯和氣味、况連三代飽清吟、琢磨寒玉聲々麗、裁製餘霞句々侵、更有昔家勝白様、從茲拋却匣塵深」、是ははれ公が其詩を祖父累世の家集と共に一卷とあして天覽に供へ奉りし時、獻感の餘り公に賜はり御製あり、君臣の間已に斯の如し、誰か此關係の破裂することあるを豫想し能ふものあらんや、而も暗雲秋月を妬み慘風春花を要むは塵世の常習、門地公とも高く、暮下公よりも多く、父祖の功を恃み姻戚の威を張らんとして却て寵遇を失へる年少氣銳の貴公子が虎視鷲聽公を嫌厭する所以のものは蓋し怪むに足らざるなり、是に於てか時平を謀主とし定國、菅根、光の徒輩相結托して公を排せんとし百方術數盡きて遂に密奏して曰く、道眞之帝を廢して其女婿齊世王を立てんとすと、帝はもと聰明なりと雖年猶少々、踐祚日猶淺かりしかば、其真相を檢知するに及ばずきて直に之を信じ即日公を太宰權帥に貶し玉ひぬ、夫れ賢者の讒せらるゝは古今東西其例少かふと雖讒者之を聽く者れば嬖妾たるを常とするが如し、而して醍醐帝の事の如きは尤に異れり、時平の徒輩ハ帝が常に蛇蝎視せし所にして、菅公ハ其久しく信任せし所なり、英明此の如くの聖主が一朝其蛇蝎視せる者に聽て忽ち其久しく信任せる者を貶し玉ひしは頗る怪むべきに似たり、蓋し姦佞の人を讒するや必ず其之を聽く者れば最も忌む所にて、其直接利害の憂心をして平素の明を掩ひしんとするあり、是を以て一度は「仁流秋津州外、惠茂筑波山蔭」と謳歌せし玉ひし帝も遂に彼等の姦計に陥り玉ひぬ、是獨り帝をのみ咎むべしにあらざるあり、論する者皆曰く、藤氏の全盛此の如く攝關一に其意のまゝなる時は當り、宇多天皇は菅公を草莽の一寒族に擢で、累進台司に上らるゝ、其根本に於て已に過てると、是甚だ當らざるの論な

り、蓋し革新ハ之を裏面より見かバ常ホ破壊を意味す、大破壊無くして大革命を望むの難死ハ木に據りて魚ヲ求むるよりも甚し、宇多の御宇藤氏の專横ハ遂に良香をして「藤氏何求不得、欲使吾曹何處生活」と絶叫せしむるに至り、藤氏に非れば人に非るの沒理觀を呈した、是則大に破壊すべきもの、王室ハ隆盛と紀蓋の刷新との此破壊を行はずして求むべからざるなど、而して其破壊ハ第一着手として菅公の任用を重くし一躍關白の實を擧げしめんとす帝の英斷剛果のものとより凡衆を拔く、若ク當時藤氏專横の故を以て躊躇逡巡他の巨才を擢用するものと云ふればまた何の日ホカ其舊弊を改善するを得んや、唯夫藤氏專横なるが故に大ホ巨才を進用するの要を見るなり、帝と公と永く相共に天下の事に與らんか時平の如きまた何りあふん、而も帝ハ位に在る僅ハ九年にして之を一幼主に讓る、帝の策を失せるは實に彼ホ在らざるして此に在るあり、道眞の大納言となりしは寛平九年六月、此時己に誹謗の聲ハ四方に起りた、而も猶よく公の其位を保つを得しは只帝の嚴然たるありしに依る、正に是危機一髪の秋、而して帝ハ飄然として位を去る惜哉、然らば帝のかく早く位を讓り玉ひて何が故ある乎は大に吾人の考察を要するの問題たふざんばあらず、山陽會て之を論トて晉に帝の信佛に歸せしより世徒に帝を難とする者多し、豈夫然らんや、其所謂遺誠中「朕嚮立東宮獨與道眞議定且將讓位未果道眞曰事留變生」の語を察すれば太子敦仁の儲立も一に公の協贊によるを見るべく、又帝は未だ讓位ハ志を決せざりしに公の之を促せしを知るべき、蓋し敦仁は時平の再從兄弟にまて藤氏の近縁ハ非れば之を制するに自ら便あり、且偶藤原基經ハ女帝に女御として未だ生む所あらず、若ク其生む所あらバ敦仁を帝とするの或ハ難うらんと、是公の最も患とせ

し所、「事實らば變生せん」の警語を以て帝が讓位を決せんと實に其深慮の在て存する所なりと雖、思ふに是却て公の一失あらん乎、何ぞや、己に儲位を定む、縱令後日生る、所あらんも帝の剛邁と公の智謀とを以てせば何ぞ其素志を貫くこと能はざらんや、未だ俄に位を讓るを要せざるかと、且夫公の一身ハ宇多天皇なる一條の聯鎖によりて繋がる、のみ帝あくんば是則公あきなり、而も群僚獨り帝を憚れるの時忽然位を去て彼等に乘隙を與へ玉ふ惜哉、故に宇多中興ハ失敗ハ其因其讓位に在りて而も讓位の責は一に之を菅公ハ歸せざるべからず、山陽の明にして猶獨り宇多天皇を難ず焉、肯綮に中れどと言ぬ可けんや、然れども世に公が三善清行の諫を用ひずして遂に茲に至れりと稱するが如きハもとより一管見に過ぎず、余會て其所謂清行の諫書を讀むに曰く、伏惟尊閣挺身翰林、超昇槐位、朝之寵榮、道之光華、吉備公外無復與美、伏冀知其止足、察榮分と何ぞ其言の平凡なる、此の如死ハ清行を待て後公の知る所に非ず、前に公の再三上表して其骸骨を乞ひしハ實ハ自ら其止足を知り榮分を察せばなり、奈何とせん聖明の之を許し玉はざるを、公の失ハ實に讓位協贊の餘りハ早かどしにあるなり、夫國家ハ患は賢隱れて愚蔓るより大あるは莫也、是を以て楚王一度屈平を黜てより兵挫け地削られ身秦ホ死して徒に天下の笑とかりぬ、醍醐天皇の賢明はもとより懷王の比に非ず而も菅公を貶去玉ふこと此の如し惡むべきかな姦佞の徒輩、嗚呼汨羅の淵潭長くへに人を悲ましめ天拜ハ峰頭今猶鬼哭啾々るものは何ぞや、一に是彼の讒姦の所爲のみ、紀綱爲めに敗れ天氣地に墜ち文進まず武榮ハ優惰日を追ふて國難を増す、余公ハ遷謫を悲むものハ獨り公の爲れみホ非らまし

嗚呼忠を盡し智を竭きて讒せらる、苦心慘怛漸々より國歩の峻嶺を越來んとすれば忽焉身は轉じて千尋の谷底に墜つ、公が意蓋し以爲く此身死すべし我命もと皇天に在り唯憂ふ國歩累卵の危殆を、況や滔々たる世は皆溷濁にして悉く私利に馳す、杳々たる前途誰と共にう事を談せんと、眩せらるゝも猶君國を瞻顧きてやまず、則ち滿腔の赤心を三十一文字に寄せて法皇に奉る

なほれ行く我はみくづこなまぬとも君去からんと成てとめよ

宇多法皇(讓位と共に佛門に歸依し玉ひぬ)の之を見て大に驚死惶惶清涼殿に赴き帝を悔悟せし先んとし玉ひも菅根等固く禁門を閉ちて容れず、法皇停立すること終日、夕陽將に西に沈む頃悄然手を空うして歸り玉ひといふ、想ふて此に至れば實に憤慨に堪へざるなり

雜 錄

春の七草

鳥 定 保

風暖かに空うと、うかる今日此頃野邊にて若菜萌へ出で、乙女子が彼處此處にうつばひて草摘む様にも古事れ思ひ出でられ長閑さ御代の象も見ゆるかり折から七草のおとを記すも因みかた事に

もあらざるべし

せり、なづな、ごぎやう、ごこへら、ほどけのぞ、すいな、すいしろ、これぞ七草

ある言子供の時ららよみにまつゝありし事もありた又正月七日にて七くさの粥を啜りし古事の話も聞たりたされど其物うの事はいかゞなまじしか委しくは知らず今二三の書よて見ゆるよこもを書列ぬれば

七草はむつさ、の、なぬかのひの、あつものに、用ふるものあり之を食すれば其人萬病なま、また邪氣をのぞくといふ是なづな、はこべら、せり、あなま、ごぎやう、すいしろ、ほどけのぞ、のとありとなづな 薺 (撫菜の義なり撫は愛ふしきとなり)



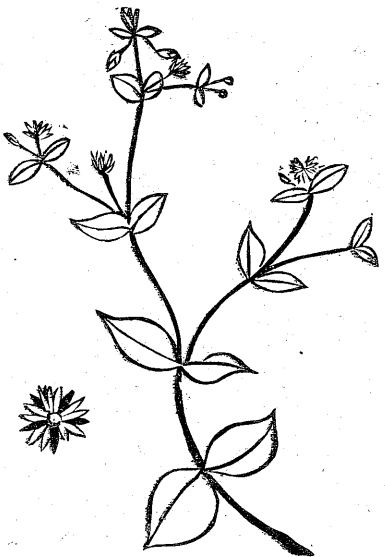
Capsella Bursa pastoris, Moench.

パンペンダサ、とこいふ十字花科のものあり花

白くして四辨なり扁莢を結ぶ其形三莢の撥に似たり此草少しく澁味ありて粘りあるに依り癒創

劑に用ゐる事ありと

ハコベら 又ハハヒベ 繁葉 (繁縷)



Stellaria media, Vill.

石竹科のものあり花五辨白色あり各辨二つに裂
け十辨に様に見ゆるあり葉は心臟形にして莖と
共に柔かり此草を搗み交せのこへ搗と云ひて齒
磨不用なる事あり

せり 芹 水斬

Oenanthe stolonifera, DC.

繖形科なり夏お至りて莖の高二尺に超へ多く線稜あり梢ハ三角形とみす復葉にして五辨白色の
繖形花を開く此ものと常人の知る所あれば圖を略せり

あをな 青菜

これと古事記に「やまがたに、まけるあをなを」と有り蕪菁を云ふと又或書に「あをなはすな
(菘)と云ひたらうかと同トといは小な義あり」とあり學名の

Brassica campestris, Z.

にして十字花科のものなり根に圓、長、扁圓、等あり色に紅、白あり花は黄色なり然るに飯沼先生
の草木圖説にては「うな(菘)を別物とて學名を *Brassica chinensis*, Z. とし油菜に甚似たるもの
にして稍大きく色淺く葉厚しと云へり又ありふれたるものなれば圖を省きぬ
ごぎやう 御行 御形(おぎやう)

Gnaphalium multiceps, Wall.

ハコベら(鼠麴草)れことちり菊科にして高六
七寸或一尺餘に至ることあり莖葉共に軟かさ
白き毛を被ひ花は黄色にきて開花の間長く秋よ
夏る



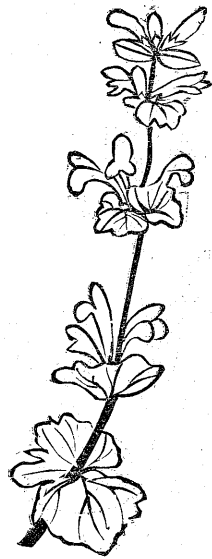
さいしる 蘿蔔 大根(おほね) 萊菔 (清白の義なり)

Rhaphanus sativus, Z.

十字花科のものにして四時皆あり葉粗硬ふして細に刺毛あり缺刻深くして中脈に及ぶ花白色に

淡紅曇あり圖の略と

ほゞけのざ 佛座 (元寶草)



Lamium amplexicaule, Z.

唇形科にして冬より苗を生ず春に至りて一尺許
となる莖方よして葉扁圓。對生す春夏の際節々
に多くの花環列す色紅紫かり初生のどたの葉佛
の蓮座形をなす故に此名ありと

又或書に佛座一名田平子タヘラコとあり然に此たびらこはかたづけか(鷄腸草)ともいひ紫草科のものに
して別物かり古之を代へ用ゐしこともありしにや學名に *Tigonotis pedunculatis*, Benth. かり春
五六寸の高となる莖頭穂をなし細花を附く單筒五圓辨にして白色に微紫碧を帯ぶ

又或書に「後世七日の朝に唱へ言して此七葉を打はやく粥を炊きて食ひ七種粥と云ふ後に、薺の
ミを用ゐ又後にはあぶつかの葉を用ゐる」と記さきぬ之よて見れば後の世よと煩としきを省たて
あぶつかの様ある得易き一品を用ゐる様になどたりと思ひるあぶつかの莖臺にして學名に *Dracisca*

chinensis, Z. var. なり即ちたぢぢかた變種かり葉おは缺刻并びに不揃れ齒ありて柔滑かり毛茸おし
花黄色かり子の油を搾るよ用ゆるものなり



又古正月十五日に米、赤小豆、粟黍、大豆、稗、胡麻を雜へ煮て七種粥といへり之も今は變じて赤
小豆粥となる」といふよとも見えたりされどこと七草のこと、別事と覺へれば、ふ記さず要
なきよとを長々しく記してわたら紙を汚しよるとは赦したまへ (一)

「スキデグス」を讀む

焦 鹿 迂 人

序 引

羅馬の雄辯家「マルカス、ツルリウス、シセロ」會て「スキデグス」を贊して “*Astifidul de dignifad*

narrator of facts"といふ、吾等淺學非才未だ彼の門閥にも關ふ能はず、敢て私意を挾んで、彼を品隲するの乃ち先哲に對する禮讓を失するあるなからん乎、英の「マコーレー」卿其の著「History」に於て詳に論評する所あり、請ふ藉りて以て渠の聲價の如何に今古を通じ中外に施いて、曠々稱揚せらるゝかを見ん哉、卿曰く、「スキデッス」ハ其の言説の動もすまば輒ち、假構的に走るの弊ありと雖も、その史的叙述の才筆は於て、其の圓熟なる撰擇と整頓とを以て、讀者をして無量の感想を惹起せしむるの術に於ては、優に古今獨歩と稱すべく、其の著の煥然として、一成人の著述、一政事家の作篇さるの觀あるの、之を「ヘロドタス」の頑是な兒童的の快筆に比して、著しき對照を表示し、其の全篇を通じて、老熟、剛悍、訥口、自信の特質の、詢に拵ふべからざるの形迹を印出せりと、適評と謂ふべし、

「スキデッス」とアツチカに於けるデムス、ハリムスの名族より、父を「オロルス」といふ、紀元前四百七十一年を以て生る、當年の名士「ミルタイアデス」「キイモン」皆其の戚縁より、彼の家もと素封タズ島を距る遠くならず、スレシヤ州と一金坑を有し、數千頃の田園亦以て耕耨するに足る、渠幼時オリンピヤに在り、一日「フロドタス」の著を讀み、感極て流涕嗚咽已まず、此より激憤史に志せといふ、長して雄辨術を「アンチフラン」に學び哲學を「アナクサゴラス」に問ふ、彼の辨論ハ簡結明晰にして謂ふべからざるの威嚴を備へ、加ふるに道勁當るべからざるの鎖鋒を有せしといふ、口碑に傳ふ「デモスゼテス」其の辨術の惡弊を矯正せんと欲し、彼乃史篇を抄寫すること前後八回に及ぶと以て彼の史論の眞價を想見するに足らむ

ペロポネサス戰役の起る翌年疫癘大に雅典府を蔓延し「ペリクルス」之を斃れ、渠も亦之を患ふ、而も幸よして痊ゆるを得たり、紀元前四百二十四年「バルタレ將」「ブラシダス」は「アンフキポリス」を襲ふや、渠は七隻の堅艦を督してタズ島にあり、急を聞きて馳擊赴き援ふ、及ばず、是に於て罪を延て外邦に逃れ、足郷國を踏まざること、廿有余年、閑散無聊の余、志を勵し是に於て始めてペロポネサス戰争史を編述せんと欲す、乃ち親しく戰地を實踐し、身戰役に與れるの當局者を歴訪し、稀きある熱心と勤勉とを以て之に當れり、著凡そ八卷惜哉之を完成するに及ばず、四百一年非命に殞る、故に四百十一年を以て筆を擱せり、實に戰争前七年とあす、先是四百三年雅典府に大赦令を行ふ、彼も亦復た桑梓に還るを得たるあるべし、「ソクラテス」「ユリヒデス」皆同代の學士とあす、

彼に一子あり「チモセウス」といふ其の後を襲ぐ、吾等は徐ろに渠の史篇を通讀するに當り、其の脩顔隆鼻の一偉人を想ひ、未だ嘗て奕々として目之を睹るが如きを覺はずんばあらず、

第一章 希臘人民の淵源慣習を叙す、

「スキデッス」其の著ペロポネサス戰争史に自序して曰く、吾幸にして此の世變に逢遭し親しく戰ふ與るを得心私お意なく、實に希代の大戰爭にして又空前絶後の價値あるを信ず、嘗て諸州は、或はアゼンと黨し或はペロポネシアンに結び實に希臘中は大機動さるのみならず、又蠻族の一部も連り、延て世界の大部分に波及せるを見る、古來戰役多しと雖も、時代の經過と共に邈然捉ふる由

なく、余の知る所を以てすれば、悉く是れ大事件とするに足らずと、更に曰く、所謂ヘラスなる者は昔時は一定所に停住せるのみならず、屢々其の住所を去り、未だ曾て村落なるも乃わらず、是を以て、商業貿易の如きも未だ發達せず、海陸與に雜居其の堵に安ずるのみを得ず、田圃は耕し江海は漁獵し、以て其の財産を貯蓄するの念慮なく、隨て求め、隨て食ふ、蓋し敵人の襲來常かきを恐るるにあり、

朝に燕北に稼ひ、夕に江南に飲ふ、水草を趁ひて轉住し、未だ定住なき彼等は市邑の大なるもれなく、財源の盛なるものなく、之を強力ある人民と謂ふを得べからざる亦宜ならずや、是の故にセツサリーの如きペオシアの如きペロポネサスの大部の如き其の他希臘肥沃の地は常に住民の轉變異動を見るに他なし、土地豊饒あれば少數なる一部の人の次第に勢威を増え、朋黨茲に生じ、遂に因て以て社稷祀らざるに至る、蓋し自然の數なれとなり、

アツチカは土地確不毛あるを以て、長く朋黨の禍禍を免かれ、同人の士民は永く太平と謳歌せり、

그리스 の一様なる意氣銷沈の狀を呈せるに、其の屢々居を移し、住を轉ずるのみならず、夫の戰爭又は謀反の爲に驅逐せられたる民族は、其の稍力強きアツチカに赴きて、根蒂地を造る、遂に古代に於て市を建て府民を増殖し後人口夥多なるに及てアイオニヤに殖民せり、

是に由て之を觀きは、古代人民は羸弱事に堪へざる一に此の如きものあるを知らん、トロイ戰役以前に於ては、希臘諸州は一として共同事業あるものを企てたることをし、加之未だ一定の國名だ

に之を有せざりしあり、「デウカリオン」の男「ヘレン」に及ぶまでと毫末も其れ名稱の存在を見せ、數多の人種特にベラスギハ其の多に居り、各々其の固有の名稱を用ひたり、「ヘレン」其の諸子と共にフシオチスに於て名聲藉甚たるに及び、各人種は争て彼等を聘し以て其の後援とせり、是に於て乎一般に各人種をヘレンスと稱するに至れど、

「ホーマー」の詩篇特に之を証明し盡せり、彼はトロイ戰爭を距る實に後世に生れたると雖も、夫のフシオチス出身は「アチルス」と共々せる人々の外は、更其の名稱を用ふることなく、其の詩篇に於ては唯ダナンス、アルガイヴス、アケアンズ等と稱せり、

彼は又蠻人に就て記述する所のみならず、何となれば當時ヘレンスなる一族の特に此等蠻夷と區別するに足るもれあふされどなき、

當時は數々のヘレン民族は各其の地を異にし、特有の方語を語り、トロイ戰爭前の一團體として事業を經營せることなし、

「ミノス」之實に海軍を編制せるの權輿なりとす、遂に漸く、希臘海の大部分の主君となる、彼も亦キクラデス諸島を領事カリア人を追ひ、其の諸子をして之か司らるる、猶ほ力を竭して海賊を追放し以て歳入の安全を保障せり、

昔時の希臘人及び蠻族と其の海岸に近く住するを以て、一二度航海せるに後は有力なる人の下に轉じて海賊となり、以て其の利益を營ぎ、需用を満たさんとす、遂に城廓なき市邑を砲撃し、侵奪を以て生活をなすもの多し、彼等ハ之を以て、曾て恥辱と信せざるのみならず、寧ろ其隆盛を致すに

至れるの階段と思惟たり、

蓋し「スキデッス」の當時に於ても猶ほ大陸に住せる人民の此の海賊的業務を以て、其の名譽を考へ、詩人の海岸に来る人とし云へば、如何なる場合よ於ても、其の海賊たるを否と云拘はらず、常之に質問を提供し、之を紹介する此等の所業の敢て非難するよ足らざる所以を以てせるを見ても蓋し之を知るに難うからず、

彼等の相脅ひて大陸を掠奪し、猶ほロタリ、オゾレ、エトリアン又ハアカルナニアン等は舊慣往習に従て生活の途を營めり、

彼等は海賊を所業とせる遺風とて常に武器を帶ぶるは習慣を生じ、彼等れ生活の轉變常かた適々以て武器を擔はしめ困て以て其の不安に備へよと、

アゼン人は實に其の甲冑を度せるの濫觴なりき、然れども、彼等は同時に大なる奢侈遊惰に沈溺するよ至れり、アゼンの富裕者等の身に麻製の長下衣を着け、金製の暹蛋狀の髮止を以て頭髮を束ねたり、此れ慣習は實は長く後世に傳えり、

之に反して、ラセデモニアンは中庸の衣裝を以てし、實は富者は其の生活の度と庶民に則るの奇習を呈せり、彼等の始て、衣を去り、毫毛之を盛飾することなき、脂肪を以て體に塗り、以て体力の操練に努めたり、

更に市邑に就て叙述して曰く、當時財産の許多を藏し、航海に利便と有するあは、常に海岸よ向て牆壁を設け地狹を占領し一は以て貿易に便し、一は以て隣邑に侵入を防がんとせりと、

古の之よ反し、海賊の盛あるに従ひ、都邑は悉く海岸を離れて内地よ建設せられたり、此れ風習の「スキデッス」は時代に於て猶ほ繼續せり、

蓋し當時の島民は主として海賊を業とせるもれ、ことし、即ちカリアン、フェニシアン等は是れなり、ペロポネサス戦役時に當り、雅典人がデロロ島を取り拂ふや、此の島中の墳墓は悉く取り奪はれよと、此の中カリアン人の墓は其の過半を占せりといふ、蓋し實に其の發掘せられよる武器に徴し、墳墓の状態に稽へ、其のカリアン人は墳墓するの火を際るより明かきはなさん、

「ミノス」の海軍設置せらる、よ及んで各人互に大なる利便を感じ、島中は惡漢は悉く放逐せられ同時に彼れの黨類を殖民せしめよと、

是の如くにして下級の者の漸くに上級の奴隸となり、富者は金錢を以て、小都邑を買ひ、其の臣僕として驅使するに至れよ、而して年所を経るよ從ひ、寢ハトロイ戦争あるもの興るに至れり、

(未 完)

如 是 我 觀

風 柳 庵

孤衾一夜夢成らず、氣沈み、情冷めて思懷水の如く、心意靡然として暗中存りよ何物をり摸索す、從て又獲る所れもの一二にえて足らず、試に之を紙に摺れば、斷篇片章、雜然として統規おき、

宇宙の神秘

其聲を聞くよとを得ず、其形を見ることを得ず、其質を知ることを得ず、若くは又其刺觸に接する

ことを得ず、凡ての實感より離れて而も能く何物かの存在を想像し、直覺し、或ハ之を認識するの時、吾人ハ茲に不可思議の念を生じ、此念ハやがて畏懼若くと畏敬の念となる、吾人が宇宙ハ大に對して揣摩するの時、又端無くも此情感に擊たれざるを得ず、

彼の蒼々たるものは天あり、而も其蒼々や終に際涯を知らず、吾人を載する所の黃壤も亦無數の列宿と共に這裏に浮ぶ、仰げば茫茫、俯せば漠々、而も茫茫と漠々と共に吾人が一点の眼睛界裡のみ、更に茫茫ハ窮を考ひ、漠々の極を推せば、杳冥として終はる所を知らず、されば、宇宙を以て無限なり、絶對ありと認む、誰の又喙を容れむや、此の無限なる絶對ある宇宙と、到底吾人の智力と精力との究盡し能はざる所にして、やがて又大神秘の伏在所あり、近來科學の進歩は、著るく怪異疑懼の境を縮少して、古來認究て以て神秘となしさりもの、幾分は、之が爲めに解明せられりと雖ども、此ハ只だ滄海の一漚にだも及ばず、宇宙の總ての頁の讀み盡し得べからざる限り、否な其頁の數をさへ知ること能はざる以上は、神秘の總ての原野も亦開拓を盡され得べきもの非ず、去れば現今の哲學と雖ども、其窮竟ハ終ハ不可思議に到り、宗教亦不可思議に始まるを論なく、科學も亦其基礎頗ぶる脆弱なるを免かれざるハ、固より其所と謂はざる可からず、明月の夜、閑更人定まるの時、窈かき出で、林間湖上の清光を賞さんか、天地の隈、山水の盡、崇大靈異の氣の滂濺するものあるが如く、恍惚として吾人ハ茲ハ無我界裡の人となる、「舷をたたく漁夫あり海の月」斯く歌はれたりし漁夫と、到底人間箇中ハ消息を以て論じ得べきもの非ず、此時の彼は確に一種ハ神秘を感得して之ハ鼓吹されつゝ、ゆるなり、茲に吾人ハ決して神秘を以て實在なりとは斷せず、吾人の謂ふ

所を約すれば、有限ハ手を以て無極の極を探ぐる限り、何人と雖ども神秘の感に終らざるを得ずとなすあり、

詩人と神秘

廣大なる宇宙は廣大なる神秘を藏す、此は決して理學者若くは科學者の如き冷たる頭腦を有するもの、索求し、捕捉し得べきものにあらず、此魔界は終ハ是れ、宗教家と詩人との蹂躪に任せざるべからず、兩者ハ實ニ理學者若くは科學者が認究て以て不可知とあす所の境域も進入して、其處に存在せる物象と其状態とを話説す、而して宗教家は、其信仰の力によりて、大宇宙の大主宰を認識し、凡百の不可思議を擧げて、皆其靈妙ハ智、圓融の力ニ歸するが故に、神秘を語るよ於て、未だ縱横自在ならず、其様式單に一途に拘束せらる、彼ハ聲ハ讚美の聲あり、彼の涙ハ隨喜の涙あり、彼ハ笑ハ偈仰の笑なり、去れど詩人の想像力や、固より無碍遍通にして、其發展は必ずしも宗教家の如く主宰に依據せず、是を以て、其聲と必ずしも讚美の爲めに響かず、其涙ハ必ずしも隨喜の爲めに注がず、其笑又必ずしも偈仰の念よりせず、只だ彼が直覺せる審美の眼識に依り、神秘の魔界を奔馳して、隨處ハ、隨種の美趣韻致を拿る、此ハ實に彼ハ一大天職にして、彼の作に與ふるに、活生命を以てするものと謂ふべし、何となせば、神秘の物象ハ固と吾人の日常聞睹せる境界以外の地ハ屬するを以て、其話説ハ亦吾人の日常聞睹せる如き嫌はしき弱点と不快なる情欲とより離れ、其崇高靈妙の魔趣は、詩的感興を鼓すること頗ぶる強大なるものあきばなり、去れば詩人にして、大に吾人を妖惑せむと欲せば、必ずや大に神秘の妙諦を語らざるべからず、多幸あるかな

彼や、彼は實に神秘の寶庫の關鍵を握るものなり、

Ein Dichter, den im kühnen Fluge

Der Pegasus gen Himmel trug,

Erhub sich mit des Adlers Flie.

營々役々として、思ひ現世の外に出でず、天邊何處にか詩想の大泉源あることを知らざるものは眞個に詩人の渣滓なり、

詩と神興

神秘の芳醇に酔ふ時の如き、其他諸種の鼓吹によつて、吾人の感興と往々にして、其絶頂に達す、此時の吾人は、全く我の我たるを知らず、又人れ人たるを識らざる、有耶無耶の郷に在りて何事をも辨知せず、假し此際の心的現象を以て神興と名づけんか、去らば神興は、一切の意識を容れず一切の念想を容れざるものなるが故に、詩人にして、或大感激を魅せらるるまで、神興の界に到達したるの時、彼は決して此最高最大の情緒を捉へて之を形示するものと能はず、僅りに之に達するまでの徑路と若くは之を離れ去りたる後れ感想とを叙するに止め、他は一に讀む人の聯想に待たざるべからず、換言すべし、詩に寓せらるるたる神興は、全く餘韻あり、而も此餘韻あるものと、論理の結論を抽くが如く、若くは數學の問題を解くが如く、定制の様式によりて、分明に推定さるべき底のもののみならず、其會得れ方法は、點頭首肯をあらわすして、默了あり、以心傳心なり彼等の若干の勞苦を要すれども、此は最も自然にして最も流暢なり、他の語を以てすれば、詩中に包容せられざる最高詩感と。

有りとなればあり、無しとなれば無き、冥々彷彿の間に存す、去れば、詩人が要求する詩の極趣と、或は抹殺せられ、或は潤色せらるる、これ恐ら蓋し避くべからず、去れど此極趣は、固と詩人が嗜好と閱歷との土に咲き出でたる霞中の花かれ、詩人と同様なる嗜好と閱歷とを有するものにあつて、露々の中、極めて的確に其色香を認得することを得べきあり、而も嗜好や、閱歷や、人によりて、多く其趣を異にするものなるの事實は、吾人をして、轉た詩の批判の容易の業にあらざることを思はしめずんばあらず、

詩と印象

飛花落葉の觀象其跡を絶たざる間、哀別離苦の情炎其灰に歸せざる間は、一般人間の思想、少くとも思想れ幾分の悲觀的なるを免り得ず、去れば、英比「シエルレイ」も歌ふて曰く、

We look before and after,

And pine for what is not;

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

と、實に詩人の最も多くは、得意を歌はずして、失意を歌ひ、怡安を語らずして、憤怒を語り、歡樂を詠せずして、苦惱を詠ず、讀むもの、亦多く笑は與せずして、涙は泣き、慰みに安んぜずして、怒に激す、蓋し悲哀激怒等の詩美は、沈痛の素を有し、この沈痛は、由來人間の肺腑を刺衝し易き傾向と有するものあり、歡樂怡悅等の情は之を缺く、去れば、同上人をして又、

Our sweetest songs are these that tell of saddest thought

と歌えしむ、此ハ固よと一側の眞理あり、何と云れば、最も悲痛なる思想の、最も強大なる詩的印象を刻するものと妨げざればなり、去れど、最大なる快樂は、亦最大なる感興を鼓することと忘却すべからず、吾人が茲に最大印象と云ひ、最大感興と云ふも、共に前に述べたる神興に外ならず、詩人の感愴と、悲より始まるませよ、樂より始まるにせよ、其歸趣極致と共ニ神興にして、一度此境に入るや、既に樂ハ非ず、悲ハ非ず、善ハもあらず、惡ハも非ず、只だ彼が、此最高の情態に鼓せられて、無韻の靈曲と奏づる所、吾人は能く之に詩趣を聞き得べけんなり、

漢詩と押韻

詩ハ言ふまでもなく散文と異なる、詩にハ、其内容ハ於けると同じく、其詞調に於ても、暗示的ならざるべからず、即ち詩的韻致と具へざるべからず、人或は、漢詩ハ平灰と韻とを以て、我邦人の耳には、何等の趣味を興へず、全然無意義の規制などか、一概に之を排斥し去らんとなす、吾人と以て之を觀れば、此は確に漢詩の趣味をして、一層詩的をらしむるものなり、蓋し、詩之其技術上の諸規則の繁雜なるに從て、或度までは、詩的價值を増加するものにして、詩人は、規則の拘束の下に、詩語を精選し、若くり又撰擇を來たる詩語によりて、更に其詩想を醇化し、潤色するの便あり、去れば、漢詩の諸規約と、詩の勢調の上に於てハ、適當の効力を有せざるも拘らず、其詞句の意味を以て、著しく詩的をらしむるの點に於て、其價值や決して没却をべからず、

短詩と長詩

短詩殊に俳句を以て、其趣味餘り小小品に、餘りに單純ありとし、其文學的價值を没し去らんとするものあり、吾人ハ斯く如き論者の審美眼を疑はざるを得ず、元來詩想ハ種類ハ、決して一様あるものにあらず、長さあり、短さあり、長しと雖も、必ずしも大ならず、短かきと雖も、必ずしも小ならず、否亦寧ろ感興の大なるに從て、詩想ハ長さハ、短縮せらるゝ傾あり、試よ見よ、極れて強大なる情感に擧たれたるものハ、胸迫り若くは魂銷えて、殆んど言語を口に去得ざるハ非ずや、蓋し、長詩にありては、詩人が或最終ハ興趣に達するまでの情念の徑行を叙し、短詩にありては、直ちハ最終の興趣を描き、出來得るだけ、之に達するまでの情念を略す、否此徑行情念の省略の出來得る度の最も多きものは、詩人が之を形示する場合に於て、最短詩とあり、其度の最も少きものは、長詩とある、是を以て、長詩ハ幾多の詩趣を経て、最高詩趣を登るの傾を有さ、短詩ハ之に反して、最高詩趣より幾多の詩趣に下るの傾を有す、長詩の感趣ハ總合的にして、短詩ハ、分析的なり、彼ハ歸納的にして、此ハ續釋的あり、而して、總合と分析と、歸納と續釋と、各或暗示を探る點に於ては、兩者全く其致を一にも、吾人ハ、一樽の正宗に酔快を買ふことの代りも、能く一杯のブランドも、春趣を掬むことを得るものなり、されば、詩形ハ就だての長短の撰擇ハ、全く詩人が感興の種類に上ハ屬すべきものにして、詩形の長短ハ、必ずしも其包含せる趣味ハ大小と決り得べき標的のあらざる、

人間の風韻

人間の如何なる種類に屬するを問はず、一種の雅懷を具ふるを要す、然らずんば、彼は生活ハ頗

ざる索然たるに終らむ、勿論人間あり、利己心あるものあり、其満足は、彼に與ふるに、或快樂を以てするが故に、彼は此快樂を希望して、其生存行爲を執つて得ん、されど、彼の利己主義は、常に貫徹され得べきものにとあらず、彼の其生涯の行途に、或躓跌を豫期し、或牴牾を覺悟せざるべからず、多少の弱点を必有せる彼は、到底多少の失敗より免るべからず、若し彼おして、其生命とせる主義の遂行を誤らんか、彼は失望せざるを得ず、煩悶せざるを得ず、甚しきは、自ら其身を殺すよさへ至る、去れば、此時に當りては、吾人は到底、何物にか吾人の慰藉を求むる所あるべからず、換言すれば、一種の風韻を有せざるべからず、

心事茫然兩鬢班、十年空走利名間、

算來只合苦磯坐、釣不得魚獨自閑、（葉唐卿）

這般の韻事を解するもれよあらずんば、未だ以て人生の真趣を語るに足らず、跼蹐辛苦、齷齪として五十餘年の窮子となるもの、眞は憫れむべからずや、人と厭世と樂天とを説く、會々利己心は満足を缺けば、則ち是れ厭世の人なり、會々利己心の満足を得れば、則ち是れ樂天の人なり、故らに厭世と云ひ、樂天と云ふ、共に是れ良玉に篆するの類、却て人生の真意義を損傷す、等しく是水かど、而も牛之を飲先ば乳とあり、蛇之を飲先ば、毒とある、眞個に人生の風韻を解するの人お至りては、失敗も亦其慰藉の料よらんとのと、

（未完）

詔 景 錄

花 樵 人

妹は誘はれて、亂きておひく青柳の、いとのおやかなる春風に裳裾吹かたつ、辰己の野邊歩行さぬ、眞中に、笠島どう浮ふか如きある沼の岸に、先くみし芦のみまかきをぬみしたき、莠指もて根芹摘む子等りあまたに、水も濁れり、幹雄様かと妹の指せる、蟠龍の如く水に臨む巨松の影に、伯母か愛子と乳母と立てりけり、影も睦みて互にさほひ、摘ためしを誇顔に、我に見すへう持てくる筐を、何事や折置まも、すゝつと走り様に、里のわらわの大きやうなる悪くくしだの、奪ひつ、さて、地おあけうつさへあるを、驚く恐にさきもえせぬ妹に、心地良氣の嘲笑をくれいと沼越しの屑屋のかかりとと、妹を慰藉光つ、幹をの語りだ。

柳多く植へたる穢多れ在處うあ

狐かく二萬堂川の春さむし

寺千年若おに錆はあのりけり

障子の陰よりあはれはれつ、庭下駄の音ぬすみて、小女の前髪風になふせ、花釵の眞紅の房さくさるか、老鶯の姿とめむじや、さくさくの稍れるなは、情あくて飛ぶ羽風に一片三片散る花を、てぬよくとして手さま上げつ、とひ石傳ひ行く裾の花もやう、映山紅の地は蟠蜒するよ爪付きて倒れつ、起死なむとえて落椿の白さを拾ひ上げ、袖に押當眺め入りたる無心。

遊子禿と夕の花を眺めなま

初櫻院のほこけは皆小さし

野くれ山をれ立ちのいろさの旅よ旅の身も、七瀬を下す筏士う水さを、さどかに見すてかゝく

て、咲くやゆかりの董をつみつたこり行くほどに、夕陽川末におちてかすみの堤つゝひ、今更心せ
かれて分れとく驛を遠み、丈け延ひてあふ枕とて、結む毛のを、若草の夫れもすちなねあは
れなり。

恵れし董に雛をむくいなり

有縁無縁は夕暮れて春の雨

土筆殿のつむりにして蝶のくれんとす

蝴蝶と見しいひとひつ三片、やうて霏々、半ハ苔徑を走りて泉下に歸し、なかは、空に舞ひ遊ひつ、

淡々たる疎簾のひまどめて、もれれた花の自ら文は菜とこそはありにけれ。

渡場は旅僧とてりハな吹雪

花か水泡か羽織流る、春の川

白妙に春の水くゝる落花うな

さほ姫のすゝろなりさやすらむ、うすみの濃く立ちつ、誰れよをくれゝるふん急く孤雁一聲、故園
の情切ある茅簷を通ふ剪々たる輕風に聲を飛ばす玉笛の主やたれある曲の酬あるとさ遠らぬわた
り柳をるこゑは聞わた。

首輪紅き猫よひすかり朧月

去年の春を恩賜の笛よ忍ぶかな

賊打て御愛の笛を折つてけり

心にく死まで古雅ある庵の匂ふ叢雲の奥に見えつ、黒木の門白霓裳やかくとりかまに、咲きのを
りの櫻の木よ、三才斗りある鹿毛のはてくしきをつあけるまうゆかした、いか、けと花舞たて
かみふふりつ、そのあまりれ軟風にあふれく、て、汀に散れるを、悠々たる水や誘ひていはちゆ
くらむ、と是れい、下きく高く一入再し甲の紅雲の、うつれるう波れまに、こそ花語ふすと嘆つ
は輕漾激して影唇を動かそものを、と詠しけむ故人の心情事理とて。

里の子の牛渡さんとす春の水

白魚に京の水かぬ怨あり

燃ゆる若草うち死て、ひさに紙のへ、片手の蹲踞る大きやかある犬の脊撫ては、陽艶なき野邊に
のゆきかく行き董摘み土筆折る、子等か群を眺坐居るか、不意よかたへは揚抑のうれを見わけき、
何あふむあられ。

春風よゆみ袋ほす野守かな

馬繫く木と兒の申すやなき哉

老梅れ幹あて玉ふれば御所

鬪鞍踏て末野に雉子を逸しけり

梅か香ぬ、み枕に通風風の秋ならねとを身に染みて、心行く折ありけり、欄に倚て見れば實に目も
のるれ曙、莖た、す烟短かき若草のうちりぬる園のた、すまひ、艶にそ、旭に榮ゆる椋の松お交り
て立つ築山のかひよりひきく、簪のほゆの玉かつふいと重けある、眠亂髪の青柳にかゝりて、小櫛

と見ゆる有明月よ、薄紫の霞の奥に残れる云ひ知らすわかれふ。一むら竹に床へ坐てしうへも絶ふ
唱ふ鶯の二こと三聲、いかにゆるしと聞きけむ袖垣のかたへ、いさら井を汲む先さしの、手をや先
て我を顧しつ、お指さし示し静に打笑するの、かのを驚かさぬのまひや。

青梅は短冊くゝる内侍のな

月松をよほれ梅におろくす

近うして胸さわわかるゝ鶯や

襟見にも頭巾冠るへく伯母老ぬ

垣間見てやあきの雨を冠りけり

文苑

初春月

愛花生

杜花

あけさごころ人慰めの爲にとて杜よや花の咲き亂まけん

春の歌

くつみを弛めし駒のうて髪に二ひひ三片散る櫻かき

遠山霞

見渡せば遠山櫻咲く時を面影見せて立つ霞のあ

垣山吹

物言のぬ色中々に山吹の包ふ垣根れ主ゆかしか

亡母の佛事行ふよし云ひ越せり

逝さまえ、御靈祭ると聞くかゝにのななきことこの思ひ出さるゝ

藻鹽は煙

養廻家清定

海邊霞

和歌の浦こき出てゆく大船の帆の上にかすむ淡路しま山

春山

白雪はまた消えやらぬ岩木ねの入日かき光るはるの夕くれ

待花

我れみの梢みやとる夕つたもおな一心にいさをまつふん

花

入相のゝねに心のいろかれてちる花さひしりるの夕くれ

梨花

野も山も花にのすめる春の日よまの里のみはゆたそふりける

和歌六首

長谷川福平

母またくれし子にありて

わりなしや烟と共にきえはせてなけきのもゆる我れもひかも

親しき人のみまうりこころ

あひ見てし時分わかれとなりおける夢にぶおもが事とはずとも

みまの望し人の靈れ前に

子れための命もすべあむたり川宮まろ死たくも今とこゆふむ

同

岩がねおとめし小松れ生さきを見ずてくやしういにし君かも

柳糸隨風

咲みてる花にの見えぬ朝東風よのたよりける青柳の糸

歸雁遙

玉銚の道の行手の花きかり見つゝや雁のいまかへるふむ

農夫

金崎愛花

鳴く鶯の聲清く、

錦を飾る花の日も、

色香を競ひ野に山お、

愛でんとせざるれとまも。

空晴れ渡り氣も澄みて、

俵を積むに余りあり、

雁金落ゆる庭れ面お、

かろだりひぢによむるれと、

瑠璃敷につむる月の夜も、

心は潔し雪よりも。

眺めんとせずなれいしも、

花見る人れ心には、

伏屋の中より起居して、

夜半の嵐の恐あり

朝夕ひぢに埋れは、

月を賞づる懐ひには、

晝夜とあくいそしみて、

叢雲蔽ふ嘆きあり。

何樂しみに世を渡る。

光長閑き春の日に、

あな訝かしの問ひ言や、

はたけの畝をわれずてば、

胡蝶飛び交ふ春の野に、

ろよ吹く風よ早苗取る、

咲き續きたる菜の花を、

むすめれきたの聞ゆあり。

はたけ打ちつゝ見ずや君。

あまら重げにうなごまし、

星を戴き月を踏み、

門田の稻をわが刈れば、

歸ると我の習ひあり、

かあたれはさむ干さんとして、

月と花とれ吾目よは、

妻嬉しげよはこふあり。

あま珍らしきとやある。

其日のつとめ畢りては、

賤が伏屋も吾身には、

先傾くる一杯に。

無量の樂いこもるあり、

其味を知るらんや君。

葉舟集

葉舟吟客

序

ふごりはては、 さうまける、
 急流にうかぶ、 ひとひらの、
 はぶねににさる、 身にしわれと、
 君よあやしむ、 ことあられ、
 うれしきいろを、 ざちとして、
 うまれるハ赤の、 さげふあひ、
 この世の樂を、 うたふべき、
 けらなをゆたむ、 身にあらじ、
 かなしきあさを、 ざちとして、
 うちばれあげき、 歌ひつゝ、
 露おもたげの、 ろれさまを、
 うつゝに見る、 わがみあま、
 川なみいに、 くるふとき、

ハふ縁のくづけ、 ちるがごと、
 れのがあげきれ、 むなふとに、
 ひいきやぶれて、 あふるる、
 わがうたふの、 まことありと、
 しれやきみ、
 ○まのぶむね
 いてなくひろた やとむ縁に
 所せだまで つゝみほ、
 つもばかりぶの あげきさへ
 もらさぬなへに 人々を
 あれをかかめて うつしよの
 ろばぬるほどの くるしきも
 知らぬたふとき ざきひと、
 さゝやぐならむ うちくくに
 うかゝかすめる 春の日に

枝かくすまで

さきみづれ

天にまします

佐保姫の

雲のみ々に
愛づるあれをい

うをれども
みてしとま

みきの真中の

朽ちしほる

老たる八重の

さくふ木か

のこぼなげだを

いらざるか

油のことく

あはらかに

しほさるもなく

をさまれる

しづけきさまに

みえなせせ

あはれはほりけ

みかかまは

八百のうしほの

わたかへま

みてゝはあせし

低矢よりも

あほいちはやく

はしりゆく

ながれありとい

いらざるの

この現し世に

あまおせる

あすかざりあは

まがまとい

たゆるまもなく

せめよせて

無間のやみの

くるしみに

千々とあがむね

みぐるれど

はにぞつゆしも

あらばさで

云はぬいふに

いやまざる

しのぶなげきを

しらざるう

○葉末の露

葉末にむすぶ

ほゆあるに

すみてけがれぬ

しらすと

いくろの人を

あざむだし

つみいしましも

あふはれて

さとふまわるる

夜あらしに

をしまれもせず

おちりつ

にごりにごりま

あしみづの

泥にむせびて

けがるあま

花かたみ

千木筑紫郎

柳ゆらぎ燕飛びすぐまの影
揺かごの乳兒午ねむる桃の花

試に東坡の七絶「鳴鳩乳燕寂無聲。日射西窓潑眼明。

午睡醒來無一事。只得春睡賞春晴。」の意をとりて

酒醒めて睡しめやぐはるの夕
河尻やあみ引くひとの夕霞ひ

豊泉

賃橋にぼる手してある春日哉

青柳に寄進手跡きやれるの風

帆越に菜のはあ霞む淡路ま

夕榮て獵者のかすむふもと哉

はし錢を入るゝ小かごや青柳

麥畑に門朽ち残りすいめの巢

燈臺にかも免五六羽はる雨す

雉子鳴く岬のむらや朝がすみ

幽靈出る雨の柳やふるやしき

再復孫霽人先生書

村上 函 峰

村上珍休謹再復孫霽人先生傳史。頃者辱高駕來臨。送迎不恭。罪无所謝。見示尊報。感愧何極。竊以爲必有啓發愚蒙。及反復熟讀。僕之惑滋甚矣。尊示云。无精注者。本危微精一之旨。非謂注不精也。先生純守朱學。而似不知其或背經旨。古今尙書有「人心危」。道心微。惟精惟一語。今文無之。故宋明以來大儒。皆不取焉。論語堯曰唯止允執其中。无危微精一語。荀子引「人心之危。道心之微」。舉道經。而不舉虞書。則知非堯舜授受之語也。朱子卓識。非不知古今文之辨者。何以取之。蓋欲以張自家性理之說。不借名堯舜。无以取重。故中庸章句序。舉以爲一篇骨子。耳。后儒不察焉。推尊以爲金科玉條也。僕固折衷漢宋諸儒之說。不墨守朱學。舍短取長。爲朱子之忠臣。不敢爲朱子之佞臣。獨先生之奉朱學者。或无乃過橋拊橋乎。然人各有見。僕與先生學異其統。何必強論之。若夫至云秦火之后。六經之傳於世者。皆經劉歆輩之私刪。已非真本。漢魏群儒聚訟。甲是乙非。遂大失本來面目。僕最惑焉。苟治經者。誰不知六經或有改竄。而未。有如下先生之概。六經。以爲出漢魏諸儒私刪者也。嗚呼先生何爲恠誕駭人之說也。若書有古今文之疑獄。暫舍焉。夫詩雖或散逸。其爲孔子刪定也明矣。后儒豈更改竄乎。不唯詩爲然。若周易。自伏羲始畫。文王演象。周云繫文。孔子贊翼。實宇宙間之至文也。思孟至誠性善之說。不能出其範圍。非三聖則決不能言也。而歐陽脩獨疑十翼非孔子言。非云論也。先生概以六經爲劉歆輩之私刪。則詩易之精義至文。亦爲係私刪歟。是漢唐宋明以來諸儒。所未嘗言。而先生獨斷言之。僕未知先生何所據也。若夫周禮出。劉歆僞作。後儒多言之。先生无乃謬記其說乎。僕嘗謂六經間有後儒攙入。其瓦礫與金玉。讀者審之。決不難辨。若以白璧微瑕。一概抹

殺六經。恐非公論也。顧先生卓識高見。必不爲此等謬誤。而今遽爲此怪誕駭人之說。蓋欲矯人之弊。偶然至此耳。僕之爲此言。非不知忤高意。然默而不言。是負先生。并負聖經也。以是敢妄陳鄙見。以乞教。僕今有寒疾。不可以風。故不能往以答禮。會田川生來。以書附之。伏惟海量照容。二月十六日村上珍休再拜。

田宮如雲傳

浦井信

田宮如雲。姓平。名篤輝。字□□。號桂園。通稱彌太郎。後稱如雲。尾張人也。世事藩主。大塚正甫之第二子。出嗣田宮翼家。任監察。傳公業。無嗣。時。文公爲支。封高須藩世子。幼有令聞。藩臣多屬望。而懿公自田安第入繼。於是如雲欲迎文公。以爲儲嗣。志士同盟。稱曰金鐵黨。遂皆蒙譴。如雲亦罷職。欽公立。起如雲爲市尹。及公薨。文公入繼統。擢爲參政。當時士氣漸衰。財政又紊。如雲則勇奮勵行。面目一新。後征長之役。軍費無算。而免缺乏者。蓋其効也。自外人窺邊。國事日艱。如雲輔文公。執掌其間者。不一而足。安政中。公蒙譴幽閉。如雲亦褫職。屏居城南陋巷。飢寒交至。泰然不動。自耕自春。吟詠以樂。偶有來談時事者。辭而不見。隔壁獨語。以示所思。其憤獨且不忘國家者如斯。及文公再出視政。如雲又復職。當時海內處士橫議。激論百出。如雲赴京師。或謁公卿。或訪諸侯。調停甚勉。及征長之役起。公爲總督。如雲參謀帷幄。兵不衄刃而結局者。爲與有力。己而大將軍不憚公措置。乃親征問罪。途泊名古屋也。如雲亦褫職屏居。蓋以有觸幕府之嫌也。無幾復職。從公上京。如雲夙懷勤王之志。於是贊成維新之鴻業。召爲徵士。列參與職。掌京師及伏水之市政。東軍之到伏水也。縉紳蒼皇。或以爲宜遷蹕。獻岳

以避之。如雲曰。今日之事。勢異元弘。人皆知大義名分。何要遷蹕。議卽止。己遷內國事務局判事。時東軍入信州。勅公討之。解如雲及成瀨正肥職副公。二人分道赴之。如雲獻策曰。信甲二州。固稱天險。敵若據之。其勢振動尾濃。及畿甸也必矣。宜置鎮甲府及松本以抑之也。則先遣部兵數人。扮爲容商。間抵甲府。每戶標尾張先鋒宿五字。到夜四山舉烽燧。敵驚曰。大軍至矣。狼狽而遁。事平爲藩執政兼北地總督。尾張之爲地。平野坦々。當東海東山之要衝。一朝有事。牙城失守。則不可支西上之敵。因置總管所于東南北三疆。以備不虞。如雲則徙大田。聚兵爲屯田計。名曰草薙隊。繼爲名古屋藩大參事。及朝廷論功。賜世錄四百石。明治四年四月日卒。齡六十有四。私諡曰文正。有三子。長兵治嗣家。次良順出嗣勝野氏。季魁之亟。嗣秦氏。後兵治告老。子鈴太郎承家。如雲爲人。諱厚忠直。學宗餘姚。夙興靜座。而後執事。旁好詩文。有遺稿數卷。又長武技。幼不耽嬉遊。好弄長槍。人呼曰好槍兒。壯而名聲籍甚。當時俊傑。藤田東湖。吉田松陰等。來納交云。水戶烈公。又辱知遇。如雲之隱退。烈公謂文公曰。今也國家多難。勿以瑣事貶賢材。文公有悟。直復焉。十年車駕東巡。過名古屋。賜祭資五十金。十八年追贈從四位。三十年更錄其勳功。以鈴太郎。列華族。授男爵。兵治亦叙從五位。

贊曰。如雲遇幽閉。而坦然不憂。似龍場驛之謫。而甲山舉燧制勝。似橫水之役。舉職以驚賊者。固非腐儒者流之所能也。戊辰元旦。奉拜宸儀。賦長律。其結曰。稜氛一轉皆和氣。聖德期逢暉々年。今也子孫受榮爵。實可謂逢暉々年也。然而其致之無他。在學問之實。心術之醇。嗚嗟其有得王氏者可謂大哉。

讀逍遙遊

在文科大學 九龍齋主人

中庸曰。天地之大也。人猶有所憾。故君子語大。天下莫能載焉。然則物之大。未容易可窺測也。昔者莊周。學無所不闕。識無所不至。氣恢廓而心恬澹。所著十餘萬言。其言本於老子。而其意與孔子不違。善揀擇兩聖之精美。以爲一團。實爲大悟之人焉。後世如司馬遷。只見一面。未之知其他者也。莊子全部。以內篇爲主。而內篇中。又以逍遙遊爲眼。逍遙遊一篇。依陰陽之理。寓言。以說太虛之道。方位。數字。物名等。皆從易來。彼是相照映。逾明其意。益確其說。故解陰陽之理者。而讀之。則始生言外之思也。必矣。開篇第一曰。北冥有魚。化而爲鳥。將徙於南冥。是謂善養人性。則厥德得通于天。如孟子所謂。浩然之氣。至大至剛。以直養而無害。則塞乎天地之間者。是也。如書之光被四表。格于上下。則稱此大德也。然人猶有形焉。可以比天。之無正色。遠而無所至極。邪。世人屑屑。小言以不覺此大。或有覺之。不知所以用之。小知不及大知。小年不及大年。數數然者已多。而有所待者。猶甚於矣。至夫乘天地之正。而御六氣之辯。以遊無窮。莫少待者。所謂無己之至人。無功之神人。無名之聖人。天下數百年間。殆莫有一人。僅得許由藐姑射而已。雖彼堯舜。學而漸得配乎天。然若能覺其大。併知所以用之。則當知了。逍遙於無何有之鄉。廣莫之野之大樂也。通篇議論高大。秩然有經緯。一讀。有望。太洋。仰碧空之感。再讀。忽爾有大所發明。蓋逍遙遊三字。言下消欲遠邪心。遊於天外。結尾所謂。無爲彷徨。乎無何有之鄉。廣莫之野。是也。可謂言諸子百家所未言。而能說盡大虛之道矣。然莊周豈漫好大言乎哉。蓋身生於戰國擾亂之世。介於儒墨諍論之間。慨然欲矯時弊。霹靂一聲。使聳動時人之耳目。而知有大道存。洵是當然之事也已。王安石論莊子曰。先王之澤。至莊子時。竭矣。天下

之俗。譎詐大作。質樸並散。雖世之學士大夫。未之知貴已賤物之道者也。於是棄絕乎禮義之緒。奪攘乎利害之際。趨利而不以爲辱。隕身而不以爲怨。漸漬陷溺。以至不可救已。莊子病之。思其說以矯天下之弊。而歸之于正也。而其志實不外于憲章老子之常無欲以觀其妙。常有欲以觀其微。中庸之喜怒哀樂之未發。謂之中。發而皆中節。謂之和。易繫辭之易有大極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。等也。莊周豈漫好大言者乎哉。誠可謂能說述大道而指導天下者也。嗟莊子之大口。豈庸俗之所可窺測哉。

詩壇

金澤途上

秋 蹟

湍水浮春春忽流。芳華九十奈難留。幽燈灑盡三更淚。綺夢仍殘一縷愁。不省狂名人世起。翻怡奇氣酒杯浮。客懷孤迥同誰語。暮雨瀟瀟古越州。

極目平蕪落照中。天涯春色去匆匆。才華忽盡人還筆。骨相猶奇氣吐虹。紅豆東華人隔澗。綠波南浦草迷濛。風塵汨沒半生感。一夜霜飛著鬢蓬。

莫遣吟思闌外挑。飄花恐不耐魂消。微風濕帳春燈雨。密樹沈香寒夜簫。獨抱古愁甘寂寞。空餘宿恨

伴淒寥。吹來隣笛破殘夢。斷在芳洲千里遙。

忽々流光月兔飛。回頭萬事與心違。蒼茫身世離憂

子。便相見處便相思。

森槐南曰。天教二句。何等抱負。如此脫俗。白山

之靈。料復不嫌唐突西施也。

暮春感懷

在骨子

獨。落拓江湖所遇稀。紅雨斷魂迷此夕。青山埋骨終生不識綿繡裝。

待吾歸。十年寂寞琴書恨。寄跡風塵淚濕衣。

韶華散盡酒無醺。自是長卿懶綴文。舊恨新愁眉宇

合。半牀孤獨夢痕分。東風狂蝶春前草。微雨啼鶯

日暮雲。回首蓬山天一角。滿帆離思亂紛紛。

痛淚憑誰灑故園。側身俯仰此乾坤。夜絃觸我懷人

夢。曉笛斷他羈客魂。轉軟雲山峯當路。劇憐煙月

淡臨軒。茫茫身世飛蓬感。兩歲空過湖北藩。

鬼雨凄然遶草堂。一歌一哭酒千觴。斬姦無用劔鳴

匣。報國何時文滿箱。願我乾坤空白眼。笑他富貴

熟黃梁。囊中猶剩一枝筆。萬丈安成光燭長。

咏史百絕節錄

子陵釣臺圖

家在富春泉石間。紫扉盡日白雲關。淡照不羨功名

事。却樂一裘垂釣閑。

香淚餘瀝

江南漁郎

江南行

歲次丁酉冬十二月。我憶儂人向江南。江南烟波渺

千里。宦鬼越嶽悲我心。玄氣陰々獨往客。雪花如

掌拂征驂。朝逢猛虎。夕聽怪禽。不問行路難。乃在

致忠忱。行藏一劔風吹鬢。感慨孤亭淚濕衫。嗚呼

玄冬。一去乾坤新。初試幾曲春風吟。不拂彼半天暗

翳之妖魔。安得仰聽白雲青山美人琴。

斬魔吟

怪雲漠々風蕭々。一劔直入妖魔窟。魍魎魍魎先遁

萬縷色如雪。累々疊々盈筐箱。如此辛苦果爲誰。

蠶婦陰舊作

黑子軒

顏不沐兮髮不櫛。衣是襤褸鞋是芒。于春于秋又于

夏。桔据黽勉事採桑。偏願蠶肥繭速就。繭就一家

樂方長。少婦檐端晒蠶子。老婦爐頭煮絲忙。千絲

逃。難盡平生巧黠猾。一喝翻身疾於鶻。排去陰鬱

魔王闔。中在蠶人惱幽囚。塵華十年亂翠髮。可憐

宵渺天上物。一落人間多抑屈。清節遭逢春無情。

欲教秋蘭爭芳烈。瘦軀吾也重心骨。且爲蠶人許摧

掉。奈何乾坤久拳曲。俯仰身世堪幽咽。今日初酬

終天仇。且脫劔佩得心淵。簷端風死竹樹靜。半村

青山驟雨過。須臾雲晴春天朗。江南二月梅花發。

暗香脉々東風裏。窈窕傳來五絃瑟。呂律才調忽生

悲。回首風塵望天末。丈夫難奪功名志。南船北馬

苦契濶。奈此世路迂曲何。且去死別更生別。君不

見萬山合沓越國路。越路之遠猶可達。越山之雪不

可越。

無題

好山住吉住無因。似綺年華泣別頻。世路何曾夷且

坦。人生必竟笑將纒。花裏愁淋連夕雨。笛中魂斷

五更春。相思脉々欲誰訴。曉起慵開粧鏡新。

澹煙微雨竹條坡。薄命蠶人奈爾何。二十春茫茫短

夢。一千里黯々長歌。情能輸鬼愁當少。才到驚天

恨也多。一曲江南落梅恨。寄成詞賦託紅波。

去來日見吸江潮。來去難期出浦橋。作雪楊花飛碧

水。泣珠鮫淚裏紅綃。二三四點風前雨。百八十間

煙外橋。無限離愁上眉暈。筆山有筆不堪描。

花外耐聽嬌語鶯。春宵孤客對江城。狂潮送響警南

去。苦雁放聲傷北征。夢覺後鏡光獨坐。魂銷中兩

滴三更。高樓莫漫凝遙望。煙霧蒼茫別思盈。

北陸行

琶湖天壓風水愁。芽嶺雲高山骨浮。蒼々關河向北

極。一條鳥路攀越州。越嶽嵬峩官冥際。峻盤千折

磴道綴。層水踏摧熱馬蹄。雪風如刀裂衣袂。游子

骨相元來奇。獨往堪聽清猿悲。日夕望鄉腸欲斷。

江南風色遶夢時。吹夢天風飛鉄笛。仙人擬破我悲

感。靈露浩下孤光來。欲往從之挹玉瀝。洪濛一氣

星斗羅。金支翠蕤紛相披。洞中玉女啓窓戶。招吾

骨冷心清身竦然。電滅空見大空碧。隔絕天人望茫茫。暖入春瓶酒味柔。乾坤那處着閑愁。半灣垂柳驚眠々。鈞天廣樂夢一場。丈夫不下窮途淚。如此山水艇。深院落花人倚樓。小酌何須錢樹子。新詩已付助吟狂。俯瞰北海浪頭白。千峯潑黛晨霧闌。朝曦管城侯。謫仙真個多情者。又作芳筵秉燭遊。杲々鞭影高。躍入天邊金澤陌。送友人之東京

排悶 君峰外史

唯使人間有杜康。丈夫何事豈悲傷。放歌痛飲君休怪。愚也不愚狂不狂。蓋世名。更約他年相會日。杯樽溫故繼鬪盟。前浦沙禽起。櫓聲一葉舟。漫々水涵月。花氣滿芳洲。春江花月夜

贈一望子 愚默

東向關雲玉笛哀。孤城淒月獨徘徊。憶君千里絕絃曲。故國春風哭落梅。落梅招魂 香陽未定稿

四園四時節錄 龍山梅塢

桑柘滿園新綠堆。一郵蠶忌寂寥哉。得聽犬吠籬門下。托鉢山僧乞麥來。梅花南海千里春。倒吹東風悲飄忽。亂點香萼碧波上。雲裏清魂任飛越。思君吹笛曲浦月。魂兮不來空愁絕。沛乎吾將乘桂舟。奈何驚浪忽蓬勃。飛沫噴紅濕衣髮。宵渺中洲不可達。吾有陸離佩劍長。可入水底蛟蟠窟。烟霧低徊失所躡。磊々石路仆又

春興

蹶。歸來魂兮着故土。爲吾挽回青春活。人間滔々山竹裂。

訪秋蹟詞宗作韻脚以話夜分

多殘賊。不容幽閒專貞質。春風尙且嫉清姿。誰知水心玉骨潔。千古胡沙埋皓齒。何時魚目笑明月。對坐挑燈話夜分。神清骨冷此逢君。梅花低亞書牕林苑春深俗花滿。傷目吾心獨鬱結。翻欲高舉相翔雪。竹影寒浮吟榻雲。萬里東西誇探勝。千年上下翔。縞衣隱約杳天闕。臨風獨立五情熱。鶉聲夜半入論文。句成殘漏休高唱。恐有前檐醒鶴聞。

批評

第十七號詩壇概評につきて一言紫溟漁郎に問ふ 春日野鹿之助

石田黒土軒……………詠詩百絶

敦盛吹笛圖の五首中の佳作と其の批評眼の高に感服仕候さりながら日本武尊の轉句憎他海上龍神惡險澁極りあゝとい何より由りて此く評せられしか憎他の字險澁あるの但一は龍神惡の三字險澁あるか僕は詩學に於て幼稚未だ能く君が批評の意志を解せざるも定めて龍神惡れ三字を以て險澁と評せしならんと愚考すされば古人の詩にも風雲惡との風波惡とか又は青蠅惡とか往々用ひ來れどされば此が巧拙はいざしらず單に此の三字を以て敢て險澁なりと評するふといで死かいと存トせず第二首の結句も随分覺束なげなりと評せられしが其の所謂覺束なげなりと何の意か其の句の意義通ぜざるを以てしの評せらるゝ將又彼の平仄二四六分明云々の法式も叶はざるを以て

但し仄韻は詩の前は法式に適合せずとも宜しくある様に承ります其の例は澤山ありますが先づ岑參の酒泉太守能劍舞高堂置酒夜擊鼓胡笳一曲斷人腸坐客相看淚如雨の詩にても仄韻の詩の強ひて平仄に拘泥しさいと云ふこと十分明らに知られます第三首の結句賦新詩の事實吾人不敏にして未だ書史に見聞せざるを悲むとあるも作者の定めて清姫が香爐峰頭の雪景の何如にこの御意に應じて玉簾を掲げ古人が物せし香爐峰の詩を吟せし事實より賦新詩と用ひしなからざればとあり適切の字面おあらざるもしうし差したる誤にあらざりと思考せりと何れ識者の教示を得て他日はを論ぜん評者紫溟兄此詩の第二句の玉殿玲瓏雪霽時は字々皆赤白の字をを冒せるが何如に考へるや僕も此の厭あるを拘りて其の句調の稍流暢なるを以て別お悪しきといふさざり又第四首則菅丞相の起句妖氛の二字甚だ穩かならず此の字は決して斯る場合も用ゆべしに非らずと信ずと申さるゝが妖氛塵氛陰氛かどハ悪しき方に用ひる字面にして作者の菅公の實なた譏言に遭遇せしをこか物に例へて妖氛の字を用ひならんと想像すされど斯く例ぬるよりも纒言に遭ひしものなれば事實の通りに纒言は字を用ゆべしと申さるゝかゝる餘りほからさまで面白く考へますし妖氛より一層適切の好文字を用ゆべしとあれどもあれ又結句は轉は對して宛も竹に木を接ぎたるさまにて可笑しげかり去るよても月明も秋氣をさかする意かそは頗る牽強と曰はざる可からずとあるが抑も竹に木を接ぎとは青天白日雨濛々の如き不似合の事を云ふものにて右の結句の轉に對しては青天白日雨濛々れ類おあらずと竊に考へますを菅公配處の荒涼たる凄月を眺めいよ昔の娟々たる秋月清涼殿上に輝き一夜龍顏咫尺に御衣を拜せしことを

思ひ起し以て天恩の優握なるを感拜せしうが心情の一点濁りなくして清らげあるは皎潔なる秋氣より一層清らかりとの意にて轉は月明の二字を點し來りてを以て結に秋氣の字を用ひ清涼殿の因を以て清の字を押韻せしからん然るに月明も秋氣をたかする意よりは頗る牽強と曰はざる可からずと申さるゝは是れ詩の意を解せざる人にてよれこそ竹に木を接ぎたるを評して可からん第五首の承句の散遍とは不都合否究し果てたる文字お非らずやとは少く妄評の範圍にあはすまいろは嚙曉なる笛聲と朝霞を隔て、搖曳と須磨四邊に響け散ずる様を作者は此の如く散遍と用ひしものよて吹遍開遍散遍とは往々用ひる字にて別お僕も究したる跟跡を止めずと考へます去るよても一層好適切の文字あればいざしらず

抑咏史と詩人の難しとする所然るを黃吻書生已が學を銜はんとして漫り筆を執る是れ其の分を知らざるもの固より評者紫溟兄の嗤を受くるやせんすべかし況んや此等陳套なる咏史諸題に於てをやされど余又紫溟兄に望むもの一あるありろは此等諸題は陳腐と元より陳腐なりされど一概よろが題の陳套なりとて棄て去るべしものおあらず何如とあれば初學者の古人の作例を多く讀み先づ陳腐の題よりして進んで斬新の題に入るものにて初より斬新のものをものせよと求むるの其の當を得るものにあらず少く初學生を補助する策を畫し賜へ

鈴木牧馬……………丁酉九日辭東都偶賦

起句亂五更の三字頗る險澁なりとあるが何等のかどを以て險澁なりと評せられしか此が作巧拙はさてを此の三字を以て別に不都合なしと考へまを定めて評者は亂五更の三字を五更を亂すと

讀み誤りゝなふん又轉句何だの面白くねん意義に於て差支あし此四高を卒業せしめてさまで錦衣にてもあるまどとは餘り嘲笑的妄評にあらざるや何となれば人各々其乃分とする所あり中學乃科程を畢へ或と又高等學校を卒業して甘ずる人もあふん將又圖南乃翼を張り萬里怒濤を躍りて偉業を奏給んと望む人もあふん然るに此乃如きことに多言を費すはこれ詩評乃範圍を脱して人物評に侵入せしも乃と謂ふて可なり此乃如きは一向好ましきことにあらず失禮ながら君乃詩尙稚氣滿々たりとの評語これ適切なるや否やはいざしらず蓋し此作れ唐調を倣はんとして未だ其の堂に入らざるもの所謂虎を描かんとして猶ほ猫を類するものか評者以て如何となす

秋月庵……………憶亡友

先づ誦するよ足る者斷絃終古一句全章を振ひ頗る力あり云々と評せられえと僕も同感かと思されど絶句に被風摧の文字を用ふるゝハ餘り好ましきことあらずとあれど被風摧の文字別よ妥當を欠けざるものにあらずと風摧、雨摧の熟字もあればうが害を被むるの意なれば別よ悪しくも何と而して此の字絶句を用ひては好ましくならずとわれは律詩か又は古詩にても用ひなば大に好ましくありませうか次に轉の一世の高姿の字穩かからず讀者或ハ誤りて一代英姿と解する者も無きに非ざるべし……………一世高姿とい一代の雄を指す義ありと折角註解の勞を取らざし骨折損のくたびれ儲けて抑も詩文に一代なぞれ文字ハ多く用ゐずして大抵は一世乃字を用ゆ赤壁賦にも固一世之雄也而今安在哉とあり且は一世と一代と之意義判然とて異なれり恐くハ誤解する人かからんるにても君か如く一世高姿とは一代の雄を指す義なりと誤解せざるゝハ弘法も筆

の誤の類なるう扱て一朝一世の重複する厭と評者何如よぞや希くは他に換險べん好文字の探索に勞を取られし

北村香陽……………古詩四篇

香陽の詩固より以上諸氏の作とは目を同くして語るべき者にあらず少くも君が北辰詩壇に牛耳を取るゝ吾人の公言するに憚らざる所とハ實に適評僕も亦常に其の作の雄麗宕逸悲愁奇骨あるを喜ぶふりかへりて評者も問ふ憶岐山先生在能州ハ失敗の作あるべしとは何如なる方面より觀察して此く申されば又憶岐山在能州の憶字極先妥當を欠けり是等ハ宜しく寄懷云々とあるべき所かりと識者の嗤をも顧みずしつ先づしく出られしハ所謂盲人蛇を恐れざるの類の抑々當題の憶の字を此の如く用ひられしハ是れ古き用ひ方にして唐時代にハ澤山用ひしかり例せば王維乃九月九日憶山中兄弟と題する又梅堯臣の對雪憶往歲錢塘西湖訪林逋と題するものあれば是れ憶何々と唐時代は用ひまこと明かあり而て又寄懷云々とハ是を近世に至り慣用し始れしものにて唐宋詩中余不敏として未だ此の如く用ひ一人あるを見ず只寄韓鵬、寄揚侍御とか秋夜寄丘二十二員外と有るを見るのみ又同詩中一夜太卜傳の一句折角の箇所ながら前後何等の響をも惹き起す能はずして茲又一頓挫を來たしぬ岐山を以て嚴子陵よ比せられたるも頗る配合を失ひたる者よして異様の感トせざるゝなりと喋々註釋的批評せられしと作者も取りてハ一向難有味少か死者あらんと察します僕愚考するに評者ハ一夜太卜傳少微錯天紀の句の少微星を以て客星と誤解せしより自然岐山を以て嚴子陵よ比せざるべからざるに至り終には派落貫通妙曰ふべからざる所も自分勝手

お一大頓挫を持ち出し異様乃感を擁るゝは可笑の至にあらずや少微星は事は史記の天官書にあらまし見えたり尙ほ委しくは三才圖繪又ハ潤函類鑑に少微星と客星の別詳なれば評者附いて月耕の勞を執られし作者は決して岐山を以て嚴子陵に比せざりや必せり又次ハ所以望彼美も随分恠しく思はるゝありとは扱て又妙な評し様あり望彼美とて作者定めて岐山詩聖の美德美才を遠望するの意味おて詩經の字面を用ひまかふん随分恠ましく思はるゝこハ評者望彼美の美の字を美麗妓美などの意味に解せられしによりて此く恠しく思はれまからん此の如く誤謬的將又註解的批評と下さんには評者の言の通り日暮れ紙盡るも終るべきに非ざらず千呵萬呵

雜報

梅花臙月

清楚の極は人世梅花に在り、穠温の窮は塵寰春月に存と、而して梅花臙月に由りて益清楚に、春月梅花を須て轉々穠温なり、静夜沈々琅々古書を讀む、更既に闌にして首を擡けて南窓に對すれば、臙に淡々梅枝槎枒として映下、竹叢先づ風聲を聽えて影動揺して微薰脈々潤すが如し、急

去て明鏡を認めしむる者、嗚呼嫦娥何爲れず其美を惜むの甚しき、妍は衆に示して后愈々妍に、雅は人に愛まふして倍々雅なり、將た又深暗の中に在りて一閃も認めしめずむば、尙鬱陶の念なからしむべし、既に簾外に來りて一笑一擲亦示すに非ずや、多時人を惱殺さるを已めよ、嗟呼羲和、尙くば速に風神に命じて、疾然此の輕簾を捲き去らしめよ、空しく思を高天に馳せて恍惚たり、願れば梅花半開にして、馥郁香轉々清新なるを視る、

照りもせせ曇りもあへぬ春の夜の
ねぼろ月夜にしく者ろなき

に立て窓を排すれば、萬象濛々として臙月高し、前きの暗香は求むれ共得へからず、只天空盡く香烟鬱繞して羅浮の境に立つか如きを覺ゆる耳、臙月紆々香烟を隔て、明鏡を見るが如し、淡靄去らんと欲して去らしむる能はず、魂己に天上に升ると雖依然として自由ならず、竹視愈々煩悶するか如きを視る、誰か輕扇を以て香烟を掃

爐を囲で寒を恨みし停滯は、一射千里の勢を以て此に發泄し、テニスに、ヘースボールに、機械体操に、北方健兒の氣象を揮霍して地を踏で窪ますべし、蓋し古昔支那の庠序學校の制、禮樂書類は常に射御と相伴へり、何となれば智徳と身體の強壯と相須ちて、乃ち教育の美を濟すが故なり、義勇公に奉り天壤無窮の皇運を扶翼すへき、絶大責任なる社會の上流者が、智徳成就して片端より直に倒るゝは、國家に不經濟焉と大なる者あらば、高等學校一般の弊風の、常に成人顔して活潑英武の氣の銷磨するに在り、乃至日本の島國根性の大弊ハ、早く成人するに在り、換言すれば早熟するに在り、牛の歩みは千里あるも、疾風を欺く馬の百里よりて斃る、學校に在るの間、日本人の學課に秀拔れ風を顯し乍ら、社會に立てば秀拔は平凡と變り、大發明大改良の、常に西洋人れ手に成り、日本人は纔に摸

校庭の春

大榎の新緑滴々んとし、古松の翠愈々鬱々、此に卅一年の春光は我が辰章校々庭に來りぬ、種子ありきとも見えざりし草花綠叢を点綴し、庭隅一株の梅の春を占めし亦棄て難たし、昨歲來媛

擬的人種の名を得るに止る、豈に夫れ早熟は弊

學校衛生醫の指定を望む

療々として鑒む可也所非非ずや、見よや彼れ洋人の日常の風采を、既に妻を娶り、既に子を有し乍ら、其の散歩の途、行く／＼草花を摘み、之を眺め、之を嗅ぎ、嬉々愉怡に入るを、又思はずや先きの英語教師「ゼームスマルドック」先生の活潑天真、小兒の如く怒り、小兒の如く喜び、時々バットを揮ひ、ボールを投げ、クリケットに學生と雌雄を争ひ、専心して其の勝敗を楽しみしと、十五で神童、廿で才子、卅で凡人、四十で老朽、五十で隱居、嗚呼、焉ぞ此の青年腦力發達時代の短少を以て、牛の歩の千里なるを得んや、馬も瘦馬耳、十里にして斃れざるハ倖耳僥耳、具翁は何歳ぞ、比公之何歳ぞ、希くハ諸君成人ある勿れ、否々成人なる勿れ、斷つて活潑天真の青年なれ、一週間三時間ハ儀式的運動を以て、身体の修養足れりとあす勿れ、

今や學校衛生醫の必要と、百科の進歩に連れて天下具眼者の輿論公議となり、其の實施亦將に遠くらざらんとす、智育と体育とを并行せしむるを目的とする、戰勝國の教育に於て固より亦宜しく然るべし所あるべし、事當路に屬し、吾人青衿者の區々私議を挾むべし所にあらざるべしと雖、吾人の敢て同人の間に於る實況を直筆して、我が學校醫制度の實施の前ハ當て、早く學校醫を指定されむことを望まんとするあり、今や校規の勵行の嶋々皓々たる、學生にして試験に際し、事故の爲め規定時日に受験せる能はず、追試験を乞ぬ者と、各科二十点を減ず、蓋し文部省令に虔遵する者、理に於て固より然るべき者、若し此の規定にして在らざりせば、其の弊害の横肆とる所、學校試験の上ハ大々の影響を及ぼさん、試験なる者にして廢す可らざる者ありと

すれば、此れ規定亦到底廢す可らざる者ニ屬す、而して吾人の學校衛生醫の指定一日より速うなるを望むの己むを得ざる、亦實に此の校規に繋て存するあり、乞ふ虚心平氣に思へよ、學生が一學期一學年間、孜々汲々とて學業に勉勵し、いざ試験といふに至り、其の規定ハ時日に受験せざるは、是れ決して容易の事ニ非ず、人生ハ變化不得己者之に伏するあり、我が學友盡く難關を過ぎ、散策逍遙優游適意と縱よするよ、己一人猶夜を以て日ニ繼ぎ、寸陰是れ惜み、分陰是れ愛しみ、子々汲々たゞざるを得ざるは、豈に尋常一様の覺悟を以て贏ち得んや、父兄の急病不幸ハ假し數へざれば、斷然不可措底の疾病の其の激する心を抑へ、其れ悶する情を壓へ、神ハ既に試験場に飛び行きて、身の臥床に轉展せしむる者なり、嗚呼疾病は電光朝露の人間の常、病む者何の罪かあらん、而して其れ病后衰勞の躬を以て、

追試験を受けるに當り、我が病みしといふを以て、各科廿点を減せらる、校規に云へり、一科五十点以下、若くは三科六十点以下、若くは成績平均六十点以下の者の落第せしむと、赫々たる校規、堅きこと南山ハ石の如く、直死こと承露の銅柱の如く、一科二十点を減せらるるをば、平均点八十点以下の者の落第を免る可らず、一科七十点以下の者の落第を免る可らず、校規之曲く可らず、紊る可らず、病纒に癒えたる者に御つるに此の嚴苛を以てす、其れ奈何ぞや、固より學校は第二の家庭など、校長教師の第二ハ父母など、此に一年二年永く留るゑと、亦耻辱とすべきに非る如しと雖、前途の遠し、白石應蛇とかりし戒め、吾人之を慚ぢ、父母之を歎ぢ、今年氣候甚た順ならず、寒中積雪を見ずして、春來朔飈雪を捲いて、梅花も咲はんとして、屢々濫面す、流行性寒胃蔓延の警報

頻りに耳を驚かして、學生の之に羅る者日一日
 よもも多く、三月試験期日に至り倒る者、各級
 多きハ七八人、少きも二三人、平素強健を以て目
 せざる者にして、勝たざる者亦尠かず、試験
 結果の良好ならずして落第生の多きハ、學校の
 名譽とせざる所、是に於てか吾人學校の爲先、學
 生の爲め、敢て急ニ學校醫の指定を願ぬて己ま
 ず、希くハ急に醫學部教員中に於て、第四高等學
 校衛生醫を指定せられ、之に向て充分の信用を
 措いて充分の責任を負こし先よ、若し學生が其
 校醫の診断を以て、疾病受験に堪へずと保證さ
 れれば、其れ診断を信じて其の學生ハ特典を興
 へらば、敢て各科二十点減削の規定を加ゆるこ
 と勿れ、吾人の淺才なるも誠ニ信ず、當路の追試
 験二十点減削の、要と試験の公明を保つよ在り
 て、試験の公明ハ學生ハ眞學力を試験するの意
 にして、決して學生を苦むるの謂に非るを、大義

親を滅するハ王道ニ答なし、法時に曲げて道に
 合するハ權にして醇經あり、吾人固ヨ自ラ顧み
 ざるの罪逃る、所なきを知るも雖、深く同人間
 ハ實況を察して寥々の愚衷に堪へず、敢て一言
 を學校當路の左右に呈す、

在文科大學虎石君の書翰

虎石惠實君と一昨二十九年好成绩を以て本校の
 業を卒へ、今現に東京帝國大學に在りて哲學科
 を研鑽せらる、士なり、次に掲ぐる書翰ハ、過ぐ
 る日君が記者の一人によせられざる私信の一節
 なれども、取て諸君の一察に供すべし價值の
 ありと思へるま、その要を抜きて本誌の餘白を
 藉ること、しは、

次ハ些か當大學の現況を可申上候、乍去他科
 の事は精しく存せぬま、自級の事のみ可申
 上候、此頃は大かた試験論文の課題も出て何
 どなく氣忙敷感ト居申候、東洋學界の千兩役

りて「シヨペンハウワー」の涅槃論を唱へ、「ハ
 ルトマン」之解脱説を主張し、又現今哲學界ハ
 飛躍せる「ニーチャン」も世界の最大最高の哲
 學ハ佛敎なりと斷言せり、是等ハ實ニアリア
 ン人種思想の傾向が根本的に於て相一致せる
 に由るを證明する者あり、反之蒙古人種ハ代
 表者たる支那人には形而上思索に於て見るべ
 きものなま、老莊ありと雖も是とて固より印
 度思想ハ壘を摩すべしもならず、而して支那
 思想を代表せる儒敎が如何に經驗的社會的實
 際的に傾けるを見れば、蒙古人種思想の趨潮ハ
 之を類推するに難らざるべし、同く又日本
 も此思想の傾向を免る能とざる者あり、例が
 バ朱子の如きハ理氣の二説を立て「デカルト」
 以前のデカルトと稱せられしが其日本に來る
 や理ハ之をさし置き氣にのみを重きを置き、
 理ハ氣の「アットリビユト」又ハ「クオーリテ

者大立物たる井上博士昨臘歸朝被致今學期中
 又は佛敎起原史ハ結講を止め、本學年ハ先ハ
 萬國東洋學會にて講演せられし日本哲學思想
 發達の歴史を講せらる、筈にて此二月より開
 講被致候、申すまでもなく學東西を兼ね、識古
 今ハ通ずる博士ハ事あればその面白きハと樂
 しきこと曰ふ許りなく候、先日其發端を辨せ
 られ候が其快味津々盡きざる思有之、先其要
 旨を申せば日本人ハ支那人と共に蒙古人種に
 屬し、蒙古人種思想大体ハ傾向ハ、經驗的、實
 際的、社會的ニして、アリアン人種の如く、絶
 對的、理想的、思索的ハ傾向を有せず、印度人
 ハ獨逸人と共にアリアン人種あれば、其哲學
 ハ相類似する、深遠幽玄なる形而上的思索ハ
 長せる固より其所、近時獨乙人が印度の哲學
 を研究して、獨乙思想に契合せる思想あるを
 發見して此ハ一大驚愕を喫せしむ、是に依

りて「シヨペンハウワー」の涅槃論を唱へ、「ハ
 ルトマン」之解脱説を主張し、又現今哲學界ハ
 飛躍せる「ニーチャン」も世界の最大最高の哲
 學ハ佛敎なりと斷言せり、是等ハ實ニアリア
 ン人種思想の傾向が根本的に於て相一致せる
 に由るを證明する者あり、反之蒙古人種ハ代
 表者たる支那人には形而上思索に於て見るべ
 きものなま、老莊ありと雖も是とて固より印
 度思想ハ壘を摩すべしもならず、而して支那
 思想を代表せる儒敎が如何に經驗的社會的實
 際的に傾けるを見れば、蒙古人種思想の趨潮ハ
 之を類推するに難らざるべし、同く又日本
 も此思想の傾向を免る能とざる者あり、例が
 バ朱子の如きハ理氣の二説を立て「デカルト」
 以前のデカルトと稱せられしが其日本に來る
 や理ハ之をさし置き氣にのみを重きを置き、
 理ハ氣の「アットリビユト」又ハ「クオーリテ

「イ」となすに至れど、而して我國の學者が實際的に如何に勢力あり、影響ありしものと、明う又歴史の證する所にして、學の爲めに學を怠さず、行爲爲めに學ぶと曰ぬが即我國徳川時代學者の主義綱領なりき、其他宗教に於ても、日本に開ける宗派は皆日本の色彩を帯びて實際的傾向を有せり、淨土宗、眞宗、日蓮宗の如く即是なり、從て現時日本の思想界も經驗的傾向盛なるハ福澤の唯利主義、加藤の進化主義、外山の排超絶主義の如くを見て明ある者あり、過去の經驗によりて日本將來の哲學的傾向は之を推知するを得るに難いざるべし云々。

- 又同教授より與へられたる論文課題ハ。
- (一)日本に於ける陽明學派
- (二)空海の世界觀
- (三)李退溪(朝鮮人)の哲學思想

- (四)揚子太玄の根本主義
 - (五)足目れ論理法
- の五題中の一を撰び若くハ別に隨意の題にても差支ある、是ハ漢文二、三年、哲學二、三年、英獨佛二、三年、國文二、三年、國史三年ハ課せらるる者なり。
- 次に村上講師より與へられたる印度哲學の論文課題ハ
- (一)佛敎の倫理
 - (二)吉藏の世界觀
 - (三)護法れ唯心論
 - (四)天台密宗の調和
 - (五)天台華嚴れ比較
- にして倫理學の論題ハ
- (一)良心論
 - (二)善惡の標準
- 是なり、尤も中に多く専門からざる人も聽

講する事なれば、講義試験を受くるを得る者なり。

次に一言すべしハ、昔兄ハ漢文學ヲ撰ばれり。と井上博士の所謂蒙古人種の中心思想を研究する者よて最興味あり、又最必要れ事項たり、隨て日本人種思想も容易ハ解剖し得べし、吾人の如きも將來支那思想の研究ハは敢て微力を盡くさん考なり、勇猛直進邁性の識と精勵の力を以て之が、、、、、試み給ハ、所謂有不可測者焉。

(以下略之)

時感零片(日本派和歌概観)

日本派の俳人、頃ろ又歳ハ新調れ卅一文字を創唱と、其主張する所は要するに、此迄の和歌の範圍の狹隘を廣げて、陳腐より拯ふと云ふあり、是甚だ達識の言にして、又時勢に忠なる説なり、範圍れ一割さきても、陳腐を防ぐハ、僅に屑々たる文字上ろ花に止る、引き懸げとの、本歌を巧に使

ふと、句調の流麗と、終に根本の思想よ至て、些少の變化を來す能はず、殊に戀歌ハ至て、不得已尤面倒ある理屈をさへ詠むに至り、所謂目見えぬ鬼神をも泣すべし和歌か、哲學者先生をさへ泣とに至れど、而して今代百科は發々として進捗するに、獨り和歌ハ其舊套を新めず、遂に吾人をして和歌を詩といふ者乃中より取除けて考へむる迄に、和歌の價值ハあり下れり、若し萬葉古今のみを讀まば、其閑雅ある處、其豪宕なる處、其の沈痛なる處、其の優美なる處、其流麗なる處、詩經に對し、唐詩に對し明詩に對し、乃至洋詩に對し、一壘を東方日出國に築さしか如き思ありと雖、降て其以後ハ歌に至れば、弊風昭々、或之歌を專賣とす一門あれば、歌を細工物れ如く心得る輩出て來り、弊風滔々數百年、中よ或は金槐集西行集の如くありて、異彩を放つ者なきに非ずと雖、終に歌ハ單調狹隘に陷

り、萬葉の豪宕なく、古今の優美なく、以て徳川時代に至れり、其昇平三百年の各種學術の研究を引起し、和歌學亦復興之、和歌は道種々の改革を見たり、され共如何にむむ、猶天才と稱すへき程れ者眞淵景樹の外に發現せず、多くハ篤胤といひ、宣長といふれ類にして、窮理的の學者、所謂神韻縹緲の詩人の和學者に認むる能はず、日本古學の非常の光輝を放ちたるは拘らず、和歌の未だ古型を脱して大飛躍を見るに至らず、其の範圍の狹隘と、所謂歌人なる者の學殖の稚たとい、明治に至りて猶滔々たる歌學界實ニ寂々寥々、新體詩ある者の出生を促したる程迄に、新文明の思潮を吸收せざる學者等の不満足を致したり、而かも歌界の無感覺歌人の自分免許、調とか古格とか云ひて、徒に蝸牛角上の争に日を消す、井底の蛙は大海を知らず、先天的に狹隘窮屈の中に育されて來りし歌人の、先天的に和歌の

狹隘窮屈に浸染して、之を無上の寶とあし、未だ曾て外に求むるを知らず、終に今や大々の根本の改革を要するに至れり。
 日本派の俳人の常に機を見るに早し、此の狹隘窮屈を打破して、恰も俳諧に於ける月並調打破當年の事を、再び和歌に向て演せんことを、乃ち其の新派歌を紙上に連載す、其の主眼己小良ければ其結果亦固より悪かるべきあし、第一小歌の狹隘を打破して思想の自由を許し、第二に理性よりの理窟即眞美破壊の至大要素を除去して、渾然たる眞美を發揮す。第三重に客觀美を歌て理窟を避けて澁晦を省く。是れ尤其の古來の陳腐を極ひ、和歌に大改良を致せる所、され共事や草創に際、未だ熟さざる所亦尠ならず、其尤著しきと。第一餘小客觀美を重ねて措くの弊。景色を歌ふを主として頗る單調に流るゝと。第二景色を詠むに専らざるの弊や、歌に幅なく僅に小

局部の觀に縮り、咀嚼し窮むる能はざる底の含蓄に乏しきと。第三俳句を以て歌を遣りたる爲め、名詞の過多にして、句調太過迫るを覺ゆること。第四全くに狹隘を打破せざるに急ふて、歌よ

藤さきうてに晝暗き寺
 東京ハ春まゝ寒記ひあまつり
 梅のさかりは桃の花をうる
 (河滄浪)

妄に字餘り字足らずを生ずること。され共是の缺點の單に形の上詠み手の上げと其の着眼の吾人双手を擧げて賛せざるを得ず、従て俳句は新派に於るが如く、和歌界亦后來の新生面を預言せんと欲す、左小予の尤感する者四五を採りて、歌壇諸君の一察を博すと云ふ、

乞骸骨辭
 夕陽岸に在りて一林明か、水に臨むの千枝晚晴を弄す、嗚呼春光江に滿ち、紅雨細るに、歳華長へに流れて人事日に同トからず、顧みれば生等乏を編輯員に奉ト此に一春秋矣、夙夜惴々として唯だ清意に負かんことを恐る、然りと雖も、資性疎懶、加ふるに狷狂驕愚、徒々杞禍日を度り、伴は蕪段玉に倚りて、以て曠職の譏を迫る、を得たり、生等頓首謝するに辭なし、今や骸骨乞ふに至り、一言以て同學に謝す、

文寫す窓の紅梅咲けり
 くれなゐはゆる薄葉の上に
 雨乾く薄紅梅の夕日のげ
 又て更のへそカナリヤの籠
 蘆の芽の角くむ緑ほの見えて
 春水あさく小鮎よるあり

編輯員の一人
 月岡眞備記

松杉や一百年の枝をじげみ

劍術大會記事

城畔の曉鴉未だ呱呱の聲を放さざるも軋々叱咤の響、寒飈に泄れ來るの抑何の音ぞ、四民太平を謠ふて、舉世未だ混濁せざるに、壯士劍を呵いて、月下心膽を寒氷に照らし者、知らず何の容ぞ、吁是我無聲堂寒稽古の状況にあらずや、鍛へ來り、鍊り竭くして壯心將お磊々、一たび溢れて尋中の道場を荒らし、再び迸りて無聲堂裡警察の鬚連を壓し、隆々れ聲名を擧げし、時は紀元佳節の翌日、朝來天晦曠、雲ハ風を呼んで到り、風の雪を追ふて迫り、凄絶慘憺、眞に北溟れ兀龍も天お沖せん許りの荒景色、未だ以て健兒が三句鉄石の身心お對するも足らずと雖も、亦以て當日の状況に沿ふに足らんか、午前一本勝負に始まり午後三本勝負に終る、記録子終日血眼になりて席に列せしも、遂に何の記を得ず、一日秦先生を訪ひ當日の高評を仰ぎ以て聊り同好に參考に資せんと謀とぬ、先生呵然大笑して曰

はる、様、君劍に分身は術あるを知るや、分身の術尙ほ分業の法の如きれみ、敵の動作お留意するハ眼の役なり、進退を司るハ足の務なり、機は應じ、變お處えて、或ハ打ち、或ハ防ぐ、之れ手の任なり、既に其任務を異にす、焉ぞ以て混濁すべけんや、此法や劍士は最も難しとする處にて、又尤も妙味ある處あり、尙亦劍に虚實の別あるを知るや、今小手を擬して面を打ば、小手ハ虚よりして面ハ實なり、之を軍に譬ぬ、實刀ハ猶ほ正々堂々陣を張りて敵に望むが如く、虚刀ハ奇兵を用えて敵の不意を衝く猶伏兵の如し、虚刀ハ覇道なれば、實刀ハ王道なり、故に劍士の堂々達したる者、多くは實刀を貴ぶ、今夫れ先日の試合、凡て幾十番、果して此術と斯別を備へしものありしが、既に茲に欠くる處あり、云とハ猶修業最中である者の試合、焉んぞ敢て口を酸く、筆を秃して、評するの要あらんや、と、大笑舊の如

く、記録子唯々として退き、窃に以爲らく、考へ來り、煎じ詰むれハ、眞に先生の言の如きのみ、然れども、記せざらんや、曠任の譏を如何せん、儘よ、不逞の奴と罵らざんが、當日見聞の儘を草して、其責を塞ぐよ如かず、と、則ち燒腹は斗樽を傾けて記したる概況と是れ、若夫記に不寧あるあらば、乞ふ、往て之を北辰直下の醉翁に問へ、

ずや、然るに、人或一本勝負お出席するを以て、潔らふとす、欠席する者多し、慨せざるべけんや、欠席者斯れ如く多々なりし爲ゆ、午前十一時より、正午に至る僅一時間に、堂々たる、一本勝負を終はりし、早業とさる事おが、爲に松原、長谷川、おんど五級の面々迄と、一本勝負よ、加ふるは止むを得ざるに至りしは、一本勝負編成の趣旨に、戻る大おらずとせんや、

一本勝負、番組に載せられてありし者、總て卅有餘名、而も出席者、僅お其半に充たず、諸君何ぞ約は健忘なるの甚しきや、之を往年の一本勝負よ比す、年々衰退の傾向あると、知らず慶すべきは兆か、果た吊すべぬの事り、蓋一本勝負ある者ハ、技を以て責むべき者おあらず、亦術を以て評すべき者にあらず、只夫一片歌々たる霸氣の、其間に燃ゆるありて、而も幾分滑稽の趣味を交ゆると、即ち此勝負の特徴とする處よあら

予と一本勝負に於て、月桂冠を着け、諸子を報トて、茲に一本勝負の記を終へ、單刀三本勝負に切り入るて、駄評を呈せん、

○ 平倉 保市君
 ○ 赤澤 欽二郎君
 ○ 平瀬 享三君
 ○ 尾崎 齊君
 ○ 松原 武君
 ○ 長谷川 葛君

午下一點鐘、響き來りて三本勝負茲に始まりぬ、生憎飛霞吹雪、層一層に荒暴を逞ふし來りしも、來賓諸氏を始先、尋中、師範の生徒諸氏は、先後して、雲集來觀之、流石の無聲堂も、今や殺氣紛々たる、喋々擾々の嚮と化しぬ、吁外之と慌電凄雪の怒號するあり、而して内にと龍騰虎嘯の活劇と演せられんとす、相對して恰好の双絶、三本勝負の先鋒として、金看板付けしと、

突、小手一關口通太郎君
面一美濃部秩樹君

取り留めて、云ぬべき程の事なき、勝敗とられ時の運か、兩君共未だ試合勝負お慣れざる觀ありまが非り、勝者も、以て誇るに足らず、敗者亦怨む及ばず、

(×ハ引分ケ)
×一榎木隆太郎君
松王數王君

孰れ劣らぬ長髓彦の面々、いりて、試合れ面白うらざる理あらんや、榎木入道が、例の大々の上段の構へ振ら、例に由て滑稽、思はず人をして抱

腹せしむ、君が我無聲堂入りて以來、幾分の技を進先して、顯著なる事實ありと雖も、惜らくと、常に愛嬌、滑稽、などけ優雅なる區域を離れて、寧ろ暴動亂行の態に陥るは癖あると、尤も留意すべき處あらんか、蓋し君の如きを制する、須らく心を丹田に收むるに人にあらずんば、技術遂に一步を抜く者あらずされ之能ハト、而して、松王君此資なし、引分々とありし之尤も乃次第、

突、突一今西良雄君
洞一深澤新一郎君

今西君は戦に臨むや、常は受身の位置より立ち、動作兎角重きと過ぐるに憾あり、幾多の奇策あつて、然るやい知はずと雖も、斯の如きと、試合に大は不利ある者と知るべし、思ふに、深澤君は足拂と、大に氣遣ひするが爲あらんや、深澤君は、敵に此弱点あると知るとながら、遂に敗を取りし事、さも無念なりとあるべし、況や、今西君は、試合中屢々可笑冷語を放ちし於てをや、斯の如

死ハ最も劍士の擇ばざる處、今西君たる者三省して可なり、然れども、君は頗る熱心あつて、丈業も大に進めるを覺ゆ、若夫彼の冷語を放つなく、彼の態度を匡正して、止まざんば、他日大

成、期して待つべしのみ、
洞、面、洞一田宮春策君
秋田信太郎君

秋田君は、飽く迄靜穩雪の如く、田宮君は飽く迄急激霰の如し、田宮は、一氣以て本陣に直入するの急進黨にして、秋田は虚に乗じて制せんとする保守黨を、勝敗れ數の如た、既此戦法の、相違に由りて明らかならん、田宮氏が、難なく三本共、喰ひ留先し者、固より其處あり、

洞一齊藤久三君
面、洞一鳥海太郎君

鳥海君が、短刀を持って、巧に齊藤君れ手元へ肉薄せし手際、齊藤君の不覺あらずんば、則ち君が機敏の働死のみ、

×面一草野正義君
面一德田虎雄君

何れも、無聲堂に、餘り親まのふざる面々を、と雖も、其校外某々の道場に於て、磨き上げしと即ち一、從て其勝負の活氣あり、且つ派手ある事、前來初見する處、而も身長相似て、力量亦相如きし爲、遂に、斯る恰好の取組をして、成敗を決せしめざりしと、等しく觀者の遺憾とする處、

面、々、洞一中村春生君
長谷川葛君

兩君共、太刀筋の奇麗あつては、則ち何れ劣らぬ氣取屋は隊長たる所以乎、中村君は我無聲堂は元勳にまて、長谷川君は、昨秋源平の合戦に五人斬の功名ありし驍將なと、相對して多少れ妙味あつとせず、君が今日亦三本共制せしと、平素修養の深きを示すもの、然れども、君の一揮しつを當とする事、及び、中村君が、終始妙に体をトネクル事等の何れも、氣取屋の氣取屋たる所

以ちらんも、何處となく、癩に障る處など、の彌次連の評、

面、面、面 松原 武君
松野保外理君

松原と云へ、松野と云ふ、字義に於て、均しく一なり、而も其格闘するに方て、何ぞ軒輊あるの甚しきや、面、面、面の連發とい、流石の武君なり、蓋玄松野君とて、技お於て、左程松原君に劣るにあふざるべきも、松原君の突きに得手なりし、即ち斯く面の連勝を得し所以ならんか、試合益々酣に去て、技漸く術巧を極めんとするに至り、茲に愈々、他校撰手との取組は来りぬ、満堂は俄に春め死ぬ、嘯々たる品騰の音、囂々たる嘲罵の聲、さても世の物噪や、斯る渦流の裏に、悠然手綱を取つて顯はれしは、誰あらず

戰軍の先鋒たる辰氏、敗けては一世の名折ぞ、一校の不祥ぞ、爾り、辰氏能く之れを知る、彼は、夙に寒稽古よ皆勤して、異彩を放つ者、焉う、オメく、兜を敵の軍門に脱く者あらんや、果せる哉、辰氏が打下す劔は、熊田氏の眞甲かたて打ち割りぬ、熊田氏は怒れり、態度は異なりぬ、然れども過勞と活劇とは相俱はざるや如何せん、之と共に辰氏の鋒芒は益々鋭く、遂に得意の突をもて、敵を衝き止め終れば、拍手轟然、歡聲湧然、辰氏氣寛の如し、

突中毛利 勝男君
面、面、面 西岡 忠夫君

面、面、面 熊田 克雄君
突、突 大島辰之助君
なり、一時ハ、熊田君勢氣甚だ精銳、唐突、面を襲ふて先つ我黨の彌次に、汗を握らせぬ、あわれ外

西岡氏は、虚を衝く巧なる丈、實刀を用ゆるに妙あり、殊に胴を獲るは最も特技を有する者、故に其勝つや正々、敗るも又正々、劍士當に此段の雅懷ありざるべからず、毛利君たる者、敗すと雖も、亦以て首肯するを得んか、
面、面、面 高 喜藏君
小手、面 松下 雅雄君

相共お、力凝りて、技に伸びざるは、均々く遺憾とする處、尙一段の精彩を望みたき者にこそ、

小手、面 中時澤 貞義君
小篠君が短身にして、而うも敏刀あると、優に敵

突、々 師原 天晃君
面、面、面 隈川 豊君

を制して餘りあらず、

突、小手 山崎 俊二君
老田 太文君

隈川君にして、而かも一本ならず二本迄、原君の突お伏せられしは、確に原氏の強かりからんか、

尋中の二三子、前後相踵で倒れ、聲援も來れる同校の彌次連も、漸く躍氣の炎を、燃やしほ、ある

×面 松野保外里君
面、面、面 田中鷹太郎君

の受け損ずる處とありぬ、尋中諸氏の欣快拍手さもあらん、されども、由來、老田氏ハ、試合に強き者、いかでか、坐して刀を折る者あらんや、と

何處となく、活氣に乏しき、校外生との試合あふざるが故あるべし、其引分とありても、兩々互角ありしが爲と謂はんより、靈氣、合のか、らざりしが爲とも謂はんか、

と云へ、君の小兵を以て、山崎氏ハ大男を制肘せんとす、苦心想ふべかり、苦心伏する處ハ即ち

面、面、面 高橋爲二郎君
面、面、面 高橋 亨君

元氣を喚ぶ處にして、元氣出づるの時は、即ち、特技の發揮せらるゝの時、君が突を以て、續て小手を拂ひ、終に騎虎の勢あり、山崎君を薙ぎ倒

其姓を問へば同姓、其丈を觀れば同長、而して技も亦相如く、知らず中原の鹿誰か獲る處や、只夫亨君の戟を採るや、一刀一劍敢て苟もせず、進退動靜甚だ奇麗、自ら規度あり、爲氏の、奇兵を用

ゆる覇者の術あれバ、亭氏の正々堂々、王者の戦なり、之其勝利ある所以、

面中石川久七君
面野崎安近君

渺然たる小兵、野崎宿彌は配せらるし、二王と欺く大兵の石川氏、所謂虎は配せらるに猫を以てしたるもの、誰の其成敗を怪しまさふんや、されども、野崎君の、勝負の術に於ては、特別の技能を有する者、其勝ちたる怪むに足らず、然りと雖も、吾輩をして直言せしむれば、君が此獨特の技量あり、反て君が技能は進歩を妨ぐる者、君が數年以來別段進歩の態の見えざるは即ち之れが爲か、君夫れ茲に配慮するふ鄙なる勿れ、

× 洞中日向五作君
小手中桐虎炳君

劍光か、電閃り、雷か、霆り、劍端茲に觸れて、紅霓宙は飛び、怒號一出して、獅吼を欺くも、吾之と此技に於て見る、氣合と云ひ、態度と云ひ、間髪を入れざるばかり、流石ハ中桐氏、先づ得手

ある上段の構へに身を固むれば、日向氏青眼を以て之に應じ、兩々睨み合ふ一瞬時、抜く手も見せず、エ、とばかり日向氏が拂へし洞は、正しく

中桐氏を中斷し、敵も味方も齊しく快哉を叫びぬ、而も此殺那中桐氏が打を下すし小手と、確に日向氏に首肯せられ、今や后一本の勝負小神出鬼没の妙術を竭し凝りたる原氣を固まりたる腕を以て、將に天王山乃頂に達せんとする際に、無残や、引分けとハ、吁さても心惜みの極みかれ、

洞、面、面 中藤田茂吉君
武田正壽君

嘗て、福井河村先生門下の獅兒として知られ、后無聲堂に入りて、一刀流の幾分を嘗先、夙に醫學部劍道の牛耳を取れる、武田君は敵せしむ、尋中の藤田君なり、小兵の藤田君、幾多の秘術を有するやは知らずと雖も、其太刀筋其態度と、己も遙小段階あるを證するにあらずや、而も武田君は、一点の油斷なく、身に寸痕を負はずして、難

面警高桑茂君
面洞戸川文二郎君

かく、又奇麗小見事に、三本共切り上げ、天晴の手腕を現せしには、尋中諸氏の、銷沈せる心膽も、更小水にて撫でるさるの感ありまなるべし、

突中竹中洲三君
小手突橋本新太郎君

竹中君と、荒猛跳梁負虎の如く、橋本君ハ、泰然臥象の如し、蓋し竹中君は、氣を以て勝ち、橋本君は技を以て優る者、然れども、竹中君の如き荒暴なる戦ひ振り、是れ尋中子の最も愛すべし所にして、又最も敗る所以か、竹中君は敗れざる亦之れれみ、

面、々師永井尚新君
小手岸重次君

永井君ハ、技に於て業に於て優る岸君を抜く數等、按ずる小、君ハ確に實刀を使へ、岸君ハ虚刀を弄する者、此敗ある固より其處なり、聞く師範校ハ性來劍に名人あり、と、而して、今や永井君の如死あるあり、師範亦共に語るに足るか、

凛乎なる太刀筋、嚴乎たる姿勢、所端劍端風を生トて、口角神韻を吐く中、而も其掛聲の、共に高調より、深遠なる、獅兒遠吼して草木風動するの概あり、掛聲や幽妙、争や堂々、眞乎丈夫れ争、勝敗の如き問はずして可なり、とハ云ひ、劈頭先づ警察れ鬚を倒して、呵然たらしめし技量、吾輩ハ大ハ戸川氏は多しとする所なくんばあらず、

面、小手、面警渡邊尚忠君
木村義郎君

木村君の試合と、常に君子風なるか、一刀一戰嘗て無理を言ひま事なきの、則ち之を證する者、從て常に先機を制せられ、偶々の中しる者も流す事少からず、此試合れ如死亦然る者、君知らずや、試合に大ハするハ、二割の不利あるを、君子風も、大人風も、時と處によれば、試合勝負の如き、寧ろ權謀術數を似て利とする者、況んや對手は警察先生なるに於てをや、君は凡てに於て敢

て渡邊は劣るにあらずと雖も、二割の不利は則ち此結果を來せし者、

中田中喜八君
面々々々 倉茂 範行君

嚮きに、紅白勝負に、紅隊の覇として、大氣焔を吐き、又尋中に出陣して、彼等が荒膽を挫き、勢威隆々、流星の如く範行君が、今日の派手ある勝負、誰の之を怪む者あふんや、同やく三本共勝つ積りならば、今少し變化のある勝ち様として欲まは者、初めよと、終迄、面々々々、れ一天張とい、余り單調露骨はあらずや、

面高 無事君
突野 安近君

野崎君の荒武者に、警察の一癖を以てす、配し得て頗る妙、配合既に妙、試合焉ぞ妙あらずとむ、二人の試合は劍術を闘はすあらずして、体力を戦いすあり、押合れ勝負あり、是れ此組の引分けとなりしに拘はらず、左程歓迎せられざりし所以か、

小手、面、小手中逢坂元吉郎君
田中正一君

武士、由來、廉潔を尊ぶ者、一勝一敗、須らく男らしからざるべからず、勝敗の数の如き、寧ろ末のみ、逢坂君が連勝は、此譏をたを得るか、揖して我構未だ全からざるを、早くも手元お切と入ると、小手亦面を陥れま御手際頗る機敏なましとは云ひ、其心事寧ろ怯陋ならずと怒んや、勿論、劍に志す者斯般の用意あからざるべからず、されども、直よ之を其形に現はすに至ると、即ち吾輩は大に擇ばざる處、田中君、亦油斷過ぎたるの責を免るべからず、然れども、滔々たる尋中幾多の秀才、皆踵を列ねて、倒れたる后を受け、斯る目覺しき働をあされし、君が技量よは、吾輩只敬服の外なし、

田中重太郎君
突、洞、洞 稻垣文次郎君

班々たる其髪、蓬々たる其鬚、優小親爺様なる、警察の驍將に對し、泰然嚴乎、以て之と輸贏を決

する様、滿身都是膽とや妙せん、巧み敵を誘ふて退き、今や田中氏は、太刀振り翳して、眞甲割ふんとする一殺那、忽焉身を翻して、發矢と妨ちたる諸手突と、如何に見事ありしぞ、續て洞亦洞、三本共薙ぎ倒し、老練ある警察は面々をりて、啞然たぐいめし處、何ぼう心地よき次第あらずとぞ、流石は斯道に堪能ある文次郎君の所作、

面杉本俊一郎君
洞、小手 戸川文二郎君

既に警察のバリくを倒して、意氣斗牛を衝くの概ある戸川氏、其太刀、其姿調に、生氣ある宜かりと謂ふべし、杉本君兼てより戸川君の早業を見聞せし者、彼が苦心用意も一通りあらざらぬや、されども、兎角杉本君の臆し勝の様は見ゆるは、そも戸川君の掛聲に呑まれざる者か、さり

面北川 外雄君
洞 押原 三吉君

どは、尋中子の氣逸よも似ざる次第と云ふべし、去歲丁酉の役、共に尋中の中堅とありて、我無聲

吉田元太郎君
中桐 虎炳君

曾て聞く、中桐氏之稽古数の多りと、稽古振に巧みあるとは、恐らくは堂中比肩あからんと、然

るよイザ勝負試合あんど云ふ際は、常に引分の
 けとなり、戦勝の榮と、鍛錬の果の、顯はれざる
 へ、均玄く人の奇とする處、蓋し君が機敏、以て
 敵の虚を制するの資に乏しと雖も、而かも防備
 の迄に於て用意嚴密、一点の隙きを證して餘
 りある者にあらずや、此日君が出陣せる者前後
 二回、而も共引分なりとは、君亦遺憾なりしな
 らんか、

小手、洞 中野村 與一君
 洞 木村 義郎君

木村君は、例に由て實着優雅に過ぎ、遂に平常纏
 蓄せし技量を、此晴れれ場處お振る得ざりしハ、
 重々も君の爲に惜しむ處、

× 洞 德田 虎雄君
 洞 大石 雄輔君

一躍先輩を抜けて四級に進みし雄輔君が、尋中
 の對敵不參の爲先、遂に同學德田氏と戦ふの止
 むを得ざるに至りしは、氏に於て張合のぬら
 る少々からざりしなるべし、然れども德田君は、

無聲堂にこそは、顔を出さざれ、劍客石川龍三氏
 の實弟にして、夙に其堂奥を窺ふとの噂あるの
 人、大石氏には恰好に敵手あるべし、されば其
 戦、中々目覺ましく、雲騰虎嘯の慨ありしとは云
 ひ、技の相如く處遂に雌雄ハ引分の中に葬られ
 終りぬ、

面 廣松甚太郎君
 小手、小手 倉茂 範行君

廣松巡查と云へは、去歲我無聲堂お大氣焔を吐
 けたる人、而かも今年之連戦連勝の奇驕兒を以
 て滿校に頌せられたる範行君に對せし事なれば
 、用意一段周到に見受られたり、而も用意周到
 は反て心氣の平衡を失ひ、兎角打太刀の急に過
 ぎしは未だ練膽の至らざるが爲か、之より引き交
 へ、倉茂氏は、優に落ち付さざる態度勇ましく、
 小手亦小手を以て啞撃し、遂に廣松巡查を倒し、
 流石々々の威名を博せしハ、例に由て御手柄、

面 警松尾 金吾君
 而、突 押原 三吉君

彼は鬚髯々たる老壯士として、之は白袴朱胴
 け少年あり、而も兩々面を蔽ふて立侍や、凜然と
 る姿調、共に兄た難く弟たり難き者、初め押原
 君先づ面を取られて突に之を反玄、今や双方獅
 子奮迅の勢、氣合は將に一百度れ高さよ達せん
 とする一殺那、機敏あるか否、敵れ虚見透のせ
 し押原氏は、茲得と賢しと打下せし面れ叫び
 は、確よ松尾君の眞甲切割り恰も獅子一吼し
 て萬獸愕伏するの姿ありしは、敵も味方も均く
 欣する處、

× 逢坂元吉郎君
 稻垣文二郎君

逢坂君は、何處迄も機敏にして、稻垣君ハ何處迄
 も老巧なり、機敏と、老巧との戦、識さず誰れり
 獲鹿の名を博する者か、稻垣氏と逢坂君の試合
 振のズルキハ、既に目撃せる者、逢坂氏如何にア
 セルと雖も、遂に其得手なる小手を得せまめざ
 りしハ、茲稻垣君の特色ある處、君二度迄面を襲

ふて流れ漸く三度目に面を獲て、今や一刀乃下
 り切り伏せんと力む折しも、審判者の引分けを
 命じぬ、稻垣歎して曰く「吁、我事止みぬ」と、さ
 もあふなんか、戦ぬ者四分廿秒、
 洞、面 警廣松甚太郎君
 面 平田 久忠君
 平田君老いたりと雖も、往年の威氣猶ほ衰えず、
 能く壯猛なる廣松查公をして、汗を絞らせし手
 段、中々豪、敗れたりと雖も見事、
 豫定の番組格し終りて、漸く四時半、茲にて暫時
 休息、精勤證、及び進級證書を授與す、當日進級
 せざる左の如し

阿部政次郎 曾我部俊雄 田中鷹太郎
 岸 重次 松原 武 田村安太郎
 隈川 豊 中野 深 竹村榮太
 小篠正梯 鳥海太郎 保坂正次
 大島辰之助 今西良雄 長谷川 葛
 右五級へ

押原三吉 五級 倉茂範行

中桐虎炳 五級 大石雄輔

五級 橋本新太郎 五級 田中正一

右四級へ

授與し終りて茲に番外試合は演せられぬ、先づ

山下 齊次君
松原 武君

兩君の銃槍試合が始まりぬ、我校体操課目中堂々銃槍試合の名を署しありと雖も、殆んど有名無實、從て此技に於て、左程得意ある者あると聞かず、右兩君の如きは稍々出色な譽ある者、之は次で

～雨夜 講師
岩崎柔道教師

の雨術試合あり之れ亦異數とし均しく奇とする處、況や兩夜講師の老巧ふとる試合様、岩崎先生の獅吼然たる掛聲、何れ愛嬌の種子あわぶざる、衆庶觀覽の士が拍手以て之を迎へしも、蓋し此愛嬌ある点にありからんか、

面 廣瀨武英君(竹刀)
突、面 宮川体操教官(銃槍)

竹刀と銃槍、所謂流義違ひの者にして、又各々特色ある者、異流の試合己に衆の珍らしとする處、況や兩氏 各々其術に達能の士なるに於てや、蓋長柄の銃槍を以て、能く短身の竹刀を對し、短さを以て長さを制す、必ずや格段ある秘術の間小存するなくんばあらず、而して兩氏能く之を知る者、宮川氏之敵を遠ざけて、啞嗟の間小之を討せんとし、廣瀨氏は突進急撃、手元へ直截して、之を伐らんとする者、彼は進取策を利とし、是は防衛策を便とする者、戰術己に異なる、試合焉々活動せざらんや、從て西へ追ひ、東に避け、南に隠れて北に現われ、縦横無盡に切り廻る様、眞に胡蝶龍車の舞ふが如く、快絶亦壯絶而うも餘威一さび溢れて、賞品授與處のテーブルを倒し、今井教授をして、勿違せし先、二び發して來賓諸氏の頭上に冷汗を獲がしめしが如きは、又

滑稽からずとせんや、斯る強敵に對し、斯る間斷なき戰ふ於て、巧み面と突とを利しとる宮川教官のお手柄、中々に高しと云ふべし、終て左の諸師範家の試合ありた、

- 一 水野 一刀 流 桑原 武英 勝
- 一 水野 真法 一 傳 流 石川 龍三
- 一 小 栗 現 流 都賀 四茂 穂
- 一 水野 一 傳 流 廣瀨 武彦
- 一 神道 無念 流 國下 他 作
- 一 水野 眞法 一 傳 流 石川 龍三
- 一 水野 一 傳 流 柳田 信行
- 一 神道 無念 流 國下 他 作
- 一 水野 眞法 一 傳 流 柳田 信行
- 一 水野 一 傳 流 柳田 信行
- 一 小 栗 現 流 都賀 四茂 穂
- 一 水野 眞法 一 傳 流 石川 龍三
- 一 小 栗 現 流 都賀 四茂 穂

皆是嘗て關八州を足に穿きて六十餘州を肩よせし武者あらずんば、則ち道場を開て遍く後進を勳掖し玉ふ師範家と試合、されば虚實の法、分身の術、此如き云はずもがな、劍是心、身是膽、中々吾輩黄口兒の是非し得べき限りにあらず、就中

國下秦兩先生と試合は、半千門弟子の均しく羨仰敬慕せし處、所謂身外心を宿し劍端神を吐く者、味ひ來れば一切皆空と歸す、正ふ一卷の禪經を繙くの感ありた、

諸先生の試合終りしは實お午下六點鐘、寒天霜氣を満たして妖星輝々只測候處上赤班の灼爍るを觀るのみ、

二月中浣

豊

泉

妄批死罪



投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたり
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せき
- 一 雜誌上より雅號のみを記載するを許せども姓名を必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありとて勿論會の或は政治を論じ或は徳義に背くもの一切掲載致さざるべし

明治三十一年六月九日印刷
全 年六月十三日發行

編輯兼發行者

内 藤 昌 太 郎

印刷者

月 岡 眞 備

發行所

第四高等學校北辰會

印刷所

活版合資會社

金澤市高岡町三十四番地

金澤市上松原町紙屋小路一番地源岡芳

金澤市野田寺町五丁目卅二番地今川昌治芳

(明治二十八年二月二十七日内務省許可)